

厚生科学研究費補助金(子ども家庭総合事業)

分担研究報告書

社会環境が結婚・出産・育児に及ぼす影響に関する研究

分担研究者	高野 陽	日本子ども家庭総合研究所母子保健研究部長
研究協力者	小山 修	日本子ども家庭総合研究所研究企画・情報部長
	宮原 忍	日本子ども家庭総合研究所母性保健担当部長
	水野清子	日本子ども家庭総合研究所栄養担当部長
	加藤忠明	日本子ども家庭総合研究所小児保健担当部長
	千賀悠子	日本子ども家庭総合研究所母子保健部主任研究員
	齋藤幸子	日本子ども家庭総合研究所母子保健部主任研究員
	斉藤 進	日本子ども家庭総合研究所母子保健部研究員
	大賀英史	日本子ども家庭総合研究所嘱託研究員
	小野寺伸夫	国際学院埼玉短期大学教授
	千葉 良	仙台赤十字病院小児科部長
	大日向雅美	恵泉女学園大学教授
	山岡テイ	情報教育研究所代表
	神宮英夫	明星大学教授
	大島恭二	東洋英和女学院大学助教授
	島内憲夫	順天堂大学助教授

研究要旨

子どもの健全な発育発達や健康とQOLの向上、その親の個人生活の向上を図ることを視点として、子育て中の親のニーズについて、保育園児の保護者に対するアンケート調査と育児グループの母親や各分野の専門家からの聴き取り調査により検討した。直接的な育児負担の軽減には多様性のある保育サービスのニーズは大きく、これと同等に生活全般の利便性を向上させるための公的・私的支援が必要であること、子どもの発育発達や健康に関する知識と情報の適切な提供、親個人の問題の解決に必要な専門的な相談体制の確立も必要であることを確認した。また、家庭や社会における性別による格差に対する不満感や不公平感の是正を図ることなどの社会と雇用の改革も求められる。さらに、保育の向上を図るための保育者への支援によって、子育て支援に間接的な対応も可能となることも指摘され、公私併せた子育て支援体制の確立の重要性が強調できる。

A. 研究目的

少子対策の確立には、単に多産を目指すことのみでは不完全であり、また、それだけでは十分な効果は期待できない。また、今日、子育ての実践においてに発生している問題の多くは、少子化が背景にあることも指摘されることから、よりよい育児の実践により、子どもの健全な発育発達と健康の保持増進を保障し、親自身の生活の充実を図るためのニーズを把握し、少子対策としての方策の確立を目的として多角的な調査を実施することにした。

B. 研究方法

昨年度において実施した保育園児の保護者に対するアンケート調査に記述された自由記載の分析とその結果に基づく新たなアンケート調査を、全国的規模において保育園児の保護者を対象に実施した。

また、各地の育児グループに属する母親やその指導的立場にある人材に対する聴き取り調査、小児保健学・児童福祉学・心理学・保健行政学・教育学及び健康教育等の各分野の専門家からの聴き取り調査を実施した。

C. 結果

C-1 社会環境が産・育児に及ぼす影響について-平成10年度「子育てに関するアンケート」自由記載回答の質的分析結果より-

1. はじめに

平成10年度に行った「子育てに関するアンケート」調査において、「子育てをしていて、日頃感じていること。行政への要望」などの意見を自由記載で求めたところ、男性478人(12.8%)・女性1098人(25.2%)、計1,576人の回答者(全体の20%)の記載があった。自由記載では、本調査ですくい上げられなかった問題点が、回答者の生の声として現れている点が貴重である。また、本調査でも設問した内容がさらに記載されている場合はその切実さ・緊急性の度合いが強いと解釈できよう。これらの意見を活かし、今後の少子対策に活用していくために、以下の目的・方法に従って、分析を行った。

2. 研究目的

1)平成11年度の研究内容に反映すべく、設問調査ですくい上げられなかった問題点や今後の課題を抽出する。

2)問題点のみならず、子育ての喜びやメリット、有効な施策など、プラス面をも明らかにする。

3)社会環境の子育てに及ぼす影響をハード領域・ソフト領域それぞれに体系的に整理する。

3. 研究方法

意見の多少を問うのではなく、新たな観点や緊急に取り組むべき課題の抽出を目標とした。まず、全体を次のように大別した。

1)子育てに関する現状の困っていること、不満と要望をあげた否定的意見「社会環境の問題点の記述」

2)子育てしていく上での親個人としての悩み、喜び、子どもへの想い、周囲の支援や自分の置かれている状況への感謝など「個人的な現状についての記述」前者

1)を物理的な環境問題(ハード領域)と精神・風土的環境問題(ソフト領域)に、さらに中分類・小分類に分け、表1のごとく整理した。

4. 結果

4・1. 社会環境の出産・子育てに及ぼす問題点について

1) 物理的な環境に関する問題点

施設・制度などハード領域についての記述内容はその一部を表2に例としてあげた。

(1) 子育てに関する経済負担について

1.1.1 医療費

・子どもの医療費については、「控除年齢を引き上げて欲しい」など補助の拡充が求められていた。また、地域による補助の格差の指摘もあった。

・「妊婦健診を無料に」「出産の費用が高い」のほか、「不妊治療を健康保険で」との希望があった。

1.1.2 保育料

・「高すぎる」という意見や「安くして欲しい」という軽減の希望が多かった。「0歳児保育料が高い」ことは、運営側からすればコスト面から当然とも言えようが、利用側からすれば2人目出産のハードルである。

・「夜間保育の保育料が高い」など、認可園の保育時間帯で親の勤務に対応できない場合、認可外施設を利用したり、二重保育や夜間保育を利用するために特に負担が大きくなっていた。

・保育料の地域間格差に対する不満や、親の収入によって差をつけることへの反対意見から、「保育料を一律に」という希望がみられた。

表1 自由記述内容の分類項目別件数

大分類	中分類	小分類	内容	男性	女性	合計	
1.物理的な環境 (ハード領域) 1,149件	1.1.子育ての経済的負担	111	医療費(子どもの医療費、出産・不妊治療の費用)	15	66	81	
		112	保育料(高い、格差の是正)	32	98	130	
		113	教育費など	17	45	62	
		114	減税・手当での希望	26	46	72	
		115	その他経済全般(生活費、ローン)	12	72	84	
	1.2.就労環境	121	育児休業関連(期間延長、所得保障)	3	11	14	
		122	残業・時短・フレックス制	5	21	26	
		123	雇用の安定・再就職支援	1	9	10	
		124	その他就労に関わる全般的意見	22	17	39	
	1.3.生活環境 (公的)	131	保育環境(保育園の数、保育のメニュー、質など)	51	281	332	
		132	公共施設(公園・学校・病院など)の整備	24	65	89	
		133	福祉制度や公的サービスの充実(年金、子育て支援)	66	43	109	
	1.4.生活環境(私的)	141	住環境	4	17	21	
	1.5.ハード領域その他	150	ハード領域に関するその他・全般的意見	48	33	81	
	2.精神・風土の 環境(ソフト領 域) 504件	2.1.社会全体・地域社会	211	差別的風土(女性、障害者、未婚の母など)	5	75	80
212			子どもや育児中の親への理解や配慮の不足	2	115	117	
213			行政窓口などの対応	6	14	20	
214			社会不安(暴力・犯罪・偏差値教育・学歴社会)	18	45	63	
215			教育力・養育力の低下(個人および地域)	50	72	122	
2.2.企業内		221	子育てに不利な企業体質・慣行・風土	2	22	24	
		222	女性の立場	1	11	12	
		223	男性の立場	6	18	24	
2.3.家庭・家族		231	夫婦の関係	2	19	21	
		232	親(子どもの祖父母など)との関係	2	5	7	
2.4.ソフト領域その他		240	ソフト領域に関するその他・全般的意見	5	4	9	
3.個人領域の記 述 333件		3.1.子どもや子育てに ついて	311	子育てに関する悩みなど否定的記述	5	83	88
			312	仕事と育児の両立に関する悩み	4	14	18
	313		育った環境と現在	1	9	10	
	314		子育て観・教育観	33	2	35	
	315		子どもへの思い・伝えたいこと	20	11	31	
	316		子育ての楽しさ・喜び・得られたもの	21	85	106	
	317		周囲への感謝(両親・保育園・職場など)	4	41	45	
	4.その他 129件		411	その他の記述(主義・主張など)	18	21	39
	412	アンケートについて	48	46	94		
合計			579	1536	2115		

・学童保育の保育料が高いという意見と地域間格差の問題もあげられた。

1.1.3. 教育費など子育て費用全般および生活費:

・教育費ほか、「子育てにお金がかかりすぎる」という意見が多い。

・生活費全般としては、「経済的に苦しい」理由に住宅ローンや不況による影響などがあげられた。

・このような現状に対する経済支援としては、「子育て減税」「児童手当の延長」や親への手当を望む声があげられた。

・一人親への支援の拡充の希望もあり、「離婚訴訟中の期間の生活費」や「父子家庭の母子家庭との違い」など、不公平感とともにきめ細かい支援の要望があげられた。

1.1.4. その他

不況などによる経済的な厳しさの現状は深刻であり、第3子を望みながら、経済的理由で断念した例もあった。

(2) 就労環境

「仕事と育児の両立のための総合的支援が必要である」という意見に代表されるが、分類項目別にあげると以下の通りである。

1.2.1. 育児休業関連

・現在育児休業法に定められている1年の休業期間を「延長してほしい」「休業中の所得保障」などさらなる制度の拡充を望む声があった。また「男性にも取得を義務づける」という意見もみられた。

・出産後の育児休業とは別途、「子どもの病気の時の看護休暇」の希望があった。

1.2.2. 勤務時間の短縮など

・「就業時間の短縮」「残業のない体制」「フレキシブル体制」などの希望があった。

・自営業者からはゆとりをもって子どもと過ごす時間がとれるよう、国民的休日の増えることへの希望があった。

1.2.3. 雇用の安定・再就職

・「自分の将来が心配」など就業継続の不安があった。
・育児期間後の再就職・復職を希望する人もあった。

(3) 公的環境(公的施設やサービスについて)

1.3.1. 保育環境

・保育園については、まず数と時間的対応の不足があげられていた。「保育園が足りない」「土曜も1日保育を」ほか・休日・夜間の保育が求められていた。延長保育は0歳児から対象とすること・学童保育の時間延長も望まれていた。

・病院や企業など事業所内保育所の希望もあった。

・「病児保育の取り組みを早くして欲しい」「園に病児保育室を併設して欲しい」など病気の時の対応については切実であった。

・「リフレッシュや趣味のため」「母親が病気の時」など就業以外の理由でも預かってもらえる一時的保育の希望があった。

・「安心して預けられる環境が欲しい」など、保育の内容面にかかわることもあげられ、「細かい気配りができず気の毒」など保育者の立場にたって増員を望む声や「保育者が母性神話を信じている」など疑問があがった。

・運用上の問題では、「いつでも誰でも入所できる」という希望のある一方、「本当に必要な人だけ利用すべき」という意見もあった。入所の優先順位に対する不満もあげられた。

1.3.2. その他の公的施設の整備

・「子ども連れで出かけられるところが欲しい」など親子で利用しやすい施設建設の希望と、「男性トイレにもおむつ替え用ベッドを」など般の施設が親子つれでも使い易くなるよう望む声があった。

・「安全で広い公園が欲しい」ほか、子ども向けの施設(公園・図書館・児童館)では、制限をつけず自由に使えることが希望としてあげられた。

・道路の安全、特に保育園の周辺など安心して通れる広い道(ベビーカーが通れること)が望まれている。高齢者・障害者(児)が安心して暮らせる社会を望むという記述もみられ、公共部分のバリアフリーの要望と受け止められる。

・学校や教育制度について、教育内容や教師に関する疑問、少子化に伴う学校の統廃合問題などがあげられ、近い将来の子育ての不安が現れていた。

1.3.3. 制度やサービスの拡充

・「PTA活動・地域活動など子どもを持つために課せられる社会的負担はきびしい。税金をあげてもサービスを充実させてほしい。」という意見や、各種窓口など行政サービスについては、「働く親が仕事を休まずに利用できること」の要望があった。

・「高齢者・障害者(児)が安心して暮らせる社会を」との声には、万一の時の保障が求められているといえる。「老後や万一の不安がなくなれば、現在の負担に耐えられる」との意見があった。

・「子どもに負担のかからない年金制度を」「専業主婦は優遇されている」などの「税制・年金制度を平等に」との声があった。年代別、家庭形態別、有業無業別、

未既婚別、子どもの有無別などによって負担や恩恵の差があることに、経済的不公平感を感じている。

(4) 私的生活環境

1.4.1. 住環境

・「家が狭い」ことの不満があげられ、「子どもがいても周りに気兼ねせずのびのびできる住環境」が求められていた。

・「両親と同居したいができない」「実家が遠い」など、親との関係を保つのに不都合な状況もみられた。

(5) ハード領域その他

・「公害問題」や「環境汚染」など自然環境の悪化が子どもを育てることへの不安を招いている。

・「国や社会はなにもしてくれないことがわかった」「今の日本の社会をみていると、子どもを産んだ事を後悔している」など国や社会のあり方に絶望感があり、子どもをもって、それを強く感じたという意見があった。

2) 精神・風土の環境(ソフト領域)

精神や風土に関するソフト領域についての記述内容はその一部を表3に例としてあげた。

(1) 社会全体・地域社会

2.1.1. 差別的風土

・「社会全体の価値観が変わらなければ、子どもは増えない」との意見に代表されるが、社会般の「子育ては女性の仕事」という男女の固定的役割分担意識や、「ひとり親に対する偏見」「障害児や女性の立場の弱さ」などがあげられた。

2.1.2. 子どもや育児中の親への理解や配慮の不足・「女性だって疲れるし、ゆっくりしたい」「育児中の母親は、自由な時間がなくて当たり前という周りの態度がづらい」など、育児中の親への理解・配慮の不足している様子が分かった。

・子どもが伸び伸びと過ごすことへの周囲の理解も乏しく、親は常に気を使っている状況もみられた。

2.1.3. 行政窓口の対応について

・各種手続きや相談などで窓口を訪れた時の対応については、「対応の冷たさにとっても心痛んだ」など、問題点があげられた。

2.1.4. 社会不安

・「いじめや学級崩壊」などの教育問題や学歴社会・犯罪の増加に対する不安や不満、情報化社会の弊害もあげられ、「現在の社会状況や子どもの将来を考えると子どもを産むのを躊躇する」という意見がみられた。

2.1.5. 教育力・養育力

・「無責任な親が多すぎる」「保育者や教師が理想をも

っていない」など他の親や学校・地域社会の教育力の低下を指摘する意見があった。親への支援として子育てセンターや相談室の要望、学生時代からの教育の必要性もあげられた。

(2) 企業風土など

2.2.1. 出産・育児に不利な慣行・風土

・企業内における子育てに不利な慣行・風土としては、法律が制定されていても、「育児休業が実際にはとりにくい」状況、復帰後は「子どもの病気や学校行事などのための休暇がとりにくい」状況があげられた。

2.2.2. 女性の置かれている立場

・男性優位な企業体質は女性から指摘された。
・女性の置かれている環境としては、「妊娠中は同じようには働けないことを理解して欲しい」など妊娠中や子育て中であることへの周囲の理解や配慮の不足があげられた。労働基準法の女子保護規定撤廃についての不安もあった。

2.2.3. 男性の置かれている立場

・男性の置かれている環境としては、「子育てを理由に休んだり早く帰ることが女性以上に難しい」企業体質の実態があげられた。

(3) 家族・家庭環境

2.3.1. 夫婦関係

・対象者をとりまく家庭の問題としては、「夫が育児を分担してくれない」など夫婦間の家事・育児分担の問題があげられた。「パートナーが未熟ですべてひとりで負担せざるを得ない」など、精神的に未熟なパートナーを持った場合の子育ての困難さは、父母いずれのケースも認められた。

2.3.2 親(子の祖父母)との関係

・親(子どもの祖父母)との関係では、「支援を頼らざるをえないが、育児方針が異なり困っている」などの問題があげられた。

4-2 個人的な内容の記述について

1) 子ども・子育てに関する悩みなど否定的意見

「今の経済社会状況では、精神的余裕がなく子育てを楽しめない」「子どもが好きになれない」「子どもを持つことがハンディと感じる」「子どもはいないほうが楽。少ない方が楽と考えてしまう」「子育てに対して自己嫌悪を感じている」「自分の時間が欲しい」「金銭的にゆとりがないからイライラする。悪いと思いながら子どもに手をあげている」「親に休みを与えない子どもなんて、いないほうがいい。行政、社会は全く協力的

ではない。」など、様々な想いが語られた。子どもを持ったことを後悔し、そう思う自分への失望感があり、これ以上子どもを持ちたくないとしている。背景には社会環境の影響が垣間見られる(表4)。

2) 育児と仕事の両立に関する悩み

「共働き状態の維持と子育ての充実に悩む」「仕事と子育てを天秤にかけてしまう」「子どもを持つか否かも迷い、職場への迷惑を考えてしまう」「仕事は自分自身の生きがいでもあるのに、母親は子どものために我慢を強いられる」「働いている事に充実感を感じているので、もう一人産む事はとても考えられない」など、仕事と育児のバランスで悩む様子が伺えた。(表5)。

3) 対象者が育った環境についての記述

「自分の子ども時代、窮屈な思い出が多く、子どもを欲しがらない気持ちにつながっているのではないか」「安心した子ども時代を過ごして来なかった人が親になっても子どもを持つ自信が持てない」など、過去の問題が現在の子育てに影響していると自ら考えている例があつた。一方、自分の親を反面教師として現在の育児に意欲的に取り組む姿もみられた。

4) 子どもを持つ喜びなど子育てに関する肯定的記述

子どもを持つ喜び・楽しみ・豊かさ・子どもの存在への感謝など「手放しの肯定的意見」と、「他のことを犠牲にしてもよいと思えるようになった」「経済的に苦しいことは苦にならない」「忙しいが充実している」など「苦勞を上回る子どもの存在意義」が語られた(表6)。

5) 子どもへの想い・メッセージ

どのような人に育って欲しいか、子どもへ伝えたいことや、子どもとの生活の現状が語られた。

6) 家族など周囲への感謝

「夫の協力で育児が楽しくなる」「祖父母が手伝ってくれ助かっている」など感謝の気持ちが語られた。

7) 職場や保育目への感謝

「看護休暇、6歳までの特別勤務制度があつた職場に感謝」「保育園の先生に子育てを教えてもらった」など、公的支援の効用が現れていた。

5. 考察

これまでにあまり議論されていない領域で、少子傾向の原因と思われるキーワードについて検討する。経済・社会保障面の支援拡充は繰り返し強調される必要があるが、ここでは直接的な育児支援策に関する問題に重きを置くこととする。

1) 子育て中の親の不公平感

保育所に入所できる優先順位について不満感があり、保育料に関しては地域・親の収入・子どもの年齢・親の勤務時間体制によって負担が異なることについて、不公平感が認められた。当然のように扱われてきたこの格差は、現在育児中の人たちの現状不満の源となっている。また、年金・税制など世代別、家庭形態別、有業無業別、未既婚別、子どもの有無別などによって負担や恩恵の差があることに、経済的不公平感を感じていた。子育て中の親が納得できる説明または是正が必要である。

2) 保育内容、保育の質、保育園の役割・親との連携

保育環境に関してはメニューの充実がますます重要な課題であるといえるが、開かれた保育園に変容していく途上にある現在の保育環境において、保育サービスを必要としている緊急性の高い人達のニーズを確実に満たしていくことが大切である。通常の保育園の開園時間と異なる勤務体制の自営業・サービス業に携わる親への支援のあり方は、一層の検討が必要である。

また、親の勤務時間に合わせるだけでなく、「安心して預けられる環境が欲しい」との記述にみられるように、子どもの発育・発達を保障する保育の質が問われているといえる。保育園と親との連携については、保育園の行事や役員などを親が負担に感じているケースもあり、保育環境に関して親が主体的にかかわれる条件整備が望まれる。

3) 育児中の親の精神的サポート、相談体制の専門性

親の個人的な記述「仕事と育児の両立に関する悩み(表5)」や「育った環境」についてみると、両立のための環境整備も必要であるが、個人の生き方の問題としての適切な精神的サポートが育児負担感の軽減に有効ではないだろうか。子どもに関する問題のみならず、親個人の問題をサポートするためには、プライバシーが守られた多方面の専門家体制が必要である。

4) 親族による支援の限界と公的支援のあり方

本調査の設問で、子どもの世話を祖父母に頼む割合は70%に及んでおり、共働き世帯の子育ては祖父母の援助で支えられているのが実情であった。希望する人が親と同居できる住居環境も必要であるが、他方、若い世代が親に頼らず育児ができる生活支援の整備をすることが重要である。家族の問題は、個人的でありながら実は社会規範などの環境要因に影響されていることは言及するまでもない。個人的問題として抱え込まず、社会的支援を取り込む家族の開放性など、少子時代における新しい家族のあり方を模索していくことも

必要であろう。

5) 雇用環境の改善、社会(企業)の価値観の変革

男女ともに育児と両立しにくい企業内の風土が示された。休業期間の延長・再就職の斡旋・男性の育児休業取得促進・休暇中の所得保障などの希望があがり、男性・女性それぞれのキャリアやライフデザインに応じて、さまざまな選択が可能となるような制度が望ましい。

妊娠中や子育て中であることへの周囲の理解や配慮の不足は、保健学的見地からの支援も大切である。子どもの看護や通院のための休暇については、一般的な年次有給休暇20日間では、足りなくなるのが実情であり、年齢ごとの保育園児の罹患率など保健学的検討に基づいてを施策を進めることが現実在即しているといえよう。また、同時に配慮すべきは、休みにくく、母親に片寄っている子どものための休暇取得を、父親が担当できるような職場環境への改革である。

6) 生活全般の質の向上・将来の保障

子どもの健康問題は親の育児不安や育児負担感の要因となっていることが本調査の設問で明らかとなっているが、医療費負担による経済不安をかかえた家庭はさらに危機的状況といえる。医療費補助を含めた健康支援は育児中の家庭支援の根幹として重要である。妊娠・出産・不妊治療に係る医療費については、医学の進歩に伴い、リプロダクトヘルスの視点で、親となる人たちへの健康支援のあり方を常に検証していくことが大切である。

子育てしやすい環境の整備としては、公園・児童館などのハードの充実とともに、開設時間を延長するなどの運用面で既存の施設をより有効に使えるようになることが、住民へのサービスの向上に繋がるであろう。公的サービスの窓口などは、働く親が利用しやすい運用を図ることで、育児・仕事以外の負担を減らし、ゆとりある育児へと繋げることができる。また、年金や税制における不公平感を無くし、万一の保障など将来に渡る安心感が、現在の子育ての支えとなるのことが分かつ右教育問題や凶悪犯罪の増加などは子どもを産むことを躊躇させるほど親を不安にしており、まさに社会全体の質の向上が求められている。ハード・ソフト両領域の社会的養育力(社会の次世代育成力)が問われているといえよう。

6. 小括

膨大な量の記述を紙面の許す範囲でまとめるためには、かなりの部分を割愛せざるを得なかった。しか

し、当初の研究目的に添って、以下の通り問題点が抽出できた。主なキーワードは次の通りである。

- 1) 子育て中の親の不公平感
- 2) 保育内容、保育の質、保育園の役割・親との連携
- 3) 育児中の親の精神的サポート、相談体制の専門性
- 4) 親族による支援の限界と公的支援のあり方
- 5) 雇用環境の改善、社会(企業)の価値観の変革
- 6) 生活全般の質の向上・将来の保障

以上から、当研究班の分担領域としては2)保育内容、保育の質、保育園の役割・親との関係、3)育児中の親の精神的サポート、相談体制の専門性を、主軸に本年度の研究を進めることとした。

様々な葛藤をもちながら、懸命に育児に取り組む親達すべてにとって、「子育てに関する肯定的意見」であげられたような喜びや充実感が得られるよう、支援体制の充実に向け、さらに検討を進めていきたい。(齋藤幸子・宮原忍・千賀悠子)

表2 物理的な環境(ハード領域)についての記入例

<p>1.1. 子育てに関わる経済負担</p> <p>1.1.1 医療費</p> <ul style="list-style-type: none"> ・医療費控除の年齢をもっと上げて欲しい ・妊娠中の検診料を無料に ・出産の費用は保険がきかない、高い。 ・不妊治療を健康保険で出来るようにして欲しい。 <p>1.1.2 保育料</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育料が高い。 ・保育料の地域差が大きい。 ・保育料を一律に(所得による差をなくす)。 ・無認可や24時間保育は高すぎる。 ・学童保育の費用が高い。他県との格差がある <p>1.1.3 教育費など</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育にお金がかかりすぎる。 ・子育てはお金がかかる。 <p>1.1.4 税制・手当</p> <ul style="list-style-type: none"> ・税金をもっと安くして欲しい。 ・子育て減税があると良い。 ・児童手当を、小学校卒業まで延長をしてほしい。 ・親に、政府が給料を払う位のことが必要。 ・母子家庭の援助基準が厳しい。 ・母子家庭・父子家庭の援助基準がおかしい。 <p>1.1.5. 経済に関するその他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・経済的に苦しい ・ローンの返済がある。 ・仕事が不況。 <p>1.2. 就労環境</p> <p>1.2.1. 育児休業制度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・育児休暇をもう少し長く取りたい。 ・産休・育休制度を拡大し、休業中の保障があるとよい。 ・子どもの病気時に休める体制がほしい。 ・男性にも育児休暇を義務付けるべき。 <p>1.2.2 残業・時短</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フレキシブルな勤務時間制に ・残業で二重保育を強いられた。残業のない労働条件の整備が必要 ・勤務時間の短縮を検討して欲しい。 <p>1.2.3. 雇用の安定・再就職保障</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子育て後再就職できるとよい。 ・復職できるとよい。 ・自分の将来が心配だ。 <p>1.3. 生活環境(公的)</p> <p>1.3.1. 保育環境</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育園が少ない ・保育園の充実・拡大(制約、制限が多すぎる) ・企業内保育園があったほうがよい ・土日、祭日も保育をして欲しい。24時間保育を望む ・安心して子どもを保育してもらえたい環境が欲しい。 ・障害児は保育所に入りにくい。 ・保育者の増員。細かい事に気配りできず気の毒。 ・病児保育に早く取り組んで欲しい。園に併設して欲しい。 ・保育園、学童保育の時間を延長して欲しい。 ・0歳から預かる延長保育のある保育園がもっと必要。
--

(表2のつづき)

<ul style="list-style-type: none"> ・一時預かりなど、気軽に預けられる託児所を充実して欲しい。 ・リフレッシュや趣味のために子どもを預けられたらよい。 ・保育園・学童保育は本当に必要な人に利用されるべき。 <p>1.3.2. 公共施設(公園・病院・学校)の整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもと一緒に出かけられる場所が少ない。 ・広い自由な公園がほしい。公園を増やして欲しい。 ・児童館など公共施設は自由に使わせて欲しい。 ・児童館の会館時間延長を希望。 ・地方も改善して欲しい。(公園・育児サークル・子ども向けの習い事がない) ・図書館・病院が近くに欲しい。 ・男子トイレにオムツ交換用ベッドを設置して欲しい ・自転車やベビーカーなどが、安心してで通れる道路を作って欲しい。 <p>1.3.3. 制度やサービスの拡充</p> <ul style="list-style-type: none"> ・障害者も高齢者も安心して過ごせ暮らせる社会であれば、子を産もうとする。障害児も共に暮らせる地域作り。 ・PTA 活動、地域活動等、子どもを持つために課される社会的負担はきびしい。税金を上げてサービスを充実させて欲しい。 ・子どもに負担のかからない年金制度を。 ・専業主婦は優遇されている。 ・専業主婦も支援して欲しい。 <p>1.4. 生活環境(私的)</p> <p>1.4.1 住環境</p> <ul style="list-style-type: none"> ・住宅が狭い。住宅面から親との同居も出来ず子育てしにくい。 ・周りに気兼ねせず子どもがのびのびと生活できる住環境が必要 <p>1.5. その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・手をつけてない自然を残してください。 ・環境汚染が心配である。 ・国や社会は何もしてくれないことが分かった。

表3. 精神・風土の環境(ソフト領域)の記述例

<p>2.1. 社会全体・地域社会</p> <p>2.1.1. 差別的風土</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子育ては母親の仕事という社会の意識改革が必要。 ・母子家庭で仕事をするにも差別される。未婚の母でも平等に扱って欲しい。 ・社会の中での女性の立場が弱い。 ・知的障害の息子に社会はまだまだ冷たい。 <p>2.1.2. 子どもや子育て中の親への理解・配慮の不足</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域ぐるみで支援して欲しい。 ・学童(保育)に対する地域の理解がない。 ・男性側の無理解。女性だって疲れるし、ゆっくりしたい。 <p>2.1.3. 行政窓口の対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対応が冷たく、傷ついた。 ・母親は仕事を止めろと言われた。 ・離婚したら妊娠は中絶すべきと言われた。 <p>2.1.4. 社会不安</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報化社会の弊害
--

(表3のつづき)

- ・学歴・学力偏重社会
- ・暴力・犯罪の不安
- 2.1.5. 教育力・養育力
 - ・地域や社会全体で子どもを育てようという気持ちが低下している。
 - ・無責任な親が多すぎる
- 2.2 企業内
 - 2.2.1 子育てに不利な慣行・風土
 - ・出産後、育休を取る事の非現実性。(周囲の目が気になる。自分自身がおいていかれる。)
 - ・子どもがいると再就職が難しい。
 - ・妊娠・出産・学年行事などに、もっと仕事を休み易い社会が欲しい。
 - 2.2.2 女性の置かれている環境
 - ・妊娠中は普段と同じように働けない事を理解して欲しい。
 - ・企業は男性優位である。
 - 2.2.3. 男性の置かれている環境
 - ・夫が妻を援助したくても、一般企業は利益優先で時間的に無理。
 - ・父親が育児参加できるような社会環境をつくってほしい。
- 2.3. 家族・家庭
 - 2.3.1. 夫婦の関係
 - ・夫が育児を分担してくれない。
 - ・パートナーが未熟で、すべて一人で負担せざるを得ない。
 - 2.3.2. 親(子どもの祖父母)との関係
 - ・子どもの世話を感謝しているが、見返りの期待されている
 - ・価値観や育児方針が一致しない。
 - ・子育てより親に対しての悩みが多く精神的にもまいる。どこか相談できる場所があれば知りたい。
 - ・親との同居では、気をつかうところが多いが、これも自分の仕事を続けていくためと思っている。

表4 子育てに関する悩みなど否定的記述例

- ・今の経済社会状況では、精神的余裕がなく子育てを楽しめない。
- ・2人の子どもがいるが子どもが好きになれない。
- ・子どもを持つことがハンディと感じる。子どもがいるからこんなに得をすると感じられると良いと思う。
- ・子どもは沢山欲しいが預ける大変さを思うとつくれない。
- ・子どもはいないほうが楽。少ないほうが楽と考えてしまう。
- ・子育てに対して自己嫌悪を感じている。子どもは2人欲しいが、今の状況だと知らない。自分の時間が欲しい。
- ・子どものしかり方が分からない(父として)。
- ・金銭的にゆとりがないからイライラする。長女に悪いと思いつつながら手をあげています。
- ・親に休みを与えない子どもなんて、いないほうがいい。行政、社会は全く協力的ではない。
- ・どんな子にも存在価値はあり、いとおしく可愛いのだが、有形無形の負担を思うと次の子どもを産みたい気持ちにストップがかかる。
- ・これからの生活に不安だらけで子どもを持ちたくなかったと思う。私達はそのまま生活していて大丈夫か。

表5 育児と仕事の両立の悩みに関する記述例

- ・共働き状態の維持と子育ての充実に悩む。
- ・仕事と子育てを天秤にかけてしまう。子どもを持つか否かも迷い、職場への迷惑を考えてしまう。
- ・子育て中の就業について改善の必要があると思う。仕事も大事だが、両親、特に母親が家にいることも大事だと思う。
- ・仕事は自分自身の生きがいでもあるのに、母親は子どものために我慢を強いられる。
- ・出産は自分が子どもの犠牲になるか、子どもが自分の犠牲になるかどちらか。やり直せるなら、私は多分子どもは産まない。
- ・子どもは兄弟を欲しがっているようで可愛そうだが、働いている事に充実感を感じているので、もう一人産む事はとても考えられない。
- ・子どもが病気の時に休まなければならないので、重要な仕事からははずされている。精神的自立のため続けたい。

表6 子育ての楽しさや喜びについての記述例

- ・子どもとの沢山の楽しい出来事に感謝。子育てで、親として学ぶ事は多い。
- ・子どもは家庭に幸せを運んでくれる。
- ・大変だが毎日がたのしい。
- ・家に帰ってくるのが楽しみ。
- ・子どものいる暮らしは、喜びや豊かな感情に恵まれる。社会全体は子どもとの生活にマイナスイメージを持っていると思う。
- ・子どもを産めた事に感謝している。
- ・子どもは宝物。子育てしやすい社会を。
- ・子ども産んでよかった
- ・小さい子どものいる暮らしは何もなくとも楽しいし喜びに満ちている。
- ・子どもを産み育てると言う事は、独身では経験できなしい世界を見せてくれ、すばらしい事。
- ・独身時代「子どもなんてうるさいだけ」と思っていた私に、心の豊さ、喜びを与えてくれた。
- ・2度と帰ってこない子育ての時間を楽しみながら共に成長したい。
- ・成長するにつれ、苦勞を忘れるほどの幸せをくれる。
- ・経済的に苦しい事は、苦にならない。
- ・「子どものために」と思わず、「子どもという自分のために」と思うようになった。子育てで、少々仕事や家事を犠牲にしても仕方ないと思うようになった。
- ・子育てで毎日忙しいが、忙しいのがすごく楽しいし、子どもが家族ってすごく生きる励みになる。
- ・保育所へ預けているおかげで、仕事も思いつきりでき、帰って子どもと思いつきり遊ぶ。毎日充実している。
- ・弟妹はお姉ちゃん(障害児)にとってもやさしく、子育てに生きがいを感じる。
- ・子どもと一緒に親も成長した。何も知らなかった分、他の子と比べたりする事もなく安心で楽しい。
- ・子どもが4人いるが、上が下の面倒を見ることが自然に出来る。
- ・子どもの顔を見ていると辛いことも苦しいことも忘れさせてくれる。

C-2 平成 11 年度「子育てに関するアンケート調査」結果

1 調査の目的

前項 C-1 平成 10 年度「子育てに関するアンケート調査」自由記載の分析で抽出したキーワードのうち、「保育園における保育の内容と質」「養育者への精神的サポートのあり方」などに焦点を当て、今後の子育て支援のハード・ソフト両面の方向性について検討することを目的とした。

2 調査方法と対象

1) 調査内容

調査の内容は以下の通りである。

- (1) 対象の属性
- (2) 対象者の子ども(保育園児)の属性
- (3) 子どもに関する気がかりとその相談先について
- (4) 子どもの発育・発達に関する知識を得る機会について
- (5) 保育園のあり方に関する満足度と要望について
- (6) 保護者と保育園の連携について
- (7) 親自身(対象者)の生活と心の状態について
- (8) 対象者が自分の性別をどのように受け止めているかについて
- (9) 親と子にとって必要な社会的支援について

2) 調査方法および対象

保育園に子どもを通わせている保護者を対象として、施設における留め置き法によるアンケート調査(一部、郵送による個別回収)を行った。

調査票配布数は4,112世帯であった。在園児の各世帯に「父親用調査票」および「母親用調査票」を各1部計2部ずつを配布し、一人親であることが分かっている家庭には、いずれか1部を配布した。なお、調査票の内容は父母共通とした。

調査場所の選定は有為抽出法により、首都圏および中核都市を中心に、人口増加率、生産人口割合、産業構造などを考慮し、今後の出生率増加が期待できると考えられる活力ある地域とした。この場合、各地域内では可能な限り、乳児保育や延長保育など多角的に保育を行っている施設を選び、多様な家庭が対象になるよう配慮した。調査協力を得られた施設、全国61カ所(公立2・私立59)を対象とした。調査場所リストは本稿末尾の資料編に掲載した。

3) 回収率および対象の内訳

回収したアンケートは世帯数で2,862世帯(回収率69.6%)、有効回答者数5,059人(男性2,276人、女性2,783人)であった。世帯数の内訳は二人親世帯2,412(84.3%)、父子世帯31(1.1%)、母子世帯(13.4%)、不明35(1.2%)であった。

回答のあった2,862世帯うち、父母ともに回答が2,197組、2人親世帯の男性のみ回答が23名、2人親世帯の女性のみ回答が228名、1人親世帯の男性が31名、女性が348名であった。婚姻関係が不明の単独回答者は男性25名、女性10名であった。全体の男女別集計には、以上のすべての回答者を含め以後、対象または父親・母親と称す。対象の属性については資料編(表22~26)を参照されたい。

3 結果と考察

1) 子どもの心身および発達上の気がかりなことと相談先について

(1) 対象者の子ども(保育園児)の属性

・性別:男児1,458人(50.9%)、女児1,402人(49.0%)、不明2(0.1%)
・年齢:0歳3.2%、1歳18.3%、2歳19.1%、3歳20.7%、4歳15.2%、5歳14.7%、6歳8.4%であった。
平均年齢3.04歳であった。

・世帯ごとの子ども数は、1人42.0%、2人40.8%、3人13.7%、4人1.9%、5人以上0.2%であった。出生順位は第一子が38.1%、第二子が36.7%、第三子が11.6%、第四子1.6%、第五子以上が0.2%であった(表1~3)。

(2) 子どもの心身および発達上の気がかりなことの有無について

・「気がかりなことがある、または過去にあった」親の割合は40%であり、母親が父親に比べその割合が高い(父親36%・母親43%)。

・気がかりなことの内容別にみると、身体上のことが54%・情緒などが32%であり、栄養のことが8%、発達上のことは7%である(表4)。

(3) 気がかりなことの相談先とその満足

・気がかりなことについて専門家の治療や相談などを受けたことある親の割合は57%であり、母親のほうが父親に比べその割合が高い(父親50%・母親61%)。

・親の77%(父親81%・母親75%)が小児科医にみてもらっており、診てもらった親の77%(父親75%・母親79%)が満足している。

・小児科医に不満をもっている親は18%(父親25%・母

親21%)であり、不満の理由の第一は「不安な気持ちが消えなかった」41%で、次いで「問題解決の糸口が得られなかった」34%である。

・医師以外の専門家では、保育者に相談をした親が33%(父親20%・母親40%)であり、母親が相談している割合が高い。相談をした親の79%(父親71%・母親82%)は満足している。

・また、その他の相談者に相談した親は13%、栄養士に相談したのは9%である。多くは満足しているが、不満であった理由としては、「不安な気持ちが消えなかった」・「問題の解決の糸口が得られなかった」があげられている(表4-1~3)。

幼児を持つ親にとって小児科医や保育者は身近な相談者である。そして、相談をした親の多くが、ほぼ満足しているが、気がかりなことがあっても専門家に相談していない親の割合が43%あり、気軽に相談できる諸環境が十分に整っていないことが考えられる。

また、相談して不満がある場合の理由としてあげられたのは、「不安が消えない」「問題解決の糸口が得られない」「話を聴いてくれない」あるいは「親が悪いように言われた」などがあげられており、相談を受ける専門家は親の不安や心配などを十分に聴く態度を大切にしていくことで、親の不安な気持ちを軽減することができるものと思われる。また、問題の早期発見の見地から・その対応が相談者にとって有効であったかどうかを何らかの方法で確かめることが、問題点をそのままにせず、次の段階の支援につなげることができよう。

2) 子どもの発育・発達に関する知識について

(1) 知識を得る機会の有無

・発育・発達に関する知識を得る機会があった父親は52%・母親は79%で、母親の方が知識を得る機会が多い(表5-1)。

・知識を得る機会がなかった親(1648人)では、「困ることがあるので知りたい」父親19%・母親26%、「困らないが知っていたほうがよい」父親63%・母親56%であった。また、父親の16%・母親の15%は「知らなくてもかまわない」と答えていた(表5-2)。

(2) 公的機関の「発育発達に関する知識」の情報提供についての満足度

・公的機関による「発育や発達に関する知識」について情報提供の方法に満足している割合は、満足とやや満足を合わせて61%(父親56%・母親64%)であった(表6-1)。

・不満と答えた場合の情報提供の方法については、「子どもの通っている保育園・幼稚園・学校を通じて提供してほしい」と望んでいる割合が64%(父親65%・母親64%)で最も多く、「個別指導や資料を送付してほしい」が28%(父親9%・母44%)であった。また、「講師や参加者とのコミュニケーションを取りながらの学習会を要望」が19%(父親15%・母親24%)であった(表6-2)。

知識を得る機会のあった親は、母親の方が多く、父親は約半数であった。また、発育・発達に関する知識を得る機会がなかった親の多くが知識を得たいと思っていることから、特に男性に対する子どもの発育・発達に関する情報提供の方法を検討する必要がある。働きながら子育てをしている親に対する情報提供の方法は、親が出向く講演会などではなく、知識や情報を親の手元に送る方法が望まれている。「知らなくてもよい」「自分なりの育児をしたい」と考えている親へのアプローチも含め、身近な保育園の情報提供機能はますますの充実が期待される。また、個別指導を要望している母親の割合が多いことや、コミュニケーションのある会なら参加してもよいと思っている親も少なからずいることを考慮すれば、インターネットなどによる双方向のメディアを使った情報提供の方法も有効と思われる。

3) 保育園のあり方に関する満足度と要望

(1) 1クラスの子どもの人数と保育者数

・現在の子どもの人数は最低基準を満たす結果であるが、親は1クラスの子どもの人数は各年齢において現在の子どもの数よりも少ないクラス編成を望んでいる。0歳児では7人、1歳児8人、2歳児11人、3歳児13人、4歳児15人、5歳児16人、6歳児15人であり、4~5歳の場合には、現状より1クラス5}6人少ない子ども数を望んでいる。

・希望する保育者数は、0歳児と4~6歳児において現在よりも若干多い保育者数を望んでいる(表7-1~4)。

希望する1クラスの子どもの人数は各年齢において現在の子どもの数よりも少ないクラス編成を望んでおり、4歳児から6歳児においては現在よりも5~6人少ない人数で、なおかつ保育者数を現在よりも多くして欲しいという要望がある。子どもの活動や教育など十分に対応して欲しいという要望があるのではないだろうか。

(2) 保育園児の年齢層について

・0歳児から就学まで同一施設での保育を望む割合は、父親が50%・母親が57%である。

・0歳から3歳までは同一施設で過ごし、3歳以上は他

の施設での保育を望む割合が父親 29%・母親 20%である。

・0歳児から就学後の学童保育まで同一の保育園でという要望が、父親 17%・母親 19%ある(表 8)。

0歳児から就学まで、あるいは学童保育も同一の保育園で行って欲しいという要望も少なくはなく、子どものことを把握し理解してくれている保育園で継続して保育してもらうことへの期待があると考えられる。また、きょうだいと同じ施設に在籍することは送迎など親の負担を軽減させるものである。

(3) 保育園の健康管理・健康支援

・「健康診断の回数やその内容」・「保育中の病気やけがの対応」については、父親の約 70%が、母親の約 80%が満足している。しかし、「嘱託医など医師との連携」について満足している割合は、父親 57%母親 62%である。

・「給食やおやつの内容」については、父親の 83%・母親 89%が満足している。「食事指導」に満足している父親は 75%母親 87%である。

・「子どもの健康に関する知識の提供」に満足している父親は 64%、母親は 74%である(表 11-1~6)。

保育園の健康管理や健康支援に関しては多くの親が満足しており、特に母親の満足度が高い。母親が保育園の活動等をよく知っているということであろう。健康診断や保育中の対応についての満足度は高いが、医師と連携して子どもの健康管理を行うことに関する満足度はやや低い。病気やけがなど専門的な医療等を必要とする場合、医師との連携が十分ではないということであろう。

(4) 通園している保育園で、特別な保育事業を実施することの賛否

・父母ともに賛成が多かった上位 3 保育事業は、「高齢者との交流」父親 75%・母親 85%、「卒園児との交流」父親 73%・母親 83%、「地域の親子への園庭開放」育児相談」父親 67%母親 75%である。また、「障害児保育」については母親が 73%、父親は 62%といずれも母親の方が賛成率が高い。

・父母ともに約 30%の反対があった事業は、「夜間保育」父親 27%・母親 30%、「病児または病後児保育」父親 30%・母親 29%である(表 12、12-1B~9B)。

特別な保育事業を通園している保育園で実施することについて、多くの親が賛成を表明している。しかし、夜間保育や病児あるいは病後児保育に関して反対をする親が約 30%いた。反対理由を質問していないので定かではないが、子どもの立場にたち夜間保育せずにすむように、あるいは病気の時には親が看護できるような雇用制度などの整備を望んでいるとも考えられ

る。

また、現在通っている施設ではなく、別のところでの実施を希望する場合も含まれよう。

(5) 保育の内容や、保育者の対応について

・「子どもの身体の状態に応じた保育者の対応」に満足している割合は、父親 81%・母親 87%で、「生活習慣のしつけ」について満足している割合は、父親 77%母親 88%である。また、「保育カリキュラム」に満足しているのは父親 81%・母親 84%であり、多くの親は保育者の対応に満足している。

・「心の状態に応じた対応」についての満足している割合は、父親 75%・母親 78%であり、「子どもの持ち味が大切にされている」ことに満足している割合は、父親 69%・母親 73%である。子どもの個性や心理的な状態に対する保育者の対応については、前述に比べその割合がやや低い。

・「親の子育てに対する精神的サポート」について保育者に満足している割合は、父親 64%・母親 69%である。保育者は一人一人の子どもや親のところにそった対応が十分ではないといえる(表 10-1~8)。

・保育者の「子育て感」や「人権感覚」についての満足度は、父母ともに約 70%である。

・子どもは機嫌よく保育園に通っているかどうかでは、約 90%の父母が「子どもは機嫌よく保育園に通っている」と回答しており、子どもが保育園の環境に信頼と安心感を持ち、家庭環境も安定していると考えられる割合が高い(表 13)。

保育の内容や保育者の対応について、親の満足度はかなりの割合で満たされていた。不満である場合は、よりきめ細かな個別対応を望んでいる場合であると思われる。

(6) 子どもが親と離れて過ごしている時間

・現在、子どもが親と離れて過ごしている時間は、6時間未満と答えた父親が 3%・母親が 3%、7時間が父親 12%・母親 15%、8時間が父親 22%・母親 28%と 8時間をもっとも多かった。9時間が父親 16%・母親 21%、10時間が父親 20%・母親 21%で、通常の勤務時間に通勤時間を考慮して 8~10 時間子どもと離れている割合が、父親 60%・母親 70%を占める。11 時間離れている割合は父母ともに 8%で、12 時間以上は、父親 16%・母親 4%であった(平均時間:父親 9.43・母親 8.81)。

・親が希望する時間は、6時間が父親 7%・母親 12%、7時間が父親 7%・母親 12%で、7 時間以下の希望が父親 20%・母親 31%である。8時間が父親 27%・母親 32%で最も多い。8~10 時間望む割合は父親 46%・母親 47%と、

いずれも現在の時間よりも短時間であること望んでいる傾向がある。他方、11時間以上という要望は父親・母親ともに6%であり、「何時間でもよい」との回答は、父親16%・母親12%であった(平均時間:父親8.13・母親7.62)。

・子どもにとってのよいと思う時間は、父親は5時間が9%、6時間が18%、7時間が8%、8時間が21%である。母親は5時間が14%、6時間が23%、7時間が13%、8時間が22%であった。母親の方が子どもにとっては短い時間がよいとする割合が高いが、父母ともに子どもが親と離れている時間は、現在の時間より短い方がよいと望んでいた。また、親が希望する時間よりも短くなっていた。「何時間でもよい」との回答は、父親13%・母親9%であった(平均時間:父親6.67・母親6.43)(表9-1~3)。

現在の生活において、多くの親が子どもと離れている時間は10時間以内であり、8~10時間が多くを占める。「親の希望」としては、より短時間の方にシフトしており、多くの親は6~8時間がよいと望んでいた。また、「子どもにとって」は5~8時間がよいと思っている親が多く、「親にとって」よりさらに短い方にシフトしていた。いずれも母親の方が父親より、短い時間を望んでいた。親と子が離れている時間は、多くの親が現状より短くなるのが「親にとって」も、「子どもにとって」も望ましいと考えており、時間的なゆとりをもって子育てできることを希望している。

4) 保育園との連携

(1) 保育園との連絡や子どもの理解

・保育園と親の子どものことに関する連絡方法の多くは「連絡帳」約80%であるが、「面談」もしているという父親が31%、母親が45%あった(表15)。

・「子どもの様子について園からの連絡内容で分かる」と83%の父母が回答している(表16)。

・「保護者からの連絡内容が保育者に伝わっているか」については、父親86%・母親90%がほぼ伝わっていると回答している(表17)。

・「子どものことについて保育者と保護者の間での理解が一致しているか」ということに関してもほぼ一致していると父親の80%・母親の84%が回答している(表18)。

(2) 保護者会について

・「現在、保護者会活動がある」と回答している父親は60%・母親67%である。そして「保護者会があった方がよい」は父親74%・母親76%である。

・保護者会の意味については「園との連携が密になり

保育に反映できる」と多くの親(父母ともに85%)が考えている。しかし、保護者会は不要と思っている親(父母ともに20%)あり、その理由は「保護者の労力や時間的負担が多いこと」を父親68%・母親85%があげている。また「保育は園にまかせたほうがよいと思うから」が父親29%・母親12%であった(表19~20)。

保育園と家庭の連絡はほぼ十分行われており、子どもの理解もほぼ一致している。また、保育に反映できるという理由で、保護者会活動について肯定的である親が多い。親が保育サービスを受けるといふ、受け身に構えるのではなく、保育園に主体性をもって関ることが、保育園と保護者の連携において重要である。

5) 対象者自身の現在の生活と気持ちについて

育児におけるソフト領域でどのような支援が必要とされているのか、親の生活観や子どもと過ごしている時の気持ちなどを設問した。ここでは全体の傾向を述べ、「自分は親としてよくやっていると思う群」と「思わない群」のクロス集計結果については後述する。

(1) 子どもと過ごしているときの気持ち

・ほとんどの親が「充実感があって楽しい」「子どもから安らぎを得られる」「面白いことや発見がある」と「いつも」または「時々そう思う」という肯定的感情を持っていた(いずれも90%以上)。

・しかし、否定的感情も時には持つ親も多く、「大変でどうしたらよいかわからない」と時々そう思う父親28%・母親37%「煩わしくていらいらする」父親30%・母親47%、「子どもと一緒にいるのがいやになる」父親9%・母親17%であった(表33)。

(2) 自尊感情

・「自分が好き」と答えた父母はともに51%であった。父親が肯定する割合が高かった項目は「自分には能力がある」父親42%・母親29%であった。全体の傾向としては、「自分は親としてよくやっている」父親46%・母親42%など父母の差は小さかった(表36)。

(3) 生活における仕事と育児のバランス

・仕事と育児のバランスでは、現在「どちらかという」と育児より仕事に比重がかかっている」が男性38%・女性35%と最も多かった。「育児より仕事中心」は男性は34%と多く、女性7%であった。「バランスがとれている」は男性15%、女性25%に留まっていた。

・希望としては男女とも約60%が「バランスがとれている」状態を望み、育児に重きを置いた生活を望む割合は男性16%・女性30%と女性が多く、仕事に重きを置く生活は男性17%・女性4%に希望が多い傾向であった

(表 34)。

(4) 仕事の充実感と収入のバランスについて

・収入と仕事のやりがいのバランスでは、現状・希望ともに「バランスがとれている」状態が最も多く、現状では男性31%・女性34%、希望では男性58%・女性64%であった。

・仕事にやりがいを求める傾向は男性16%・女性12%とやや男性が多いが、全体としては現状・希望ともに男女の差が小さかった(表35)。

(5) 親(祖父母)からの援助

・経済的援助は「かなり」8%、「少し」19%で27%の親が援助を受けていた。

・家事などについては、「かなり」11%、「少し」18%で29%の親が援助を受けていた。

・子どもの世話については「かなり」20%、「少し」36%で56%の親が援助を受けていた(表27)。

(6) 家庭の経済状況

・現在の経済状態をどのように思うかでは、「ゆとりがある」6%、「ややゆとりがある」17%、「普通」38%、「やや苦しい」25%、「苦しい」13%となっており、全体では、普通以上が60%である(表37)。

(7) 心の状態

・「ゆとりがある」と答えた父親は6%・母親5%、「ややゆとりがある」は父親16%・母親16%、「普通」は父親39%・母親31%、「ややゆとりがない」は父親27%・母親34%、「ゆとりがない」は父親11%・母親14%であった。

・経済状態との関連でみると、「経済的に苦しく、かつ心にゆとりがない」父親は5%・母親6%であり、「やや苦しい」「ややゆとりがない」をふくめると父親22%・母親25%である(表38)。

(8) 生活の満足度

・現在の生活に満足している父親は19%・母親は15%やや満足しているは父親39%・母親38%、やや不満は父親15%・母親19%、不満は父親7%・母親8%であった(表39)。

6) 現在の生活において、自分の性別をとどのように受け止めているか。

・自分の性別でよかったとした父親は63%・母親は50%であった。どちらかというよかったを含めると父親の79%母親の72%は自分の性を肯定している(表40)。

・自分が男性であることまたは女性であることをよかったと思うのはどのような場合か複数回答で設問し右「体力・パワーがある」父親43%・母親8%、「行動力がある」父親26%・母親9%、「雇用や職場において優遇される」父親20%・母親6%など、ほとんどの項目で父親

が選択した割合が高かった。「妊娠・出産できる」を除けば、母親が父親より高い割合で選択した項目は「差別される立場や弱者の視点で考えられる」(父親7%・母親17%)のみであった(表41)。

・自分が男性であることまたは女性であることをいやだと思うのはどのような場合かでは、母親の方が多くの項目を選択した。「雇用や職場において差別される」父親3%・母親34%、「社会(しきたりや慣習)で差別される。」父親6%・母親33%、「同性の考え方や行動パターンがいやに思う」父親7%母親24%などである。父親の方が高い割合で選択した項目は「家族の期待に応えなくてはならない」(父親15%・母親8%)であった。

自分の性別を受け入れないという程否定的な人は少ないが、後述する未婚者に比べて多くなっており、結婚生活とその後の仕事しながらの育児経験などの影響が考えられよう。女性であることがいやだと思うことは男性のそれに比べて非常に多く、職場や社会における性差別を母親の1/3が感じていた。父親は「家族から期待をかけられる」ことで男性でよかったと思う反面、「家族の期待に応えなくてはならない」ことをいやだ感じる場合があり、両性ともに、生きにくい環境が社会及び家庭に少なからずあることが分かる。

7) 対象者(保護者)が育ってきた家庭環境や家族の様子

・育ってきた家庭について「満足している」父親は69%・母親は67%であった。不満は父親12%・母親18%であった(表31)。

・将来、育った家庭のような家庭を築いていきたいと思うかどうかでは父親の49%・母親の48%が「そう思う」と答えており、「そう思わない」は父親30%・母親34%であった(表32)。

自分が育ってきた家庭については、約70%の親が満足していたが、育った様な家庭を築いていこうとする割合は約50%であった。現在の親たちの中には、自分たちの価値観で新しい家庭を築いていこうとする意識があることが伺える。

8) 「親としてよくやっていると思わない」群の特徴について

「自分は親としてよくやっていると思う群」父親1052人(56%)・母親1171人(42%)と「思わない群」父親410人(18%)・母親535人(19%)を対象に(表36-7)、現在の生活および育った家庭の状況などについてのクロス集計を行い、親としての自信がもてないことの背

景について検討した。以下「思わない群の特徴」を述べる。始めに「思わない群」の割合を示し、()内に「思う群」の割合を対照させて記す。いずれも危険率1%で有意な差が認められた項目である。

- ・子どもに関する気がかりなことのある割合が高い。父親 43%(33%)・母親 55%(38%)
- ・子どもの発育・発達に関する知識を得る機会が「なかった」割合が高い。父親 56%(43%)・母親 27%(15%)。
- ・子どもと過ごすときの気持ちでは、肯定的な項目で「そう思う」割合が低く、否定的な項目では「そう思う」割合が高い。肯定的項目で「いつも思う」と答えた割合でみると「充実感があって楽しい」父親 38%(60%)・母親 24%(52%)、「やすらぎが得られる」父親 41%(62%)・母親 32%(57%)、面白いことや発見がある」父親 54%(67%)・母親 50%(73%)であった。否定的項目の「時々思う」では「煩わしくていらいらする」父親 36%(28%)・母親 62%(39%)などであった。
- ・自尊感情は低い傾向がある。「自分が好き」に「そう思う」と答えた父親 36%(66%)、母親 32%(69%)。「魅力がある」「能力がある」でも同傾向がみとめられ、「取りえのない人間だ」19%(11%)・母親 31%(12%)となっている。
- ・「仕事と育児のバランスの現在の状態」では「仕事に比重のかかっている」または「仕事中心」の割合が高い。父親 88%(65%)・母親 54%(34%)。そして「仕事と育児のバランスがとれている」と答えた割合が低い。父親 6%(20%)・母親 15%(29%)。
- ・仕事と収入のバランスについては「バランスがとれている」と答えた割合が低い。父親 25%(35%)・母親 29%(37%)。父親においては「やりがいを優先させている」割合が高い。48%(35%)
- ・現在の経済状態では「苦しい」と答えた割合が高い。父親 51%(31%)・母親 47%(35%)。
- ・心の状態では「ゆとりがない」と答えた割合が高い。父親 58%(30%)・母親 70%(30%)。
- ・現在の生活の満足度では「不満」と答えた割合が高い。父親 38%(17%)・母親 43%(20%)
- ・自分の性(別)の受け入れでは「自分の性でよかった」割合が低い。父親 77%(84%)・母親 61%(79%)。
- ・どのような場合自分の性がよかったと思うかでは、次の項目で選択した割合が低い。「体力・パワーがある」父親 41%(50%)・母親 5%(10%)、「行動力がある」父親 22%(30%)・母親 7%(12%)、「養う力がある」父親 15%(23%)、「女らしさを備えている」母親 4%(11%)、「女は妊娠・出産できる」母親 60%(70%)、家族から期待を

かけられる」父親 14%(20%)。

- ・どのような場合自分の性がいやだと思うかでは、母親のみ次の項目で選択した割合が高い。「家庭の中で差別される」22%(16%)、「能力がない」8%(5%)、「体力・パワーがない」26%(20%)、「養う力がない」25%(16%)「家族の期待に応えなくてはならない」13%(8%)「女らしさを要求される」23%(13%)「妊娠・出産できる」9%(2%)
- ・育った家庭の雰囲気では、家庭の開放性、柔軟性、ユーモアや安らぎの有無などにおいて、「そう思う」と答えた割合が低い。「変化に柔軟に対応できた」父親 59%(69%)・母親 54%(71%)、「ユーモアや安らぎがあった」父親 56%(66%)・母親 60%(69%)、「家族の関係がうまく行っていた」父親 53%(73%)・母親 54%(71%)などである。
- ・対象者が育ったころの両親については、「協力的で、価値観や教育方針が一致しており、穏やかな仲の良い夫婦であった」という印象をもつ割合が低い。「助け合い協力していた」父親 54(68%)・母親 42%(65%)、「教育方針が一致していた」父親 33%(50%)・母親 41%(56%)、「仲の良い夫婦だった」父親 51%(64%)・母親 46%(60%)などである。
- ・育ったころの両親の関わり方では、「尊重された」などの印象を持つ割合が低い。「父に尊重された」父親 41%(48%)・母親 40%(52%)、「父は気づかってくれた」母親 45%(57%)、「母に尊重された」父親 54%(64%)・母親 52%(66%)などである。両親の関わり方では、その他の項目でも割合が低い傾向があり、両親からの関りが相対的に少ないといえる。
- ・育った家庭に満足しているかどうかでは、満足度が低い。満足していると答えた男性 65%(76%)母親 57%(73%)。
- ・自分が育ったような家庭を築きたいかでは、そう思う割合が低い。父親 39%(54%)・母親 57%(73%)。親としてよくやっていると思えない群の特徴は、以上のように多領域に見いだされ、親としての自信が持てない理由には多くの要因が関連していることが推察される。
- まず、子どもに関する気がかりなことがあり、発育発達に関する知識を得る機会があまりなかった、という「子育て上の条件」がある。また、経済的に苦しく、仕事と育児のバランスがとれていない、心のゆとりがなく、現在の生活に満足していないという、「現在の生活の条件」、自分の性を肯定的に受け止められない・自分が好きでないなど「自己肯定感の問題」、育った家庭や両親の関りから推察される家庭や夫婦像・親役割に

関する「モデルや伝承の問題」などがあげられる。

このような場合の親への支援は「子育て条件」「現在の生活の条件」はハード領域の支援サービスが行われることが有効であろうが、「自己肯定感の問題」「モデルや伝承の問題」はソフト領域の課題である。

自分の性をいやだと思う母親は「女らしさを要求される」「家庭の中で差別される」「家族の期待に応えなくてはならない」を選択した割合が高かった。社会や職場での差別については、親としてよくやっていると思う群とそうでない群の間で差がないことから、親としての自信は家庭における性役割規範のプレッシャーや個人における性役割の受け入れの問題に関連していると考えられる。個が自己肯定感をもてる家庭環境、それをサポートする教育・社会環境が大切である。

「モデルや伝承の問題」は現時点ですでに、次世代の親(子どもたち)への影響が及んでいるということを示唆している。すなわち、性別役割分担の問題を含めて、家庭および社会環境を整え現在育児中の親を支援することは、今子どもである次世代の親を育む作業でもあるという意味で重要といえるのである。

9) 親と子にとって必要な社会的支援

(1) 育児支援サービス・配慮して欲しいこと

・「利用した」または、「今後利用したい」支援サービスは「土曜・日曜に利用できる行政窓口やサービス」が父親73%母親80%と最も希望が多かった。「家庭の事情を配慮した地域組織の運営(当番や役員)も希望が多く父親52%・母親60%であった。

・「子育てに関する相談」父親57%・母親62%、「仕事や家族の相談など親個人への精神的サポート」父親43%・母親59%、ベビーシッターや保育園の送迎に50%と希望が多かった。育児のヘルパーは42%、家事のヘルパーは33%であった。

このように、直接的な育児の支援の必要性が確認できるが、それを上回って、行政サービスや地域組織の運営といった面での、生活基盤の利便性が求められていた。育児中の親のサポートで育児以外の面の負担を軽減するという発想が重要である。また育児相談に止まらない、親の個人としての問題への対応が求められており、多方面の専門家による相談体制が必要である。

(2) 利用料について

・シッターの派遣については「ある程度負担してもよい」が54%と「無料がよい」20%を上回っていた。他に、「ある程度負担してもよい」の割合の高い項目は「家事ヘルパーの派遣」41%、「保育園の送り迎え」34%であ

った。一方「育児相談」「親の精神的サポートでは「無料がよい」が過半数のそれぞれ63%と54%を占めており、「ある程度負担してもよい」はそれぞれ9%と10%であった。

育児や家事の支援という代替機能(いわばハード領域)にはお金をだすが、ソフト領域である精神的サポートにはお金を出したくないという傾向がみられる。これは、現在の親に対する精神的サポートのあり方に「少し先輩の親がボランティアで悩みのはけ口になる」といった発想であることが理由の1つではないだろうか。精神的サポート体制が「親のライフコースやライフデザインを考える手助け」といった専門性を備えた場合、ある程度の料金設定が受け入れられる可能性はあろう。しかし、現時点では若い世代が初めての子育てを行う(危機的状況に陥る可能性のある)時期の精神的支援の必要性と重要性を親自身がより自覚し、困った時は積極的に各種サービスを利用することが望ましく、そのためには料金など運用面で利用しやすいサービスが提供されなければならない。

以上から、親が必要としている支援は育児への直接的支援(代行サービス)とともに、精神的サポートや生活の利便性を高めることであるといえる。

4. 小括

1) 子育て支援のニーズと実態

(1) 子どもに関する相談体制

父母にとって、保育園や小児科医は身近な相談相手であり、対応についての満足度も高い。満足が得られない場合の理由は「解決の糸口が見つけれなかった」「不安な気持ちが消えなかった」が主であった。このようなケースの中には問題が解決せず深刻化する可能性が考えられ、ファースト・エイドの重要性を再確認する結果であった。

(2) 情報提供

子どもの発育発達に関する知識を得る機会ではなかった。特に父親は知識を得る機会が不十分であった。右知識の提供は「保育園を通して」と「個別に対応」という希望が多く、保育園は情報拠点として、父親を視野に入れた役割機能の充実が期待される。

(3) 保育内容

子どもの発育発達保障の根幹となる健康・安全に関する保育園の対応について、親の満足度が高く、保育者の対応についてもおおむね満足している親が多かった。機嫌よく保育園に通っている子どもの割合が約90%であったことにも、親子ともに安心して保育園を利

用している様子が伺えた。一方、保育内容に関する不満は各項目 10%程度みられ、より細かな対応が必要なケースがあるものと思われる。そのためには、子どもの人数に対する保育者数の検討も必要となろう。保育内容に関する満足度は母親が父親に比べて高く、父親は「どちらとも言えない」が多い。保育園と関わりにおける父母の差と言えよう。

保育園で行われてる特別な事業については、父母ともに園外との交流に賛成が多く、母親はより積極的であった。開かれた保育園としての展開を在園中の親も望んでいることが分かった。

(4) 保育園との連携

子どもに関することの連絡の方法は、連絡帳や面談などでとられており、保育園と保護者の子どもに関する理解はほぼ一致していた。保護者会については、「園との連携が密になり、保育に反映できる」と言う理由で、父母ともにある方がよいという意見が多かった。一方、保護者会に否定的な群では「保護者の労力や時間的な負担」が主な理由としてあげられ、「保育は園に任せたいほうがよいから」とした親も若干みられた。

保育がサービスとして供給される時代を迎え、保護者の自主運営による共同保育の時代に比べ、保護者の意識は、今後さらに大きく変化していくことであろう。平成 11 年度改訂された保育所保育指針にあげられた保育園と家庭との連携は、保護者が子どもの発育発達を保障する環境の構築に主体的に関わるために不可欠である。しかし、保育園を利用しているがために増える「保護者の労力や時間的な負担」または「負担感」とどう折り合いを付けていくかが課題である。

(5) 育児支援サービス・配慮して欲しいこと

ベビーシッターや育児相談などの直接的な育児の支援の必要性は高いが、それを上回って、行政サービスや地域組織の運営のあり方といった、生活の基盤の利便性が求められていた。また「仕事や家族の相談など親個人への精神的サポート」も半数の親が望んでいた。

子育て中の親や家庭支援において、育児以外の生活面の負担を軽減するという発想が重要である。

2) 子育て中の親の気持ちとその背景

「自分は親としてよくやっていると思う群」と「思わない群」についてのクロス集計を行い、親としての自信がもてないことの背景について検討し、親としてよくやっていると思えない群の特徴は、まず、子どものことに関する気がかり・発育発達に関する知識を得る機会の不足などの「子育て上の条件」がある。また、

経済・仕事と育児のバランス・心のゆとり・現在の生活の満足感など「現在の生活の条件」、自分の性を肯定的に受け止められない・自分が好きでないなど「自己肯定感の問題」、育った家庭や両親の関りから推測される「親モデルや子育てモデルの伝承の問題」などがあげられる。

以上の結果から、現在育児中の親への支援は、直接的な育児支援(ベビーシッターなどの育児代行)の他、親が主体的に育児に関わることができるような生活環境を整えることおよび、精神的サポートが重要である。

1) 行政サービスなどの生活環境は働く親にとっての利便性を高め、育児以外の労力負担を軽減する方向性が必要である。

2) 育児相談のみならず、親個人の問題をサポートし、ライフデザインの手助けとなるような、多方面の専門性をもった相談体制が必要である。

社会環境を整え、現在育児中の家庭を支援する内容は、次世代の親を育むという方向性をもってこそ、長期視野にたった少子対策といえる。すなわち、現在育児中の親が個人として充実し、親として成熟し、家庭が機能するような支援システムが次世代の育成へと繋がるのである。

謝 辞

調査にご協力頂いた全国の保護者各位と保育職各位に深謝申し上げます。また調査票作成にあたって、助言を頂いた和泉短期大学の窪龍子教授に深謝申し上げます。

(齋藤幸子・千賀悠子・宮原忍)

C-3 平成 11 年度「非婚・晩婚化傾向に関するアンケート調査」結果

1 調査の目的

平成 10 年度「子育てに関するアンケート調査」では、価値観の継承について調べ、子育て中の親が上の世代からどのような価値観を受け継いでいるのか、次世代にはどのような価値観を受け継ごうとしているのかを明らかにした。本年は未婚者における上の世代から価値観の継承、および未婚者が次世代へ伝えたい価値観について調べ、結婚観・家族観・子育て観との関連をみる。併せて、自尊感情、自分の性別をどのように感じているか、育った家庭環境などについて調べ、社会的環境が現在の青年の価値観に及ぼす影響について検討する。次世代の育成へと繋がる社会環境あり方を考察し、施策への提言を行うための資料収集を目的とした。

2 調査方法と対象

1) 調査内容

調査の内容は以下の通りである。

- (1) 対象の属性
- (2) 結婚観・家族観・子ども観などについて
- (3) 性別の受容と自尊感情
- (4) 生活の満足感
- (5) 育ってきた家庭環境と親との関係
- (6) 価値観の世代間継承

2) 調査方法および対象

企業で働く主に 20～30 代の人を対象として、留め置き法によるアンケート調査(一部、郵送による個別回収)を行った。調査票配布数は 1,234 であった。調査場所は、首都圏が 482、中部・関西が 577、その他の地域が 175 であった。調査場所リストは本稿末尾の資料編に掲載した。

3) 回収率および対象の内訳

有効回答数 1,053(男性 437 人,女性 616 人)であった。回答のあった 1,053 例のうち、未婚で記載不備のなかった男性 161 例・女性 353 例、計 514 例を集計対象とした。未婚の男女別に検討を行った。また、内容によっては次の二群別に検討をした。結婚願望を表明している対象を結婚積極群(男性 80 例・女性 176 例)とし、結婚にあまり積極的ではない対象を結婚消極群(男性 80 例・女性 173 例)としてこれら 2 群の比較を行った。

3 結果と考察

1) 対象の属性

(1) 性別と年齢層

年齢層は、19 歳以下(女性 0.3%)、20-24 歳(男性 24%・女性 40%)、25-29 歳(男性 5%・女性 44%)、30-34 歳(男性 19%・女性 12%)、35-39 歳(男性 4%・女性 4%)、40 歳以上(男性 3%・女性 0.3%)である。

(2) 学歴

・男性:大学卒以上が 74%、専門・専修・短大・高専卒 19%、高校卒 8%である。

・女性:大学卒以上が 38%、専門・専修・短大・高専卒 57%、高校卒 5%である。

(3) 世帯

・男性:一人暮らしが 76%、親との同居 19%、恋人との同居 4%、その他 3%である。

・女性:親との同居が 58%、一人暮らし 34%、その他 5%、祖父母との同居 5%、恋人との同居 3%である。

(4) 職業

・職業:男女共に常勤勤務者が多く、男性 92%・女性 93%で、非常勤および学生が若干名である。

・職種:男性は、営業・販売が最も多く 42%で、次いで事務 24%・サービス業 20%である。女性は事務が最も多く 36%で、次いで営業・販売 26%、サービス業 15%、専門職 15%である。

(5) 昨年度の年収

・男性:100～400 万円未満が最も多く 58%、次いで 400-700 万円未満で 30%、700～1000 万円未満が 7%である。

・女性:100～400 万円未満が最も多く 83%、次いで 400～700 万円未満が 11%である。なお、100 万円未満が 3%で、無収入が 2%である。

(6) 親からの援助

・男性:親から経済的援助を受けている割合は 15%、日常生活の援助を受けている割合は 14%である。

・女性:経済的援助を受けている割合は 37%、日常生活の援助を受けている割合は 45%である。

女性の方が親から経済的あるいは日常生活の援助を受けている割合が高い。女性は親との同居の割合が高いこともあり、親からの援助が多いと考えられる。

2) 結婚観・子ども観・子育て観・性別役割観について

(1) 結婚願望 - 結婚積極群と消極群

・結婚積極群:「結婚するつもりで相手がいるので、いずれ結婚したい」という結婚予定者は、男性 32%・女

性28%である。また、「結婚相手はいないが、ある程度の年齢までには結婚がしたい」という結婚願望のある割合は、男性17%・女性22%である。このように結婚の意志のある人を「結婚積極群」とすると、積極群は男性80例(50%)、女性176例(50%)である。

・結婚消極群:「理想的な相手がいれば、結婚したい」割合は男性43%・女性44%で、「結婚はしたくないが、パートナーとなる人が欲しい」は、男性6%・女性5%である。また、「一生結婚するつもりもないしパートナーとなる人もいない」割合は男女ともに1%である。このように結婚に対して消極的な人を「結婚消極群」とすると、消極群は男性80例(50%)、女性173例(49%)である。

男女共に結婚積極群および消極群は各々約50%である。観男性の消極群の方が高年齢層の割合が高い。女性の積極群の方が常勤および専門職の割合が高い傾向がある。

(2) 結婚観

・「結婚することによって、より充実した人生を送ることができる」と思う割合は、男性53%・女性51%で、どちらとも言えないという男性が35%・女性37%である。結婚によって充実した人生が送れると思っている男女は約半数であり、男女間に差異はない。

結婚積極群・消極群別にみると、「結婚によって充実した人生が送れる」と思っている割合が、積極群の男女では共に61%である。

・「男性は結婚しなくとも充実した人生が送れる」と思う割合は男性32%・女性39%で、そうは思わないという男性が33%・女性20%である。

・「女性は結婚しなくとも充実した人生が送れる」と思う割合は、男性34%・女性37%、そうは思わないという男性が31%・女性20%、どちらとも言えないが男性34%・女性42%である。

男女共に、一般論としては結婚したら充実した人生が送れると思っている人が約半数である。結婚積極群の男女は消極群に比べ、結婚したら充実した人生が送れると肯定的な考え方をしている割合が高い。しかし、結婚は男にとって・女にとって人生を充実させものかと・自分に引き寄せて考える場合には賛否両論に分かれ、また、どちらとも言えないという意見もあり、男女共に懐疑的傾向がある。

(3) 子ども観・子育て観

・子どもの存在について

「子どもは自分の生命を伝える存在として大切」と思う割合は、男性69%・女性53%「社会の次世代の担い

手として大切」と思うは、男性86%・女性82%。「うるおいや活気を与える存在」であると思うは、男性80%・女性83%である。男性は「自分の生命を伝える存在」と思う割合が女性に比べ高く、女性はどこらともいえないという割合が高い。

結婚積極群と消極群とでは差異はないが、男女共に積極群の方が子どもば「自分の生命を伝える存在」「活気を与える存在」として大切という割合が高い傾向がある。

・子ども好きについて

「子ども好き」と思う割合は、男性61%・女性65%である。しかし、「自分の子どもはかわいい」と思うは、男性86%・女性92%である。女性は男性と比べ、「自分の子どもならかわいい」という割合が高い。

男女共に積極群は消極群に比べ「子ども好き」・「自分の子どもはかわいい」と思う割合が高い傾向がある。

・子育てについて

「子育てには面白いことや発見がある」と思う割合は、男性81%・女性91%で、「子育てによって親は犠牲にするものが多くある」と思う割合は、男性59%・女性48%である。女性は子育てによって犠牲にするものがあるが、面白いこともあるという割合が高い。

・「子どもを生き育ててこそ人として一人前である」と思う割合は、男性34%・女性19%で、そうは思わないという割合が男性32%・女性44%である。女性は男性に比べ、子育てが人の成熟性をあらわすものではないと思う割合が高い。

・「子どもがいなくとも充実した結婚生活ができる」と思う割合は、男性40%・女性49%で、そうは思わないが男性26%・女性13%である。女性は男性に比べ、子どもの存在によって結婚生活の充実は左右されないと思っている割合が高い。

結婚積極群と消極群とでは、男女共に積極群の方が「子どもを生き育ててこそ一人前」と思う割合が高い傾向がある。また、男女共に消極群では「子どもがいなくとも充実した結婚生活ができる」と思っている割合が高い傾向がある。

(4) 希望子ども数

・子どもを「2人欲しい」と思う割合は、男性57%・女性56%、「3人欲しい」割合は男性16%・女性18%である。男女共に子どもを2-3人欲しいと思っているが、子どもはいらないという割合は男女共に6%である。

・結婚消極群の男女では、子どもはいらないという割合が高く、男性10%・女性8%である。

(5) 性別役割観について

・「男性は家事や育児を分担すべきである」と思う割合は、男性62%・女性75%である。「男性は働き、女性は家庭を守るのがよい」と思う割合は男性20%・女性7%で、そうは思わない割合は男性37%・女性47%である。男性は女性に比べ、家庭生活に関しては固定的性別役割観のある人の割合が高い。女性は男性も家庭責任を担う責任があると考えており、固定的性別役割感のある人の割合は少ない。

しかし、個人の生き方あるいは考え方として固定的性別役割観を問われると、「男性は仕事に影響しない程度に家庭生活を大切にすることがよい」と思う割合が、男性45%・女性42%で、どちらとも言えないが男性38%・女性16%である。また、「女性は家庭生活に影響をしない程度に仕事をするのがよい」と思う割合は、男性は45%・女性42%で、どちらとも言えないが男性38%・女性39%である。

以上のように、家庭生活ではなく個人のあり方として問われると、約半数の男女が固定的性別役割観を持っているといえる。

・結婚積極群および消極群別に家庭生活における性別役割観を比べると、「男性は家事や育児を分担すべきである」と思う割合が、女性積極群73%・消極群77%、そうは思わないという割合が女性積極群5%・消極群1%である。女性の消極群では、男性は家事や育児を分担すべきであると考えている人の割合が高い傾向がある。また、「男性は働き、女性は家庭を守るのがよい」と思わない割合は、男性積極群29%・消極群45%である。男性の消極群では、女性に対する性別役割観を持つ割合が低い傾向がある。

「男性は仕事に影響しない程度に家庭生活を大切にすることがよい」と思う割合は、男女共に積極群の割合が高い傾向がある(男性積極群54%・消極群45%、女性積極群53%・消極群48%)。

「女性は家庭生活に影響しない程度に仕事をするのがよい」と思わない割合は、男性積極群13%・消極群18%である。

男性は女性に比べ、家庭生活に関して固定的性別役割観のある人の割合が高い。しかし、考え方全体をみると、男女ともに固定的性別役割観がまだあるといえよう。結婚消極群では男女ともに、固定的性別役割観に対して否定的な人の割合が高い傾向がある。

3) 性別の受容と自尊感情

(1) 性別の受容

・「自分の性でよかった」と思う割合は、男性74%・女性52%で、そうは思わないという割合が男性2%・女性9%であり、女性は自分の性別を受容している割合が低い。

結婚積極群の男性は消極群に比べ、性を受容している割合が高い(積極群81%・消極群66%)。

・自分の性をどう受容しているか

[自分の性をよかったと思う場合]:男性は、「体力・パワーがある - 42%」、「理屈抜きによい - 39%」、「男は妊娠・出産しない - 19%」である。女性は「女は妊娠・出産できる - 41%」、「理屈抜きによい - 31%」、「女らしさを備えている - 28%」である。

積極群の女性は消極群に比べ、自分の性がよいと思う場合は、「妊娠・出産できるのでよい - 47%」・「家庭で優遇されるのでよい - 13%」・「社会で優遇されるのでよい - 22%」であり、積極群の方が自分の性でよかったと思う割合が高い。

[自分の性がいやだと思う場合]:男性では、「家族の期待の期待に応えなくてはならない」・「男らしさを要求される」の2項目が各々14%である。女性は、「雇用や職場で差別される - 35%」・「社会で差別される - 31%」・「同性の考えや行動パターンをいやに思う - 26%」・「女らしさを要求される - 23%」・「体力・パワーがない - 23%」である。

男性は、自分の性をいやに思う場合が少ない。特に、積極群の男性は自分の性を肯定的に受けとめている割合が高い。積極群の女性は消極群に比べ、社会的な性的差別を感じる割合が低い傾向があり、家庭や社会で女性は優遇されていると思う傾向がある。

(2) 自尊感情

・男性では「自分が好き」という割合が62%・「取り得えないとは思わない」が57%、「周囲に受け入れられていないとは思わない」が52%、「成果が認めてもらえないとは思わない」が51%などである。

・女性は「周囲に受け入れられていないとは思わない」が67%、「運が悪いとは思わない」が60%、「自分が好き」が56%、「取り得がないとは思わない」が55%である。

男女を比べ差異があった項目は、「自分が好き - 男性32%・女性24%」・「魅力があるとそう思う - 男性12%・女性8%」・「能力があると思う - 男性19%・女性7%」・「平均的だとやや思う - 男性14%・女性31%」である。

・男性の結婚積極群と消極群を比べると、「平均的であるとは思わない」が積極群23%・消極群46%である。

・女性の2群を比べると、「魅力があるとは思わない」が積極群21%・消極群12%、「能力があるとはそ

うは思わない」が積極群 23%・消極群 15%、「とりえがない人間だとそう思う」が積極群 6%・消極群 2%である。

結婚積極群の男女の自尊感情は、消極群に比べ消極的意味合いの傾向がある。

4) 生活の満足感

(1) 経済状態

・「普通」だと思う割合は男性 44%・女性 52%、「苦しい」と思う割合は男性 14%・女性 6%であり、経済的に苦しいと思っている割合は男性の方が高い。

・結婚積極群と消極群との間では差異はない。

(2) 心の状態

・「普通」だと思う割合は男性 35%・女性 38%、「ゆとりがない」と思う割合は男性 15%・女性 8%であり、心にゆとりがない割合は男性の方が高い。

・結婚積極群と消極群との間では差異はない。

(3) 現在の生活の満足度

・「満足している」割合は男性 31%・女性 47%で、女性の方が満足している割合が高い。

・結婚積極群の男性は「満足している」割合が 44%、積極群の女性も 52%で、積極群の方が現在の生活に満足している割合が高い。なお、両群間に年収・親からの経済的援助の差異はない。

5) 育ってきた家庭環境と親との関係

(1) 育ってきた家庭の雰囲気

・「さまざまな人の付き合いがあったと思う」割合が男女共に 72%、「変化に柔軟に対応できたと思う - 男性 69%・女性 68%」、「考えなどを自由に話せる雰囲気があったと思う - 男性 57%・女性 63%」、「感情が出せる雰囲気があったと思う - 男性 63%・女性 70%」である。そして、「ユーモアがあったと、そう思う」と印象深く思っている男性 29%・女性 42%で、「家族の関係がうまくいっていたと思う」割合が男女共に 69%である。

・結婚積極群と消極群の女性では、「ユーモアがあったと、そう思う - 積極群 49%・消極群 36%」、「考えなどを自由に話せる雰囲気があったと思う - 積極群 42%・消極群 32%」、「家族の関係がうまくいっていたと思う - 積極群 47%・消極群 36%」である。なお、男性の 2 群間では差異はない。

(2) 育った頃の親の夫婦関係

・男女共に約半数は、親は「助け合い協力していた」・「お互いの考えを尊重していた」・「子育てや教育の考えは一致していた」そして「冷たくなく、感情をぶつけ合うこともなく、穏やかな間柄で、仲のよい夫婦だ

った」と、親の関係をみている。

・結婚積極群および消極群の男性では、「親の価値観などが共通していたとは思わない」割合が積極群 16%・消極群 40%、「穏やかな雰囲気の間柄だとは思わない」が積極群 9%・消極群 26%、「仲のよい夫婦だとは思わない」が積極群 3%・消極群 16%である。

女性では、「協力していたとは思わない」が積極群 3%・消極群 8%、「仲のよい夫婦だったと、そう思う」と強く肯定する割合は積極群 42%・消極群 32%である。男女共に消極群は積極群に比べ親の夫婦関係がよくなかった割合が高い。

(3) 対象者が中学生から 20 歳前後頃までの親のかかり方

・[父親について]:男性の父親の関わり方は、「行動に口をはさまないが気づかせてくれていた」と配慮的であったが割合が 67%、「尊重してくれていた」が 54%である。女性の父親も「配慮的である - 57%」・「尊重的である - 50%」であるが、父親が「指示的である - 27%」・「いつも行動を共にしたり側にいたがる(依存的) - 23%」で、男性の父親に比べこれらの割合が高い。

・[母親について]:男性の母親の関わり方は、傾聴的・配慮的そして尊重してくれていた割合が高い。しかし、指示的な母親が 54%、また、依存的な母親が 30%で、母親が過干渉であった割合も低くはない。女性の場合も男性と同傾向を示すが、「傾聴的 - 44%」・「依存的 - 38%」であり、男性よりもこれらの割合が高い。また、「女らしさ」を母親に求められたのは 70%であり、男性が「男らしさ」を求められた割合の 19%よりも高い。

・男性の結婚積極群は消極群に比べ、父親が傾聴的であった割合が高い(積極群 48%・消極群 38%)。また、母親が指示的であったと思う割合も高い(積極群 71%・消極群 54%)。両群の女性では父親や母親の関わり方に差異はなく全体と同傾向を示している。だが、母親から「尊重されて育てられたとは思わない」という割合が消極群の方が高い(積極群 22%・消極群 10%)。

父親は男子に対しては配慮的で尊重する関わり方をしていた傾向があるが、女子に対してはやや指示的あるいは依存的関わり方の割合が高い傾向がある。母親は男子にも女子にも指示的あるいは依存的な関わり方をしている割合が高い。積極群の男性の母親は指示的であった割合が高い。

(4) 育ってきた家庭に対する満足感と育ってきた家庭をモデルにしたいか

・男女共に「育ってきた家庭に対して満足をしている」割合は、男性 59%・女性 53%である。しかし、「育って

きた家庭のような家庭を将来築きたいか」という問いに対して、そう思うと積極的にモデルにしたいと思っている割合は、男性 34%・女性 33%である。

・積極群の男性が「育ってきた家庭に満足している」割合は 61%、消極群では 56%である。そして、「育ってきた家庭のような家庭を将来築きたいと思う」割合は積極群 41%・消極群 26%で、積極群男性は育って家庭を将来モデルにしたいという割合が高い。女性では「育った家庭に満足している」割合は積極群 54%・消極群 52%である。そして、「将来築きたい」とモデルにしたい割合は、積極群 39%・消極群 28%である。積極群の女性も男性と同様に、育ってきた家庭を将来モデルにしたいと思っている割合が高い。

結婚積極群の男女では、育った家庭に対する満足度およびモデルにしたい割合も高い。積極群では、親との関係を良好であった、あるいは夫婦関係がよかったなどと思う割合が高いことも関係していると考えられる。

6) 価値観の世代間継承

価値観の世代間継承をみるために、対象者の親の価値観と、対象者自身が次の世代に大切にしたいと思いたいと思う価値観について検討した。なお、価値観については、次に示す観点から 40 項目を作成し 5 件法で調査をした。

- ・生き方—社会性(規範性・責任感・自立性)、人生観、考え方、対人関係のあり方
- ・家族観—夫婦関係、子どもとの関係、親との関係、家族の協力関係、暮らし方
- ・伝統観—家庭や地域の慣わし等の継承

[男性対象者について]

(1) 父親の価値観

・結婚積極群の平均得点 1.0 以上(そう思うと肯定的回答)は 10 項目で、「不正や悪いことを許さない 1.48」・「自分の言動に責任を持つ 1.38」・「自分の親を大切に 1.20」・「誇りを持って生きる 1.18」・「経済的・精神的・生活面において自立する 1.15」・「忍耐強い 1.14」・「問題から逃げずに誠実に対応する 1.10」・「自分の信念をつらぬく 1.08」・「自分の子どもを慈しむ 1.04」・「夢を持つ 1.0」である。・消極群の平均得点 1.0 以上は 5 項目で、「不正や悪いことを許さない 1.25」・「自分の親を大切に 1.06」・「経済的・精神的・生活面において自立する 1.04」・「自分の子どもを慈しむ 1.01」・「自分の言動に責任を持つ 1.00」である。

・積極群の平均得点の方が有意に高かった項目は、次の 6 項目である。「夢を持つ」・「視野の広い考え」・「様々なことに挑戦する」・「自分の言動に責任を持つ」・「お金が大切」・「誇りを持って生きる」である。

対象全体の男性の平均得点 1.0 以上は、「不正などを許さない 1.37」・「自分の言動に責任を持つ 1.19」・「自分の親を大切に 1.14」・「自分の子どもを慈しむ 1.03」・「誇りを持って生きる 1.01」の 5 項目である。後述する女性の父親の価値観に比べ、成り行きに任せる傾向がある。しかし、「問題から逃げない・性別で差別をしない・人の弱さなどを気づかう・人の気持ちがわかる」という項目の得点は女性よりも高い。

(2) 母親の価値観

・積極群の平均得点 1.0 以上は 11 項目で、「不正などを許さない 1.54」・「自分の親を大切に 1.38」・「自分の子どもを慈しむ 1.27」・「自分の言動に責任を持つ 1.26」・「家族の支えあいなどを大切に 1.20」・「子どもとの暮らしを大切に 1.18」・「人の弱さなどを気づかうことができる 1.16」・「配偶者との関係を大切に 1.12」・「人との調和を重んじる 1.10」・「人の気持ちがわかる 1.09」・「忍耐強い 1.06」である。
・消極群の平均得点 1.0 以上は 13 項目で「自分の親を大切に 1.32」・「自分の子どもを慈しむ 1.31」・「不正などを許さない 1.27」・「人の弱さなどを気づかうことができる 1.23」・「家族の支えあいなどを大切に 1.20」・「子どもとの暮らしを大切に 1.19」・「自立する 1.06」・「自分言動に責任を持つ 1.06」・「人との調和を重んじる 1.05」・「性別で人を差別しない 1.05」・「人の気持ちがわかる 1.01」・「忍耐強い 1.00」である。
・積極群の平均得点の方が消極群に比べ有意(5%)に高かったのは「不正や悪いことを許さない」の 1 項目である。

対象全体の男性の平均得点 1.0 以上は、「不正などを許さない 1.41」・「自分の親を大切に 1.35」・「自分の子どもを慈しむ 1.30」・「家族の支えあいなどを大切に 1.20」・「子どもとの暮らしを大切に 1.19」・「人の弱さなどを気づかう 1.19」・「自分の言動に責任を持つ 1.16」・「人との調和 1.07」・「人の気持ちがわかる 1.05」・「忍耐強い 1.04」・「配偶者との関係を大切に 1.02」・「自立 1.00」の 12 項目である。

後述する女性の母親の価値観に比べ、「成り行きに任せる」あるいは「仕事に生きがいがあると思う」という平均得点は男性の方が高い。また、母親が「信仰心を大事にする」ということに関しては、そうは思わないと男性の方が否定的である。

(3) 次世代に大切にしたいと思う価値観

積極群の平均得点 1.0 以上は 26 項目であるが、その中で平均得点 1.5 以上を次に記す。「生活は楽しく 1.61」・「不正などを許さない 1.59」・「人の弱さなどを気づかう 1.54」・「自分の言動に責任を持つ 1.52」・「理想を持って生きていく 1.51」の 5 項目である。

消極群の平均得点 1.0 以上は 23 項目で、平均得点 1.5 以上は、「生活は楽しく 1.59」・「自分の言動に責任を持つ 1.52」の 2 項目であるが、人の弱さなどに気づかうなどの共感性の得点や、家族を大切にするという諸項目の得点が高い。

積極群の平均得点が有意(5%)に高かったのは、「不正や悪いことを許さない」・「様々なことに挑戦する」の 2 項目である。

男性対象者の価値観継承の特徴を検討すると、結婚積極群・消極群両群ともに次世代へ継承したいと思っている父母の価値観は、「規範性を大切に、言動に責任を持ち、親を大切に、子どもを慈しむ」ことである。

対象者が継承したいと思っている母親の価値観は、「人の気持ちがわかるなどの共感性や人との調和、そして家族が支えあい子どもとの暮らしを大切にすること」であら。乱対象者の多くは、家族とその暮らし、そして人に対するやさしさを次世代に継承していきたいと思っている。

親世代ではあまり重視されてこなかったが、対象者自身が次世代に継承したいと思っている価値観は、「生活を楽しみ、ユーモアと理想を持って一日一日を大切に生きていく。また、物事に対しては視野を広くイメージを豊かにしてみる」ことである。

価値観継承における結婚積極群の特徴は、前述した父親の生き方や価値観の継承の他に、「問題から逃げない・誇りと信念を持って生きる」ことを次世代に継承したいと思っている。積極群では父性的な生き方を次世代に継承したいという思いが強いといえよう。

対象全体の男性の平均得点 1.0 以上は、「自分の言動には責任を持つ 1.53」を筆頭に 24 項目で、積極群の内容とほぼ同じである。

後述する女性の継承したい価値観に比べ、「成り行きに任せる」・「信仰心を大事にする」という 2 項目では、男性の平均得点が有意(5%)に低く、否定的である。しかし、「論理的思考が大切」・「競争心」・「誇りを持って生きる」という項目の平均得点は有意(5%)に高い。

【女性対象者について】

(1) 父親の価値観

・結婚積極群の平均得点 1.0 以上は 6 項目で、「不正などを許さない 1.40」・「自立する 1.24」・「自分の親を大切に 1.20」・「自分の言動に責任を持つ 1.19」・「自分の子どもを慈しむ 1.12」・「自分の信念をつらぬく 1.01」である。

・消極群の平均得点 1.0 以上は、「自立する 1.21」・「不正などを許さない 1.18」・「自分の親を大切に 1.12」・「自分の子どもを慈しむ 1.04」の 4 項目である。

・積極群の平均得点が有意(5%)に高かった項目は、「問題から逃げずに誠実に対応する」・「不正などを許さない」・「配偶者との関係を大事にする」・「仕事に生きがいがある」4 項目である。

対象全体の女性の平均得点 1.0 以上は 6 項目で、「不正などを許さない 1.30」・「自立する 1.22」・「自分の親を大切に 1.20」・「自分の子どもを慈しむ 1.08」・「自分の言動に責任を持つ 1.08」である。

前述した男性の平均得点に比べ有意(5%)に高い項目は、「お金が大切」・「仕事は生活のためにする」である。女性は、父親の生き方を仕事中心であったとみていた傾向がある。

(2) 母親の価値観

・結婚積極群の平均得点 1.0 以上は、「不正などを許さない 1.44」・「自分の親を大切に 1.44」・「自分の子どもを慈しむ 1.30」・「人の弱さなどを気づかう 1.23」・「生活は楽しく 1.16」・「子どもとの暮らしを大切に 1.15」・「家族の支えあいを大切に 1.12」・「自分の言動に責任を持つ 1.11」・「人との調和を重んじる 1.08」・「配偶者との関係を大切に 1.05」・「人の気持ちがわかる 1.05」の 11 項目である。

消極群の平均得点 1.0 以上は、「不正などを許さない 1.39」・「自分の親を大切に 1.38」・「自分の子どもを慈しむ 1.25」・「子どもとの暮らしを大切に 1.15」・「家族の支えあいを大切に 1.14」・「生活を楽しむ 1.14」・「人との調和を重んじる 1.13」・「忍耐強い 1.11」・「自分の言動に責任を持つ 1.09」・「人の気持ちがわかる 1.06」・「忍耐強い 1.00」の 10 項目である。

・積極群の平均得点が有意(5%)に高かったのは「配偶者との関係を大切に 1.05」・「物事は理屈通りには行かない」の 2 項目である。消極群の方が有意に高い項目は、「忍耐強い」である。

対象全体の女性の平均得点 1.0 以上は、「不正などをゆるさない 1.41」を筆頭に 10 項目で、「性別で差別

をしない0.82」の項目を除いて積極群の内容とほぼ同じである。

前述した男性の平均得点に比べ有意(5%)に高い項目は、「生活は楽しく」、「ユーモアがある」、「お金が大切」である。

(3) 次世代に大切にしたいと思う価値観

結婚積極群の平均得点1.0以上は26項目であるが、その中で平均得点1.5以上を記すと「生活は楽しく1.78」、「自分の言動に責任を持つ1.57」、「配偶者との関係を大事に1.57」、「人の弱さや痛みを気づかうことができる1.55」、「自分の親を大切に1.53」、「不正などを許さない1.51」の6項目である。

・消極群の平均得点1.0以上は26項目で、平均得点1.5以上は、「生活は楽しく1.75」、「自分の言動に責任を持つ1.55」、「人の弱さや痛みを気づかう1.55」、「自分の親を大切に1.54」、「自立する1.53」、「自分の子どもを慈しむ1.52」の6項目である。

・積極群の平均得点があり(5%)で高い項目は、「仕事は生活のためにする」であり、消極群の方が有意に高い項目は「経済面などで自立する」である。

両群共に、次世代に継承したいと思っている価値観は「生活は楽しく、そして人の弱さが痛みに対する共感性などがあり、親を大切に子どもを慈しむこと」である。両親の価値観において否定的であった「信仰心を大事にする」という価値観は、対象者も次世代には継承したくないとしている。

積極群は消極群に比べ、「不正等は許さない、パートナーとの関係や子どもの暮らしを大切にすること」など継承したいという思いがあり、家庭生活を重視している傾向がある。また、積極群における価値観継承の特徴は、父母が大切にしていたと思われる「配偶者との関係を大切にすること」であり、次世代にも継承したいと思っている。

消極群では「経済的・精神的・生活面において自立する、競争心を持つ、様々なことに挑戦する」ということ等を継承したいという思いがあり、自立的に生きることを重視している傾向がある。消極群における価値観継承の特徴は、父親の価値観である「自立する」と母親が大切にしていたと思われる「忍耐強さ」である。

女性対象者の結婚積極群・消極群両群の価値観継承の特徴を検討すると、両群共に次世代へ継承したいと思っている父母共通の価値観は、「規範性を大切に、言動に責任を持ち、親を大切に子どもを慈しむ」ことである。また、継承したい父親の価値観は「自立す

る」で、継承したい母親の価値観は「生活は楽しく、人の弱さや痛みがわかり人との調和を重視し、家族が協力し合い子どもとの暮らしを大切にすること」である。

継承したい親世代の価値観は男性と同傾向であるが、女性は男性よりも母親の「生活は楽しく」という考え方を次世代にも継承したいと思っている。対象者が親世代よりも大切に次世代に継承したいと思っている価値観は、「生活を楽しむ、豊かな感性を育むこと。ユーモアと理想と誇りを持ち一日一日を大切に生きていもそして、物事に対しては視野を広く持ちかつイメージを豊かにしてみ、様々なことに挑戦していく。性別で人を差別しない」ことであると考えられる。

対象全体の女性の平均得点1.0以上は26項目であり、1.5以上は「生活は楽しく1.76」、「自分の言動に責任を持つ1.56」、「人の弱さなどに気づかう1.55」、「自分の親を大切に1.54」、「配偶者との関係を大切に1.52」の5項目である。

前述した男性の平均得点に比べ有意(5%)に高い項目は「生活は楽しく」、「一日一日を大切に生きる」、「ユーモアがある」、「自分の親を大切にすること」である。

4. 小括

価値観の継承の分析を通して、独身者の次世代育成について検討する。

継承したい価値観の中でも家族の協力や子どもとの暮らしを大切にするという得点が積極群の方が高い。これらは、結婚積極群の親自身が大切にしていたと思われる価値観でもある。育ってきた家庭環境の結果でも、積極群の親の夫婦関係などはよく、積極群の男女は育ってきた家庭生活のあり方を肯定的に受けとめていると考えられる。また、育ってきた家庭をモデルにしたいかという回答においても「そう思う」という肯定的な割合が消極群に比し有意に高いという結果である。

結婚積極群の男性は、父親や母親の中の父性的考え方や社会性のある生き方をみており、次世代へ継承していきたいという思いがある。また、積極群の女性の場合は、母親の中に父性的考え方や社会性のある生き方を見ている。

結婚消極群では「自立性が大切であるとか、ユーモアを大切に、そしてイメージ豊かに、また、挑戦的に」という考え方や生き方を次世代に継承していきたいと積極群よりも思っている。また、消極群の女性は「論理性や、視野の広さ」ということを継承したいという思いがある。

消極群では育ってきた家族や家庭の状況がよくなかったという割合も高いが、次世代に対しては積極的な考えや価値観を継承したいと考えていると考えられる。

以上のように、親の価値観・親子関係・親の夫婦関係など、親の生き方が子ども世代の結婚・家族の形成というライフコースの選択に影響を与えていることが今調査の結果から示唆された。

家庭生活のあり方や子育て、そして人としてどう生きるかということなどに関して、よきモデルがあり継承されていくことは大切である。しかし、結婚積極群にみられるように育ってきた家庭をよかったと受けとめられてはいるが、親との関係などでは自立的ではない面もある。また、対象女性全体でみると、父親の生き方や価値観等を十分に理解できる状況がなかったのか、あるいは父親の考え方を肯定しにくいのか、女性の父親像が明確にみえてこない。経済成長時代の父親を持つ世代では、父親の生き方を知ったり、父親に触れる機会が少なく、特に異性である父親を知ることは女性にとっては難しい状況だったといえる。

親そして個人としての生き方が子どもの心にモデルとして、時には反面教師像として映ることができ、子世代は問い返しをしながら前世代のよきものを継承し、新しい価値観などを加えていくことが大切である。若い世代にはその兆しがある。「仕事中心ではなく、生活は楽しくそして家庭生活を大切にしようという価値観」が台頭してきていることである。

今、若い世代が仕事や子育てや家庭生活、そして個人の生活を安心して過ごし暮らせる社会環境を整えていくことが大切である。

対象の独身者の半分は結婚消極群である。我々の平成9年度の調査時には消極群は40%であった。数年のうちに社会状況が変化し、雇用・年金など保障のない状況もあり、長期の生活設計をすることが難しい時代になってきている。

若い世代が夢と希望のもてるライフデザインができるような社会環境づくり、その一つとして子育て支援策がより整備され、安心して家庭生活をおくることができるというプランや情報を提供していくことも大切である。まさに今、「社会の養育力」が問われているのである。

謝 辞

アンケートに協力頂いた回答者各位ならびに企業各位に深謝申し上げます。

(千賀悠子・齋藤幸子・宮原忍)

資料編

1. 平成11年度「子育てに関するアンケート調査」対象について

1) 調査実施場所

	区市町村数	区市町村名（数字は調査施設数、記載のない地域の調査施設は1か所）	調査施設数	公立	私立	調査票配布世帯数
東京23区内	12	品川区2・世田谷区2・中央区・文京区・港区・江戸川区・荒川区・渋谷区・新宿区・千代田区・中野区・練馬区・	14	0	14	893
首都圏（23区をのぞく）	6	横浜市14・八王子市2・平塚市・相模原市・町田市2・藤沢市2	22	1	21	1,291
中核市および中都市	12	大分市2・岡山市3・新潟市・函館市3・浜松市2・宮崎市・山形市2・旭川市・郡山市2・水戸市・長崎市・姫路市	20	0	20	1,649
町村	2	沖縄県内・大分県内4	5	1	4	279
計	32		61	2	59	4,112

2) 回収率および有効回答数

回収数 2,862 世帯（世帯回収率 69.6%）

有効回答数 5,059 人（男性 2,276 人・女性 2,783 人）

3) 世帯別回答パターン内訳

	ペア回答	男性単独回答	女性単独回答	合計
二人親世帯	2,197	23	228	2,448
一人親世帯（男性）	—	31	—	31
一人親世帯（女性）	—	—	348	348
不明	—	25	10	35
合計	2,197	79	586	2,862

2. 平成11年度「非婚・晩婚傾向に関するアンケート調査」対象について

1) 調査実施場所

	北海道・東北	関東	中部・東海	北陸	関西	中国・四国	九州・沖縄	合計
A企業	—	305	—	—	—	—	—	305
B企業	55	140	60	20	75	50	50	450
C企業	—	37	442	—	—	—	—	479
合計	55	482	502	20	75	50	50	1,234

2) 回収率および有効回答数

有効回答数 1,053 人（男性 437 人・女性 616 人）

回収率 85.3%

資料編

3. C-2「子育てに関するアンケート調査」集計表

回答者数	5,059	人	世帯数合計	2,862	世帯
男性回答者	2,276	人	父母回答	2,197	世帯
女性回答者	2,783	人	父のみ回答	79	世帯
			母のみ回答	586	世帯

表1. 子どもの性別

	世帯数	割合
1. 男児	1,458	50.9%
2. 女児	1,402	49.0%
0. 無回答・不明	2	0.1%
合計	2,862	100.0%

表2. 子どもの年齢

	世帯数	割合
0. 歳	93	3.2%
1. 歳	523	18.3%
2. 歳	547	19.1%
3. 歳	593	20.7%
4. 歳	436	15.2%
5. 歳	421	14.7%
6. 歳	240	8.4%
無回答・不明	9	0.3%
合計	2,862	100.0%

表3. きょうだい数(子ども数)

	世帯数	割合
1. 人	1,203	42.0%
2. 人	1,168	40.8%
3. 人	391	13.7%
4. 人	55	1.9%
5. 人	6	0.2%
6. 人	1	0.0%
0. 無回答・不明	39	1.4%
合計	2,862	100.0%

表4. そのお子さんのことで気がかりなことはありますか。または、過去にありましたか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. はい	2,014	39.8%	816	35.9%	1,198	43.0%
2. いいえ	3,014	59.6%	1,449	63.7%	1,565	56.2%
0. 無回答・不明	31	0.6%	11	0.5%	20	0.7%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表4-1. 前問で「はい」とお答えの方、気がかりはどのようなことですか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 身体のこと(病気や発育のこと)	1,093	54.3%	460	56.4%	633	52.8%
2. 情緒や行動・態度のこと	645	32.0%	243	29.8%	402	33.6%
3. 言葉や知能・運動面などの発達のこと	261	13.0%	60	7.4%	201	16.8%
4. 食事や栄養のこと	357	17.7%	49	6.0%	308	25.7%
5. その他	88	4.4%	3	0.4%	85	7.1%
MA回答数合計	2,444	121.4%	815	99.9%	1,629	136.0%
無回答・不明	10	0.5%	10	1.2%	0	0.0%
MA回答者数合計	2,014	100.0%	816	100.0%	1,198	100.0%

表4-2. 気がかりなことがある方、これまでに、治療を受けたり相談などをしましたか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. はい	1,153	57.2%	412	50.5%	741	61.9%
2. いいえ	845	42.0%	397	48.7%	448	37.4%
0. 無回答・不明	16	0.8%	7	0.9%	9	0.8%
合計	2,014	100.0%	816	100.0%	1,198	100.0%

表4-3. 気がかりなことについて、専門家に診てもらったり、相談した場合、満足しましたか。

A. それぞれの専門家について

B. 「やや不満」と「不満」に○をつけた方は、どのようなことが不満でしたか。

1 A. 小児科の医師

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 満足	302	26.2%	106	25.7%	196	26.5%
2. やや満足	393	34.1%	147	35.7%	246	33.2%
3. やや不満	169	14.7%	65	15.8%	104	14.0%
4. 不満	34	2.9%	19	4.6%	15	2.0%
5. 診てもらったり、相談したことはない	56	4.9%	8	1.9%	48	6.5%
0. 無回答・不明	199	17.3%	67	16.3%	132	17.8%
合計	1,153	100.0%	412	100.0%	741	100.0%

1 B. 小児科の医師

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 説明が理解できなかった。	17	8.4%	8	9.5%	9	7.6%
2. 話が一方的で、自分の話をあまり聴いてくれなかった。	29	14.3%	9	10.7%	20	16.8%
3. 威圧的な態度だった。	22	10.8%	8	9.5%	14	11.8%
4. 親（保護者）が悪いように言われ、傷ついた。	16	7.9%	5	6.0%	11	9.2%
5. 問題解決の糸口が得られなかった。	71	35.0%	30	35.7%	41	34.5%
6. 不安な気持ちが消えなかった。	81	39.9%	33	39.3%	48	40.3%
7. その他	30	14.8%	14	16.7%	16	13.4%
MA回答数合計	266	131.0%	107	127.4%	159	133.6%
無回答・不明	28	13.8%	12	14.3%	16	13.4%
MA回答者数合計	203	100.0%	84	100.0%	119	100.0%

2 A. 小児科以外の医師

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 満足	99	8.6%	41	10.0%	58	7.8%
2. やや満足	210	18.2%	87	21.1%	123	16.6%
3. やや不満	104	9.0%	40	9.7%	64	8.6%
4. 不満	38	3.3%	10	2.4%	28	3.8%
5. 診てもらったり、相談したことはない	227	19.7%	63	15.3%	164	22.1%
0. 無回答・不明	475	41.2%	171	41.5%	304	41.0%
合計	1,153	100.0%	412	100.0%	741	100.0%

2 B. 小児科以外の医師

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 説明が理解できなかった。	6	4.2%	1	2.0%	5	5.4%
2. 話が一方的で、自分の話をあまり聴いてくれなかった。	20	14.1%	7	14.0%	13	14.1%
3. 威圧的な態度だった。	21	14.8%	8	16.0%	13	14.1%
4. 親（保護者）が悪いように言われ、傷ついた。	18	12.7%	5	10.0%	13	14.1%
5. 問題解決の糸口が得られなかった。	45	31.7%	14	28.0%	31	33.7%
6. 不安な気持ちが消えなかった。	52	36.6%	16	32.0%	36	39.1%
7. その他	17	12.0%	7	14.0%	10	10.9%
MA回答数合計	179	126.1%	58	116.0%	121	131.5%
無回答・不明	24	16.9%	10	20.0%	14	15.2%
MA回答者数合計	142	100.0%	50	100.0%	92	100.0%

3 A. 心理学の専門家（臨床心理士など）

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 満足	20	1.7%	4	1.0%	16	2.2%
2. やや満足	33	2.9%	15	3.6%	18	2.4%
3. やや不満	8	0.7%	4	1.0%	4	0.5%
4. 不満	6	0.5%	1	0.2%	5	0.7%
5. 診てもらったり、相談したことはない	439	38.1%	153	37.1%	286	38.6%
0. 無回答・不明	647	56.1%	235	57.0%	412	55.6%
合計	1,153	100.0%	412	100.0%	741	100.0%

3 B. 心理学の専門家（臨床心理士など）

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 説明が理解できなかった。	1	7.1%	0	0.0%	1	11.1%
2. 話が一方的で、自分の話をあまり聴いてくれなかった。	1	7.1%	0	0.0%	1	11.1%
3. 威圧的な態度だった。	1	7.1%	0	0.0%	1	11.1%
4. 親（保護者）が悪いように言われ、傷ついた。	3	21.4%	0	0.0%	3	33.3%
5. 問題解決の糸口が得られなかった。	7	50.0%	2	40.0%	5	55.6%
6. 不安な気持ちが消えなかった。	6	42.9%	3	60.0%	3	33.3%
7. その他	1	7.1%	1	20.0%	0	0.0%
MA回答数合計	20	142.9%	6	120.0%	14	155.6%
無回答・不明	3	21.4%	2	40.0%	1	11.1%
MA回答者数合計	14	100.0%	5	100.0%	9	100.0%

4 A. 保育者や保育の専門家

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 満足	103	8.9%	19	4.6%	84	11.3%
2. やや満足	206	17.9%	39	9.5%	167	22.5%
3. やや不満	60	5.2%	21	5.1%	39	5.3%
4. 不満	19	1.6%	3	0.7%	16	2.2%
5. 診てもらったり、相談したことはない	239	20.7%	118	28.6%	121	16.3%
0. 無回答・不明	526	45.6%	212	51.5%	314	42.4%
合計	1,153	100.0%	412	100.0%	741	100.0%

4 B. 保育者や保育の専門家

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 説明が理解できなかった。	2	2.5%	1	4.2%	1	1.8%
2. 話が一方的で、自分の話をあまり聴いてくれなかった。	10	12.7%	3	12.5%	7	12.7%
3. 威圧的な態度だった。	4	5.1%	0	0.0%	4	7.3%
4. 親（保護者）が悪いように言われ、傷ついた。	10	12.7%	0	0.0%	10	18.2%
5. 問題解決の糸口が得られなかった。	27	34.2%	8	33.3%	19	34.5%
6. 不安な気持ちが消えなかった。	26	32.9%	7	29.2%	19	34.5%
7. その他	5	6.3%	1	4.2%	4	7.3%
MA回答数合計	84	106.3%	20	83.3%	64	116.4%
無回答・不明	19	24.1%	7	29.2%	12	21.8%
MA回答者数合計	79	100.0%	24	100.0%	55	100.0%

5 A. 3. 4. 以外の相談者やアドバイザー

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 満足	36	3.1%	9	2.2%	27	3.6%
2. やや満足	61	5.3%	14	3.4%	47	6.3%
3. やや不満	27	2.3%	5	1.2%	22	3.0%
4. 不満	16	1.4%	5	1.2%	11	1.5%
5. 診てもらったり、相談したことはない	389	33.7%	145	35.2%	244	32.9%
6. 無回答・不明	624	54.1%	234	56.8%	390	52.6%
合計	1,153	100.0%	412	100.0%	741	100.0%

5 B. 3. 4. 以外の相談者やアドバイザー

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 説明が理解できなかった。	1	2.3%	0	0.0%	1	3.0%
2. 話が一方的で、自分の話をあまり聴いてくれなかった。	5	11.6%	1	10.0%	4	12.1%
3. 威圧的な態度だった。	2	4.7%	0	0.0%	2	6.1%
4. 親（保護者）が悪いように言われ、傷ついた。	3	7.0%	0	0.0%	3	9.1%
5. 問題解決の糸口が得られなかった。	15	34.9%	3	30.0%	12	36.4%
6. 不安な気持ちが消えなかった。	18	41.9%	3	30.0%	15	45.5%
7. その他	2	4.7%	1	10.0%	1	3.0%
MA回答数合計	46	107.0%	8	80.0%	38	115.2%
無回答・不明	11	25.6%	4	40.0%	7	21.2%
MA回答者数合計	43	100.0%	10	100.0%	33	100.0%

6 A. 栄養士

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 満足	20	1.7%	2	0.5%	18	2.4%
2. やや満足	50	4.3%	11	2.7%	39	5.3%
3. やや不満	23	2.0%	4	1.0%	19	2.6%
4. 不満	10	0.9%	0	0.0%	10	1.3%
5. 診てもらったり、相談したことはない	413	35.8%	153	37.1%	260	35.1%
6. 無回答・不明	637	55.2%	242	58.7%	395	53.3%
合計	1,153	100.0%	412	100.0%	741	100.0%

6 B. 栄養士

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 説明が理解できなかった。	1	3.0%	0	0.0%	1	3.4%
2. 話が一方的で、自分の話をあまり聴いてくれなかった。	4	12.1%	1	25.0%	3	10.3%
3. 威圧的な態度だった。	3	9.1%	0	0.0%	3	10.3%
4. 親（保護者）が悪いように言われ、傷ついた。	7	21.2%	1	25.0%	6	20.7%
5. 問題解決の糸口が得られなかった。	15	45.5%	1	25.0%	14	48.3%
6. 不安な気持ちが消えなかった。	6	18.2%	0	0.0%	6	20.7%
7. その他	1	3.0%	0	0.0%	1	3.4%
MA回答数合計	37	112.1%	3	75.0%	34	117.2%
無回答・不明	6	18.2%	1	25.0%	5	17.2%
MA回答者数合計	33	100.0%	4	100.0%	29	100.0%

表 5-1. あなたはこれまでに、「子どもの保育や発達に関する知識」を得る機会がありましたか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 十分あった	742	14.7%	192	8.4%	550	19.8%
2. 十分ではないがあった	2,632	52.0%	971	42.7%	1,661	59.7%
3. あまりなかった	1,211	23.9%	748	32.9%	463	16.6%
4. ほとんどなかった	437	8.6%	344	15.1%	93	3.3%
5. 無回答・不明	37	0.7%	21	0.9%	16	0.6%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表5-2. 「子どもの発育や発達に関する知識」を得る機会が「3. あまりなかった」「4. ほとんどなかった」とお答えの方にはうかがいます。そのことをどのように受け止めていらっしゃいますか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 知らなくて困ることがあるので、知りたい。	364	22.1%	216	19.8%	148	26.6%
2. 知識がなくても困らないが、知っていた方が子どもや子育てのためによいと思う。	1,000	60.7%	689	63.1%	311	55.9%
3. 知識がなくても、特に問題はないのでかまわないと思う。	163	9.9%	117	10.7%	46	8.3%
4. 知識があると、かえって混乱するので、自分なりの子育てをしたい。	97	5.9%	58	5.3%	39	7.0%
5. その他	19	1.2%	9	0.8%	10	1.8%
0. 無回答・不明	5	0.3%	3	0.3%	2	0.4%
合計	1,648	100.0%	1,092	100.0%	556	100.0%

表6-1. あなたは「子どもの発育や発達に関する知識」について、公的機関（市町村・保健センター・保健所・保育園など）からの情報提供の方法に満足していますか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 満足	592	11.7%	263	11.6%	329	11.8%
2. やや満足	2,460	48.6%	1,016	44.6%	1,444	51.9%
3. やや不満	1,411	27.9%	649	28.5%	762	27.4%
4. 不満	386	7.6%	224	9.8%	162	5.8%
0. 無回答・不明	210	4.2%	124	5.4%	86	3.1%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表6-2. 満足していない場合、どのような提供方法がよいと思いますか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 講演・講座（集団で話を聴く）	164	9.1%	76	8.7%	88	9.5%
2. 学習会（講師や参加者とコミュニケーションを取りながら）	344	19.1%	127	14.5%	217	23.5%
3. 個別指導や、資料を送付	497	27.7%	76	8.7%	421	45.6%
4. 子どもの通っている保育園・幼稚園・学校を通じて提供	1,147	63.8%	561	64.3%	586	63.4%
5. その他	125	7.0%	54	6.2%	71	7.7%
MA回答数合計	2,277	126.7%	894	102.4%	1,383	149.7%
無回答・不明	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
MA回答者数合計	1,797	100.0%	873	100.0%	924	100.0%

表7-1. 子どもの在籍する現在のクラス編成（子ども人数）

	合計		男性		女性	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
0. 歳	8.75	6.67	9.08	6.71	8.49	6.63
1. 歳	10.91	6.99	10.85	7.00	10.96	6.98
2. 歳	13.33	5.70	13.13	5.67	13.48	5.72
3. 歳	16.52	7.90	16.49	8.14	16.55	7.74
4. 歳	19.98	8.36	19.71	8.49	20.17	8.26
5. 歳	21.13	7.76	20.74	7.50	21.37	7.92
6. 歳	20.82	6.92	20.62	7.00	20.96	6.86

表7-2. 現在のクラス編成（保育者数）

	合計		男性		女性	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
0. 歳	2.53	1.63	2.55	1.58	2.51	1.68
1. 歳	3.02	1.81	2.98	1.74	3.05	1.86
2. 歳	2.77	1.31	2.75	1.26	2.79	1.34
3. 歳	2.50	1.42	2.59	1.76	2.44	1.14
4. 歳	1.79	1.09	1.88	1.44	1.73	0.77
5. 歳	1.47	0.98	1.52	1.25	1.44	0.77
6. 歳	1.35	0.61	1.41	0.68	1.31	0.55

表7-3. 希望するクラス編成（子ども人数）

	合計		男性		女性	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
0. 歳	7.47	6.60	7.26	6.51	7.62	6.65
1. 歳	8.41	6.47	8.11	6.40	8.66	6.52
2. 歳	10.99	5.79	10.75	6.01	11.17	5.61
3. 歳	13.11	7.36	12.91	8.12	13.26	6.77
4. 歳	15.42	8.13	14.85	7.86	15.81	8.30
5. 歳	16.19	7.47	15.07	6.87	16.91	7.75
6. 歳	15.33	6.50	14.24	6.14	16.04	6.64

表7-4希望するクラス編成（保育者数）

	合計		男性		女性	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
0 . 歳	2.70	2.19	2.60	2.40	2.78	2.01
1 . 歳	2.82	1.97	2.72	2.02	2.91	1.93
2 . 歳	2.77	1.48	2.68	1.52	2.85	1.43
3 . 歳	2.43	1.41	2.42	1.65	2.44	1.21
4 . 歳	1.95	1.38	2.05	1.71	1.89	1.08
5 . 歳	1.64	0.89	1.61	0.98	1.66	0.82
6 . 歳	1.43	0.73	1.40	0.71	1.45	0.74

表8. 保育園では、何歳から何歳くらいの子どもと一緒に過ごすのがよいと思いますか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1 . 0歳児から就学前まで同じ施設での保育	2,744	54.2%	1,148	50.4%	1,596	57.3%
2 . 0歳児から学童（放課後）まで同じ施設での保育	928	18.3%	394	17.3%	534	19.2%
3 . 0～3歳くらいと3歳以上は別の施設がよい	1,188	23.5%	635	27.9%	553	19.9%
4 . その他	110	2.2%	53	2.3%	57	2.0%
0 . 無回答・不明	89	1.8%	46	2.0%	43	1.5%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表9-1. 現在、お子さんが親ごさんと離れて過ごしている時間

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
00 . 0時間	5	0.10%	3	0.13%	2	0.07%
01 . 1時間	6	0.12%	6	0.26%	0	0.00%
02 . 2時間	4	0.08%	4	0.18%	0	0.00%
03 . 3時間	12	0.24%	8	0.35%	4	0.14%
04 . 4時間	13	0.26%	7	0.31%	6	0.22%
05 . 5時間	16	0.32%	5	0.22%	11	0.40%
06 . 6時間	112	2.21%	45	1.98%	67	2.41%
07 . 7時間	695	13.74%	275	12.08%	420	15.09%
08 . 8時間	1,268	25.06%	507	22.28%	761	27.34%
09 . 9時間	957	18.92%	371	16.30%	586	21.06%
10 . 10時間	1,037	20.50%	454	19.95%	583	20.95%
11 . 11時間	383	7.57%	174	7.64%	209	7.51%
12 . 12時間	288	5.69%	199	8.74%	89	3.20%
13 . 13時間	77	1.52%	68	2.99%	9	0.32%
14 . 14時間	48	0.95%	39	1.71%	9	0.32%
15 . 15時間	28	0.55%	27	1.19%	1	0.04%
16 . 16時間	14	0.28%	12	0.53%	2	0.07%
17 . 17時間	3	0.06%	3	0.13%	0	0.00%
18 . 18時間	4	0.08%	3	0.13%	1	0.04%
19 . 19時間	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
20 . 20時間	5	0.10%	5	0.22%	0	0.00%
21 . 21時間	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
22 . 22時間	2	0.04%	2	0.09%	0	0.00%
23 . 23時間	1	0.02%	0	0.00%	1	0.04%
24 . 24時間	8	0.16%	8	0.35%	0	0.00%
25 . 無回答・不明	73	1.44%	51	2.24%	22	0.79%
合計	5,059	100.00%	2,276	100.00%	2,783	100.00%

表9-2. 希望としては、親にとって

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
00 . 0時間	36	0.70%	26	1.14%	10	0.36%
01 . 1時間	3	0.10%	2	0.09%	1	0.04%
02 . 2時間	5	0.10%	2	0.09%	3	0.11%
03 . 3時間	27	0.50%	16	0.70%	11	0.40%
04 . 4時間	59	1.20%	27	1.19%	32	1.15%
05 . 5時間	241	4.80%	81	3.56%	160	5.75%
06 . 6時間	483	9.50%	159	6.99%	324	11.64%
07 . 7時間	483	9.50%	148	6.50%	335	12.04%
08 . 8時間	1,493	29.50%	608	26.71%	885	31.80%
09 . 9時間	357	7.10%	151	6.63%	206	7.40%
10 . 10時間	516	10.20%	298	13.09%	218	7.83%
11 . 11時間	58	1.10%	34	1.49%	24	0.86%
12 . 12時間	119	2.40%	84	3.69%	35	1.26%
13 . 13時間	10	0.20%	6	0.26%	4	0.14%
14 . 14時間	7	0.10%	5	0.22%	2	0.07%
15 . 15時間	4	0.10%	3	0.13%	1	0.04%
16 . 16時間	1	0.00%	1	0.04%	0	0.00%
17 . 17時間	1	0.00%	1	0.04%	0	0.00%
18 . 18時間	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
19 . 19時間	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
20 . 20時間	1	0.00%	1	0.04%	0	0.00%
21 . 21時間	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
22 . 22時間	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
23 . 23時間	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
24 . 24時間	3	0.10%	3	0.13%	0	0.00%
25 . 何時間でもよいと思う	698	13.80%	369	16.21%	329	11.82%
26 . 無回答・不明	454	9.00%	251	11.03%	203	7.29%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表9-3. 希望としては、子どもにとって

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
00 . 0時間	99	2.0%	68	3.0%	31	1.1%
01 . 1時間	2	0.0%	2	0.1%	0	0.0%
02 . 2時間	21	0.4%	10	0.4%	11	0.4%
03 . 3時間	98	1.9%	43	1.9%	55	2.0%
04 . 4時間	192	3.8%	75	3.3%	117	4.2%
05 . 5時間	579	11.4%	204	9.0%	375	13.5%
06 . 6時間	1,039	20.5%	404	17.8%	635	22.8%
07 . 7時間	524	10.4%	176	7.7%	348	12.5%
08 . 8時間	1,082	21.4%	484	21.3%	598	21.5%
09 . 9時間	122	2.4%	59	2.6%	63	2.3%
10 . 10時間	168	3.3%	113	5.0%	55	2.0%
11 . 11時間	5	0.1%	3	0.1%	2	0.1%
12 . 12時間	21	0.4%	18	0.8%	3	0.1%
13 . 13時間	1	0.0%	1	0.0%	0	0.0%
14 . 14時間	1	0.0%	1	0.0%	0	0.0%
15 . 15時間	3	0.1%	2	0.1%	1	0.0%
16 . 16時間	2	0.0%	2	0.1%	0	0.0%
17 . 17時間	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
18 . 18時間	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
19 . 19時間	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
20 . 20時間	1	0.0%	1	0.0%	0	0.0%
21 . 21時間	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
22 . 22時間	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
23 . 23時間	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
24 . 24時間	5	0.1%	5	0.2%	0	0.0%
25 . 何時間でもよいと思う	539	10.7%	297	13.0%	242	8.7%
26 . 無回答・不明	555	11.0%	308	13.5%	247	8.9%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表10. 保育の内容や、保育者の対応についてうかがいます。

表10-1. 子どもの身体の状態に応じた対応

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 満足している	2,445	48.3%	1,043	45.8%	1,402	50.4%
2. やや満足	1,821	36.0%	797	35.0%	1,024	36.8%
3. やや不満	350	6.9%	145	6.4%	205	7.4%
4. 不満	69	1.4%	32	1.4%	37	1.3%
5. どちらとも言えない	290	5.7%	198	8.7%	92	3.3%
0. 無回答・不明	84	1.7%	61	2.7%	23	0.8%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表10-2. 子どもの心の状態に応じた対応

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 満足している	1,991	39.4%	880	38.7%	1,111	39.9%
2. やや満足	1,891	37.4%	832	36.6%	1,059	38.1%
3. やや不満	550	10.9%	198	8.7%	352	12.6%
4. 不満	149	2.9%	56	2.5%	93	3.3%
5. どちらとも言えない	387	7.6%	246	10.8%	141	5.1%
0. 無回答・不明	91	1.8%	64	2.8%	27	1.0%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表10-3. 基本的な生活習慣のしつけ

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 満足している	2,361	46.7%	929	40.8%	1,432	51.5%
2. やや満足	1,874	37.0%	839	36.9%	1,035	37.2%
3. やや不満	367	7.3%	200	8.8%	167	6.0%
4. 不満	77	1.5%	41	1.8%	36	1.3%
5. どちらとも言えない	291	5.8%	204	9.0%	87	3.1%
0. 無回答・不明	89	1.8%	63	2.8%	26	0.9%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表10-4. 遊びや活動など保育カリキュラムの内容

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 満足している	2,507	49.6%	1,047	46.0%	1,460	52.5%
2. やや満足	1,698	33.6%	799	35.1%	899	32.3%
3. やや不満	381	7.5%	133	5.8%	248	8.9%
4. 不満	90	1.8%	35	1.5%	55	2.0%
5. どちらとも言えない	287	5.7%	198	8.7%	89	3.2%
0. 無回答・不明	96	1.9%	64	2.8%	32	1.1%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表10-5. 子ども一人ひとりの持ち味が大切にされている

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 満足している	1,786	35.3%	788	34.6%	998	35.9%
2. やや満足	1,836	36.3%	791	34.8%	1,045	37.5%
3. やや不満	576	11.4%	218	9.6%	358	12.9%
4. 不満	171	3.4%	67	2.9%	104	3.7%
5. どちらとも言えない	594	11.7%	348	15.3%	246	8.8%
0. 無回答・不明	96	1.9%	64	2.8%	32	1.1%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表10-6. 保育者の子育て観

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 満足している	1,661	32.8%	728	32.0%	933	33.5%
2. やや満足	1,886	37.3%	824	36.2%	1,062	38.2%
3. やや不満	451	8.9%	171	7.5%	280	10.1%
4. 不満	127	2.5%	49	2.2%	78	2.8%
5. どちらとも言えない	829	16.4%	431	18.9%	398	14.3%
0. 無回答・不明	105	2.1%	73	3.2%	32	1.1%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表10-7. 差別や偏見などに対する保育者の人権感覚

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 満足している	1,907	37.7%	828	36.4%	1,079	38.8%
2. やや満足	1,625	32.1%	710	31.2%	915	32.9%
3. やや不満	334	6.6%	123	5.4%	211	7.6%
4. 不満	103	2.0%	36	1.6%	67	2.4%
5. どちらとも言えない	963	19.0%	499	21.9%	464	16.7%
0. 無回答・不明	127	2.5%	80	3.5%	47	1.7%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表10-8. あなたの子育てへの精神的サポート

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 満足している	1,499	29.6%	656	28.8%	843	30.3%
2. やや満足	1,881	37.2%	798	35.1%	1,083	38.9%
3. やや不満	544	10.8%	206	9.1%	338	12.1%
4. 不満	163	3.2%	60	2.6%	103	3.7%
5. どちらとも言えない	869	17.2%	488	21.4%	381	13.7%
0. 無回答・不明	103	2.0%	68	3.0%	35	1.3%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表11. 保育園の健康管理・健康支援についてうかがいます。

表11-1. 健康診断の回数・内容

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 満足している	2,547	50.3%	944	41.5%	1,603	57.6%
2. やや満足	1,464	28.9%	704	30.9%	760	27.3%
3. やや不満	360	7.1%	154	6.8%	206	7.4%
4. 不満	79	1.6%	34	1.5%	45	1.6%
5. どちらとも言えない	520	10.3%	373	16.4%	147	5.3%
0. 無回答・不明	89	1.8%	67	2.9%	22	0.8%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表11-2. 保育中の急な病気やけがへの対応

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 満足している	2,349	46.4%	956	42.0%	1,393	50.1%
2. やや満足	1,515	29.9%	670	29.4%	845	30.4%
3. やや不満	417	8.2%	187	8.2%	230	8.3%
4. 不満	144	2.8%	71	3.1%	73	2.6%
5. どちらとも言えない	543	10.7%	327	14.4%	216	7.8%
0. 無回答・不明	91	1.8%	65	2.9%	26	0.9%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表11-3. 嘱託医など医師との連携

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 満足している	1,676	33.1%	677	29.7%	999	35.9%
2. やや満足	1,377	27.2%	630	27.7%	747	26.8%
3. やや不満	440	8.7%	190	8.3%	250	9.0%
4. 不満	173	3.4%	81	3.6%	92	3.3%
5. どちらとも言えない	1,265	25.0%	613	26.9%	652	23.4%
0. 無回答・不明	128	2.5%	85	3.7%	43	1.5%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表11-4. 給食やおやつの内容

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 満足している	3,110	61.5%	1,254	55.1%	1,856	66.7%
2. やや満足	1,261	24.9%	638	28.0%	623	22.4%
3. やや不満	247	4.9%	88	3.9%	159	5.7%
4. 不満	86	1.7%	28	1.2%	58	2.1%
5. どちらとも言えない	273	5.4%	206	9.1%	67	2.4%
0. 無回答・不明	82	1.6%	62	2.7%	20	0.7%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表11-5. 子どもへの食事の指導

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 満足している	2,548	50.4%	1,004	44.1%	1,544	55.5%
2. やや満足	1,580	31.2%	707	31.1%	873	31.4%
3. やや不満	272	5.4%	147	6.5%	125	4.5%
4. 不満	63	1.2%	30	1.3%	33	1.2%
5. どちらとも言えない	502	9.9%	323	14.2%	179	6.4%
0. 無回答・不明	94	1.9%	65	2.9%	29	1.0%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表11-6. 保護者への子どもの健康に関する知識の提供

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 満足している	1,731	34.2%	734	32.2%	997	35.8%
2. やや満足	1,805	35.7%	733	32.2%	1,072	38.5%
3. やや不満	555	11.0%	264	11.6%	291	10.5%
4. 不満	138	2.7%	64	2.8%	74	2.7%
5. どちらとも言えない	740	14.6%	414	18.2%	326	11.7%
0. 無回答・不明	90	1.8%	67	2.9%	23	0.8%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表12. あなたの利用している保育園では次のような特別の保育事業を行っていますか。

A. 利用している園で実施している（「はい」と答えた）

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 夜間保育	724	14.3%	299	13.1%	425	15.3%
2. 休日保育	477	9.4%	223	9.8%	254	9.1%
3. 病児または病後児保育	357	7.1%	147	6.5%	210	7.5%
4. 学童保育	859	17.0%	361	15.9%	498	17.9%
5. 障害児保育	1,003	19.8%	374	16.4%	629	22.6%
6. 在園児以外の一時保育	1,607	31.8%	572	25.1%	1,035	37.2%
7. 地域の親子への園庭開放・育児相談など	1,780	35.2%	616	27.1%	1,164	41.8%
8. 高齢者との交流	2,250	44.5%	850	37.3%	1,400	50.3%
9. 保育所卒園児との交流	2,144	42.4%	865	38.0%	1,279	46.0%

B. あなたが利用している園で実施することについて

表12-1. 夜間保育

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 賛成	2,789	55.1%	1,189	52.2%	1,600	57.5%
2. 反対	1,433	28.3%	613	26.9%	820	29.5%
0. 無回答・不明	837	16.5%	474	20.8%	363	13.0%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表12-2. 休日保育

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 賛成	3,201	63.3%	1,351	59.4%	1,850	66.5%
2. 反対	1,044	20.6%	458	20.1%	586	21.1%
0. 無回答・不明	814	16.1%	467	20.5%	347	12.5%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表12-3. 病児または病後児保育

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 賛成	2,660	52.6%	1,076	47.3%	1,584	56.9%
2. 反対	1,495	29.6%	684	30.1%	811	29.1%
0. 無回答・不明	904	17.9%	516	22.7%	388	13.9%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表12-4. 学童保育

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 賛成	3,078	60.8%	1,268	55.7%	1,810	65.0%
2. 反対	1,082	21.4%	488	21.4%	594	21.3%
0. 無回答・不明	899	17.8%	520	22.8%	379	13.6%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表12-5. 障害児保育

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 賛成	3,456	68.3%	1,419	62.3%	2,037	73.2%
2. 反対	673	13.3%	339	14.9%	334	12.0%
0. 無回答・不明	930	18.4%	518	22.8%	412	14.8%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表12-6. 在園児以外の一時保育

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 賛成	3,015	59.6%	1,247	54.8%	1,768	63.5%
2. 反対	1,149	22.7%	522	22.9%	627	22.5%
0. 無回答・不明	895	17.7%	507	22.3%	388	13.9%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表12-7. 地域の親子への園庭開放・育児相談など

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 賛成	3,618	71.5%	1,530	67.2%	2,088	75.0%
2. 反対	551	10.9%	245	10.8%	306	11.0%
0. 無回答・不明	890	17.6%	501	22.0%	389	14.0%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表12-8. 高齢者との交流

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 賛成	4,082	80.7%	1,712	75.2%	2,370	85.2%
2. 反対	174	3.4%	94	4.1%	80	2.9%
0. 無回答・不明	803	15.9%	470	20.7%	333	12.0%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表12-9. 保育所卒園児との交流

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 賛成	3,964	78.4%	1,653	72.6%	2,311	83.0%
2. 反対	217	4.3%	122	5.4%	95	3.4%
0. 無回答・不明	878	17.4%	501	22.0%	377	13.5%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表13. 現在、お子さんは機嫌よく保育園に通っていますか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. いつもよい	1,823	36.0%	825	36.2%	998	35.9%
2. 大体よい	2,816	55.7%	1,241	54.5%	1,575	56.6%
3. あまりよくない	192	3.8%	83	3.6%	109	3.9%
4. よくない	42	0.8%	20	0.9%	22	0.8%
5. どちらとも言えない	131	2.6%	68	3.0%	63	2.3%
0. 無回答・不明	55	1.1%	39	1.7%	16	0.6%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表14. その他お子さんの成長のために、園や保育者に配慮して欲しいことや、期待することがありましたら、ご自由にお書きください。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 意見有り	1,521	30.20%	458	20.60%	1,063	38.00%
0. 無回答・不明	3,538	69.80%	1,818	79.40%	1,720	62.00%
合計	5,059	100.00%	2,276	100.00%	2,783	100.00%

表15. お子さんに関して、保育園との連絡はどのようにおこなわれていますか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 連絡帳など文書で	4,106	81.2%	1,913	84.1%	2,193	78.8%
2. 面談で	1,939	38.3%	698	30.7%	1,241	44.6%
3. 電話で	755	14.9%	296	13.0%	459	16.5%
4. その他	632	12.5%	169	7.4%	463	16.6%
MA回答数合計	7,432	146.9%	3,076	135.1%	4,356	156.5%
無回答・不明	59	1.2%	46	2.0%	13	0.5%
MA回答者数合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	200.0%

表16. 保育園でのお子さんの様子について、園からの連絡内容でわかりますか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 分かる	1,608	31.8%	757	33.3%	851	30.6%
2. 部分的に分かる	2,584	51.1%	1,125	49.4%	1,459	52.4%
3. あまり分からない	546	10.8%	223	9.8%	323	11.6%
4. 分からない	174	3.4%	71	3.1%	103	3.7%
5. どちらともいえない	94	1.9%	60	2.6%	34	1.2%
0. 無回答・不明	53	1.0%	40	1.8%	13	0.5%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表17. お子さんに関する保護者からの連絡内容は、保育者に的確に伝わっていると思いますか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 伝わっている	2,307	45.6%	1,012	44.5%	1,295	46.5%
2. 部分的に伝わっている	2,140	42.3%	937	41.2%	1,203	43.2%
3. あまり伝わっていない	290	5.7%	118	5.2%	172	6.2%
4. 伝わっていない	48	0.9%	25	1.1%	23	0.8%
5. どちらともいえない	214	4.2%	139	6.1%	75	2.7%
0. 無回答・不明	60	1.2%	45	2.0%	15	0.5%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表18. お子さんについて、保育者と保護者の間で理解は一致していると思いますか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 一致している	1,749	34.6%	753	33.1%	996	35.8%
2. 部分的に一致している	2,419	47.8%	1,067	46.9%	1,352	48.6%
3. あまり一致していない	265	5.2%	106	4.7%	159	5.7%
4. 一致していない	66	1.3%	35	1.5%	31	1.1%
5. どちらともいえない	487	9.6%	266	11.7%	221	7.9%
0. 無回答・不明	73	1.4%	49	2.2%	24	0.9%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表19. 保育園には保護者会活動はありますか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. はい	3,223	63.7%	1,356	59.6%	1,867	67.1%
2. いいえ	615	12.2%	208	9.1%	407	14.6%
3. わからない	1,152	22.8%	659	29.0%	493	17.7%
0. 無回答・不明	69	1.4%	53	2.3%	16	0.6%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表20. 保育園の保護者会はあった方がよいと思いますか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. はい	3,811	75.3%	1,685	74.0%	2,126	76.4%
2. いいえ	1,029	20.3%	458	20.1%	571	20.5%
0. 無回答・不明	219	4.3%	133	5.8%	86	3.1%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表20-1. それはなぜですか。(20.1. はい限定)

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 保護者と園の連携が密になり、保育に反映できるから	3,228	84.7%	1,424	84.5%	1,804	84.9%
2. 保護者同士で親密になれるから	1,896	49.8%	684	40.6%	1,212	57.0%
3. 他の園の保護者会とも連携し、行政に要望を出せるから	573	15.0%	257	15.3%	316	14.9%
4. その他	106	2.8%	31	1.8%	75	3.5%
MA回答数合計	5,803	152.3%	2,396	142.2%	3,407	160.3%
無回答・不明	13	0.3%	7	0.4%	6	0.3%
MA回答者数合計	3,811	100.0%	1,685	100.0%	2,126	100.0%

表20-2. それはなぜですか。(20.2. いいえ限定)

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 保育は、園に任せた方がよいと思うから	201	19.5%	133	29.0%	68	11.9%
2. 保護者の労力や時間的な負担が多くなるから	795	77.3%	309	67.5%	486	85.1%
3. 保護者会費が負担だから	67	6.5%	27	5.9%	40	7.0%
4. その他	109	10.6%	44	9.6%	65	11.4%
MA回答数合計	1,172	113.9%	513	112.0%	659	115.4%
無回答・不明	14	1.4%	9	2.0%	5	0.9%
MA回答者数合計	1,029	100.0%	458	100.0%	571	100.0%

表21. あなたの性別

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 男	2,276	45.0%	2,276	100.0%	0	0.0%
2. 女	2,783	55.0%	0	0.0%	2,783	100.0%
0. 無回答・不明	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表22. 年齢

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 19歳以下	3	0.1%	0	0.0%	3	0.1%
2. 20～24歳	123	2.4%	39	1.7%	84	3.0%
3. 25～29歳	852	16.8%	282	12.4%	570	20.5%
4. 30～34歳	1,738	34.4%	658	28.9%	1,080	38.8%
5. 35～39歳	1,508	29.8%	743	32.6%	765	27.5%
6. 40歳以上	804	15.9%	531	23.3%	273	9.8%
0. 無回答・不明	31	0.6%	23	1.0%	8	0.3%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表23. あなたが最後に学んだ(または現在学んでいる)学校は次のどれですか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 中学	165	3.3%	103	4.5%	62	2.2%
2. 高校	1,774	35.1%	788	34.6%	986	35.4%
3. 専門・専修学校	855	16.9%	281	12.3%	574	20.6%
4. 短大・高専	569	11.2%	75	3.3%	494	17.8%
5. 大学	1,460	28.9%	874	38.4%	586	21.1%
6. 大学院	177	3.5%	121	5.3%	56	2.0%
7. その他	18	0.4%	9	0.4%	9	0.3%
0. 無回答・不明	41	0.8%	25	1.1%	16	0.6%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表24. あなたは現在結婚していますか、あるいはこれまでに結婚したことがありますか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 結婚している(配偶者・パートナーがいる)	4,609	91.1%	2,220	97.5%	2,389	85.8%
2. 結婚していたが、離別した	348	6.9%	25	1.1%	323	11.6%
3. 結婚していたが、死別した	17	0.3%	4	0.2%	13	0.5%
4. 未婚	50	1.0%	2	0.1%	48	1.7%
0. 無回答・不明	35	0.7%	25	1.1%	10	0.4%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表25. あなたは現在、どなたと一緒に暮らしていますか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 配偶者(パートナー)・子どもと	3,719	73.5%	1,814	79.7%	1,905	68.5%
2. 子どもと	303	6.0%	14	0.6%	289	10.4%
3. 配偶者(パートナー)・子ども・子の祖父母と	777	15.4%	370	16.3%	407	14.6%
4. 子どもと子の祖父母と	148	2.9%	14	0.6%	134	4.8%
5. その他	75	1.5%	37	1.6%	38	1.4%
0. 無回答・不明	37	0.7%	27	1.2%	10	0.4%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表26. あなたの職業についてうかがいます。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 勤め人(常勤)	3,365	66.5%	1,863	81.9%	1,502	54.0%
2. 勤め人(非常勤・パートタイム)	876	17.3%	30	1.3%	846	30.4%
3. 自営業(農林漁業の自営を含む)	438	8.7%	233	10.2%	205	7.4%
4. 会社経営	92	1.8%	71	3.1%	21	0.8%
5. 学生(就学中)	22	0.4%	11	0.5%	11	0.4%
6. 専業主婦	109	2.2%	2	0.1%	107	3.8%
7. その他	81	1.6%	21	0.9%	60	2.2%
0. 無回答・不明	76	1.5%	45	2.0%	31	1.1%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表26-1 職種

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 事務	1,042	24.6%	261	13.8%	781	33.3%
2. 製造	290	6.8%	173	9.1%	117	5.0%
3. 営業・販売	611	14.4%	341	18.0%	270	11.5%
4. サービス業	464	10.9%	235	12.4%	229	9.8%
5. 専門職(看護職・医師・教員・保育士など)	894	21.1%	284	15.0%	610	26.0%
6. 技術・研究職	492	11.6%	373	19.7%	119	5.1%
7. その他	297	7.0%	178	9.4%	119	5.1%
0. 無回答・不明	151	3.6%	48	2.5%	103	4.4%
合計	4,241	100.0%	1,893	100.0%	2,348	100.0%

表27. あなた、または配偶者(パートナー)の親ごさんからの次のような援助を受けていらっしゃいますか。

表27-1. 経済的援助

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. かなり受けている	402	7.9%	165	7.2%	237	8.5%
2. 少し受けている	944	18.7%	411	18.1%	533	19.2%
3. 受けていない	3,224	63.7%	1,473	64.7%	1,751	62.9%
4. 非該当	316	6.2%	125	5.5%	191	6.9%
0. 無回答・不明	173	3.4%	102	4.5%	71	2.6%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表27-2. 家事など日常生活の援助

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. かなり受けている	548	10.8%	246	10.8%	302	10.9%
2. 少し受けている	923	18.2%	435	19.1%	488	17.5%
3. 受けていない	3,090	61.1%	1,370	60.2%	1,720	61.8%
4. 非該当	318	6.3%	127	5.6%	191	6.9%
0. 無回答・不明	180	3.6%	98	4.3%	82	2.9%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表27-3. お子さんの世話の援助

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. かなり受けている	967	19.1%	452	19.9%	515	18.5%
2. 少し受けている	1,810	35.8%	860	37.8%	950	34.1%
3. 受けていない	1,854	36.6%	770	33.8%	1,084	39.0%
4. 非該当	317	6.3%	126	5.5%	191	6.9%
0. 無回答・不明	111	2.2%	68	3.0%	43	1.5%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表28. あなたが育ったご家庭は、どのような雰囲気のご家族・ご家庭だったと思いますか。

<私が育った環境は、>

表28-1. 地域の人や親族など、様々な人とのつきあいがあった

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	2,684	53.1%	1,221	53.6%	1,463	52.6%
2. ややそう思う	1,382	27.3%	602	26.4%	780	28.0%
3. どちらとも言えない	428	8.5%	210	9.2%	218	7.8%
4. あまりそう思わない	347	6.9%	135	5.9%	212	7.6%
5. そう思わない	145	2.9%	64	2.8%	81	2.9%
6. 非該当	22	0.4%	15	0.7%	7	0.3%
0. 無回答・不明	51	1.0%	29	1.3%	22	0.8%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表28-2. 家族や環境の変化に、柔軟に対応できた

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	1,607	31.8%	748	32.9%	859	30.9%
2. ややそう思う	1,644	32.5%	713	31.3%	931	33.5%
3. どちらとも言えない	1,199	23.7%	557	24.5%	642	23.1%
4. あまりそう思わない	374	7.4%	147	6.5%	227	8.2%
5. そう思わない	142	2.8%	58	2.5%	84	3.0%
6. 非該当	27	0.5%	16	0.7%	11	0.4%
0. 無回答・不明	66	1.3%	37	1.6%	29	1.0%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表28-3. 考えなどを、自由に話せる雰囲気があった

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	1,512	29.9%	662	29.1%	850	30.5%
2. ややそう思う	1,385	27.4%	634	27.9%	751	27.0%
3. どちらとも言えない	1,051	20.8%	524	23.0%	527	18.9%
4. あまりそう思わない	690	13.6%	283	12.4%	407	14.6%
5. そう思わない	337	6.7%	124	5.4%	213	7.7%
6. 非該当	25	0.5%	16	0.7%	9	0.3%
0. 無回答・不明	59	1.2%	33	1.4%	26	0.9%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表28-4. 怒りや喜びや悲しみなど、感情を出せる雰囲気があった

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	1,833	36.2%	790	34.7%	1,043	37.5%
2. ややそう思う	1,502	29.7%	707	31.1%	795	28.6%
3. どちらとも言えない	887	17.5%	465	20.4%	422	15.2%
4. あまりそう思わない	503	9.9%	188	8.3%	315	11.3%
5. そう思わない	258	5.1%	80	3.5%	178	6.4%
6. 非該当	24	0.5%	16	0.7%	8	0.3%
0. 無回答・不明	52	1.0%	30	1.3%	22	0.8%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表28-5. 愚痴や、批判的なことを言い合っていた

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	888	17.6%	395	14.7%	553	19.9%
2. ややそう思う	1,227	24.3%	527	23.2%	700	25.2%
3. どちらとも言えない	1,359	26.9%	652	28.6%	707	25.4%
4. あまりそう思わない	933	18.4%	440	19.3%	493	17.7%
5. そう思わない	560	11.1%	269	11.8%	291	10.5%
6. 非該当	26	0.5%	17	0.7%	9	0.3%
0. 無回答・不明	66	1.3%	36	1.6%	30	1.1%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表28-6. 家族の関係がうまくいっていた

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	1,819	36.0%	825	36.2%	994	35.7%
2. ややそう思う	1,541	30.5%	715	31.4%	826	29.7%
3. どちらとも言えない	916	18.1%	434	19.1%	482	17.3%
4. あまりそう思わない	432	8.5%	176	7.7%	256	9.2%
5. そう思わない	270	5.3%	78	3.4%	192	6.9%
6. 非該当	25	0.5%	16	0.7%	9	0.3%
0. 無回答・不明	56	1.1%	32	1.4%	24	0.9%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表28-7. ユーモアがあり、安らぎがあった

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	1,558	30.8%	658	28.9%	900	32.3%
2. ややそう思う	1,540	30.4%	723	31.8%	817	29.4%
3. どちらとも言えない	1,082	21.4%	542	23.8%	540	19.4%
4. あまりそう思わない	467	9.2%	190	8.3%	277	10.0%
5. そう思わない	332	6.6%	117	5.1%	215	7.7%
6. 非該当	25	0.5%	16	0.7%	9	0.3%
0. 無回答・不明	55	1.1%	30	1.3%	25	0.9%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表29. あなたが育ったころの親ごさんは、どのような「ご両親あるいはご夫婦」でしたか。

<私の両親は、>

表29-1. 困ったことなどがあると、助けあい協力していた

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	1,517	30.0%	664	29.2%	853	30.7%
2. ややそう思う	1,555	30.7%	744	32.7%	811	29.1%
3. どちらとも言えない	925	18.3%	440	19.3%	485	17.4%
4. あまりそう思わない	504	10.0%	208	9.1%	296	10.6%
5. そう思わない	306	6.0%	98	4.3%	208	7.5%
6. 非該当	194	3.8%	88	3.9%	106	3.8%
0. 無回答・不明	58	1.1%	34	1.5%	24	0.9%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表29-2. 考え方や価値観が共通しているところが多かった

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	787	15.6%	351	15.4%	436	15.7%
2. ややそう思う	1,197	23.7%	539	23.7%	658	23.6%
3. どちらとも言えない	1,469	29.0%	715	31.4%	754	27.1%
4. あまりそう思わない	857	16.9%	372	16.3%	485	17.4%
5. そう思わない	494	9.8%	177	7.8%	317	11.4%
6. 非該当	194	3.8%	88	3.9%	106	3.8%
0. 無回答・不明	61	1.2%	34	1.5%	27	1.0%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表29-3. お互いの考えや個性を尊重していた

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	882	17.4%	388	17.0%	494	17.8%
2. ややそう思う	1,252	24.7%	576	25.3%	676	24.3%
3. どちらとも言えない	1,402	27.7%	699	30.7%	703	25.3%
4. あまりそう思わない	774	15.3%	315	13.8%	459	16.5%
5. そう思わない	483	9.5%	172	7.6%	311	11.2%
6. 非該当	194	3.8%	88	3.9%	106	3.8%
0. 無回答・不明	72	1.4%	38	1.7%	34	1.2%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表29-4. 子育ての方針や教育の仕方などの考えは、ほぼ一致していた

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	1,027	20.3%	393	17.3%	634	22.8%
2. ややそう思う	1,365	27.0%	613	26.9%	752	27.0%
3. どちらとも言えない	1,436	28.4%	741	32.6%	695	25.0%
4. あまりそう思わない	592	11.7%	267	11.7%	325	11.7%
5. そう思わない	379	7.5%	138	6.1%	241	8.7%
6. 非該当	197	3.9%	90	4.0%	107	3.8%
0. 無回答・不明	63	1.2%	34	1.5%	29	1.0%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表29-5. 穏やかな雰囲気の間柄だった

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	1,160	22.9%	532	23.4%	628	22.6%
2. ややそう思う	1,280	25.3%	622	27.3%	658	23.6%
3. どちらとも言えない	1,140	22.5%	534	23.5%	606	21.8%
4. あまりそう思わない	696	13.8%	292	12.8%	404	14.5%
5. そう思わない	513	10.1%	185	7.2%	348	12.5%
6. 非該当	194	3.8%	88	3.9%	106	3.8%
0. 無回答・不明	76	1.5%	43	1.9%	33	1.2%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表29-6. あまり口をきかず、冷たい間柄だった

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	167	3.3%	61	2.7%	106	3.8%
2. ややそう思う	334	6.6%	142	6.2%	192	6.9%
3. どちらとも言えない	909	18.0%	430	18.9%	479	17.2%
4. あまりそう思わない	1,172	23.2%	597	26.2%	575	20.7%
5. そう思わない	2,215	43.8%	919	40.4%	1,296	46.6%
6. 非該当	194	3.8%	88	3.9%	106	3.8%
0. 無回答・不明	68	1.3%	39	1.7%	29	1.0%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表29-7. けんかをしたり感情をぶつけあっていた

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	639	12.6%	238	10.5%	401	14.4%
2. ややそう思う	1,117	22.1%	471	20.7%	646	23.2%
3. どちらとも言えない	1,073	21.2%	522	22.9%	551	19.8%
4. あまりそう思わない	956	18.9%	480	21.1%	476	17.1%
5. そう思わない	1,013	20.0%	437	19.2%	576	20.7%
6. 非該当	194	3.8%	88	3.9%	106	3.8%
0. 無回答・不明	67	1.3%	40	1.8%	27	1.0%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表29-8. 仲のよい夫婦だった

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	1,392	27.5%	630	27.7%	762	27.4%
2. ややそう思う	1,389	27.5%	673	29.6%	716	25.7%
3. どちらとも言えない	1,220	24.1%	564	24.8%	656	23.6%
4. あまりそう思わない	402	7.9%	154	6.8%	248	8.9%
5. そう思わない	394	7.8%	129	5.7%	265	9.5%
6. 非該当	196	3.9%	89	3.9%	107	3.8%
0. 無回答・不明	66	1.3%	37	1.6%	29	1.0%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表30. あなたが<中学生から20歳前後ごろ>まで、あなたの親ごさんはあなたにどのように関わっていたと思いますか、<父について>

表30-1. 父は私に何をすべきか・どのようにすべきか、いつも指示していた

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	320	6.3%	132	5.8%	188	6.8%
2. ややそう思う	719	14.2%	324	14.2%	395	14.2%
3. どちらとも言えない	983	19.4%	461	20.3%	522	18.8%
4. あまりそう思わない	1,261	24.9%	576	25.3%	685	24.6%
5. そう思わない	1,349	26.7%	580	25.5%	769	27.6%
6. 非該当	357	7.1%	161	7.1%	196	7.0%
0. 無回答・不明	70	1.4%	42	1.8%	28	1.0%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表30-2. 父は私の考えや感じていることに耳を傾けて聴いてくれた

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	731	14.4%	288	12.7%	443	15.9%
2. ややそう思う	1,121	22.2%	519	22.8%	602	21.6%
3. どちらとも言えない	1,204	23.8%	591	26.0%	613	22.0%
4. あまりそう思わない	851	16.8%	388	17.0%	463	16.6%
5. そう思わない	725	14.3%	287	12.6%	438	15.7%
6. 非該当	359	7.1%	162	7.1%	197	7.1%
0. 無回答・不明	68	1.3%	41	1.8%	27	1.0%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表30-3. 父は私の行動に口をはさまないが、いつも気づかってくれていた

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	1,025	20.3%	417	18.3%	608	21.8%
2. ややそう思う	1,534	30.3%	709	31.2%	825	29.6%
3. どちらとも言えない	1,001	19.8%	512	22.5%	489	17.6%
4. あまりそう思わない	595	11.8%	248	10.9%	347	12.5%
5. そう思わない	473	9.3%	186	8.2%	287	10.3%
6. 非該当	358	7.1%	161	7.1%	197	7.1%
0. 無回答・不明	73	1.4%	43	1.9%	30	1.1%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表30-4. 父は私と行動したがりがり、私のそばにいつもいたがった

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	169	3.3%	47	2.1%	122	4.4%
2. ややそう思う	342	6.8%	129	5.7%	213	7.7%
3. どちらとも言えない	1,024	20.2%	471	20.7%	553	19.9%
4. あまりそう思わない	1,313	26.0%	627	27.5%	686	24.6%
5. そう思わない	1,783	35.2%	801	35.2%	982	35.3%
6. 非該当	358	7.1%	161	7.1%	197	7.1%
0. 無回答・不明	70	1.4%	40	1.8%	30	1.1%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表30-5. 私は父に「男らしく」あるいは「女らしく」と言われた

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	437	8.6%	244	10.7%	193	6.9%
2. ややそう思う	636	12.6%	315	13.8%	321	11.5%
3. どちらとも言えない	934	18.5%	486	21.4%	448	16.1%
4. あまりそう思わない	1,043	20.6%	446	19.6%	597	21.5%
5. そう思わない	1,578	31.2%	580	25.5%	998	35.9%
6. 非該当	360	7.1%	162	7.1%	198	7.1%
0. 無回答・不明	71	1.4%	43	1.9%	28	1.0%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表30-6. 私は父に尊重されて育てられた

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	1,003	19.8%	398	17.5%	605	21.7%
2. ややそう思う	1,234	24.4%	579	25.4%	655	23.5%
3. どちらとも言えない	1,391	27.5%	682	30.0%	709	25.5%
4. あまりそう思わない	489	9.7%	208	9.1%	281	10.1%
5. そう思わない	507	10.0%	205	9.0%	302	10.9%
6. 非該当	360	7.1%	162	7.1%	198	7.1%
0. 無回答・不明	75	1.5%	42	1.8%	33	1.2%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

<母について>

表30-7. 母は私に何をすべきか・どのようにすべきか、いつも指示していた

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	843	16.7%	308	13.5%	535	19.2%
2. ややそう思う	1,546	30.6%	661	29.0%	885	31.8%
3. どちらとも言えない	1,032	20.4%	538	23.6%	494	17.8%
4. あまりそう思わない	839	16.6%	364	16.0%	475	17.1%
5. そう思わない	606	12.0%	300	13.2%	306	11.0%
6. 非該当	124	2.5%	59	2.6%	65	2.3%
0. 無回答・不明	69	1.4%	46	2.0%	23	0.8%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表30-8. 母は私の考えや感じていることに耳を傾けて聴いてくれた

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	1,460	28.9%	554	24.3%	906	32.6%
2. ややそう思う	1,832	36.2%	867	38.1%	965	34.7%
3. どちらとも言えない	920	18.2%	488	21.4%	432	15.5%
4. あまりそう思わない	416	8.2%	170	7.5%	246	8.8%
5. そう思わない	235	4.6%	92	4.0%	143	5.1%
6. 非該当	124	2.5%	59	2.6%	65	2.3%
0. 無回答・不明	72	1.4%	46	2.0%	26	0.9%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表30-9. 母は私の行動に口をはさまないが、いつも気づかってくれていた

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	1,301	25.7%	573	25.2%	728	26.2%
2. ややそう思う	1,696	33.5%	776	34.1%	920	33.1%
3. どちらとも言えない	1,053	20.8%	515	22.6%	538	19.3%
4. あまりそう思わない	509	10.1%	207	9.1%	302	10.9%
5. そう思わない	308	6.1%	101	4.4%	207	7.4%
6. 非該当	124	2.5%	59	2.6%	65	2.3%
0. 無回答・不明	68	1.3%	45	2.0%	23	0.8%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表30-10. 母は私と行動したが、私のそばにいつもいたがった

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	305	6.0%	98	4.3%	207	7.4%
2. ややそう思う	707	14.0%	280	12.3%	427	15.3%
3. どちらとも言えない	1,454	28.7%	667	29.3%	787	28.3%
4. あまりそう思わない	1,276	25.2%	574	25.2%	702	25.2%
5. そう思わない	1,117	22.1%	550	24.2%	567	20.4%
6. 非該当	125	2.5%	60	2.6%	65	2.3%
0. 無回答・不明	75	1.5%	47	2.1%	28	1.0%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表30-11. 私は母に「男らしく」あるいは「女らしく」と言われた

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	543	10.7%	225	9.9%	318	11.4%
2. ややそう思う	901	17.8%	368	16.2%	533	19.2%
3. どちらとも言えない	1,173	23.2%	571	25.1%	602	21.6%
4. あまりそう思わない	1,034	20.4%	462	20.3%	572	20.6%
5. そう思わない	1,210	23.9%	541	23.8%	669	24.0%
6. 非該当	125	2.5%	60	2.6%	65	2.3%
0. 無回答・不明	73	1.4%	49	2.2%	24	0.9%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表30-12. 私は母に尊重されて育てられた

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	1,391	27.5%	600	26.4%	791	28.4%
2. ややそう思う	1,566	31.0%	721	31.7%	845	30.4%
3. どちらとも言えない	1,283	25.4%	624	27.4%	659	23.7%
4. あまりそう思わない	332	6.6%	125	5.5%	207	7.4%
5. そう思わない	285	5.6%	99	4.3%	186	6.7%
6. 非該当	125	2.5%	59	2.6%	66	2.4%
0. 無回答・不明	77	1.5%	48	2.1%	29	1.0%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表31. あなたが育ってきたご家庭について、現在どのように感じていますか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 満足している	1,891	37.4%	887	39.0%	1,004	36.1%
2. やや満足している	1,550	30.6%	693	30.4%	857	30.8%
3. どちらとも言えない	733	14.5%	353	15.5%	380	13.7%
4. やや不満である	422	8.3%	165	7.2%	257	9.2%
5. 不満である	354	7.0%	112	4.9%	242	8.7%
6. 非該当	59	1.2%	32	1.4%	27	1.0%
0. 無回答・不明	50	1.0%	34	1.5%	16	0.6%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表3 2. あなたは将来、育ってきたご家庭のような家庭を築いていきたいと思いませんか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	1,182	23.4%	534	23.5%	648	23.3%
2. ややそう思う	1,245	24.6%	570	25.0%	675	24.3%
3. どちらとも言えない	698	17.8%	428	18.8%	470	16.9%
4. あまりそう思わない	644	12.7%	278	12.2%	366	13.2%
5. そう思わない	958	18.9%	393	17.3%	565	20.3%
6. 非該当	80	1.6%	42	1.8%	38	1.4%
0. 無回答・不明	52	1.0%	31	1.4%	21	0.8%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表3 3. あなたは普段お子さん（乳幼児）と過ごしている時どのような気持ちですか。

表3 3-1. 充実感があって、楽しい

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. いつもそう思う	2,286	45.2%	1,158	50.9%	1,128	40.5%
2. 時々そう思う	2,356	46.6%	942	41.4%	1,414	50.8%
3. どちらとも言えない	290	5.7%	124	5.4%	166	6.0%
4. あまりそう思わない	64	1.3%	15	0.7%	49	1.8%
5. そう思わない	9	0.2%	2	0.1%	7	0.3%
0. 無回答・不明	54	1.1%	35	1.5%	19	0.7%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表3 3-2. 子どもから安らぎを得られる

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. いつもそう思う	2,507	49.6%	1,221	53.6%	1,286	46.2%
2. 時々そう思う	2,228	44.0%	896	39.4%	1,332	47.9%
3. どちらとも言えない	191	3.8%	92	4.0%	99	3.6%
4. あまりそう思わない	75	1.5%	31	1.4%	44	1.6%
5. そう思わない	11	0.2%	1	0.0%	10	0.4%
0. 無回答・不明	47	0.9%	35	1.5%	12	0.4%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表3 3-3. おもしろいことや発見がある

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. いつもそう思う	3,126	61.8%	1,362	59.8%	1,764	63.4%
2. 時々そう思う	1,782	35.2%	814	35.8%	968	34.8%
3. どちらとも言えない	77	1.5%	49	2.2%	28	1.0%
4. あまりそう思わない	20	0.4%	9	0.4%	11	0.4%
5. そう思わない	5	0.1%	4	0.2%	1	0.0%
0. 無回答・不明	49	1.0%	38	1.7%	11	0.4%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表3 3-4. 大変でどうしたらよいかわからない

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. いつもそう思う	118	2.3%	54	2.4%	64	2.3%
2. 時々そう思う	1,537	30.4%	579	25.4%	958	34.4%
3. どちらとも言えない	683	13.5%	327	14.4%	356	12.8%
4. あまりそう思わない	1,609	31.8%	754	33.1%	855	30.7%
5. そう思わない	1,056	20.9%	524	23.0%	532	19.1%
0. 無回答・不明	56	1.1%	38	1.7%	18	0.6%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表3 3-5. わずらわしくて、イライラする

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. いつもそう思う	50	1.0%	17	0.7%	33	1.2%
2. 時々そう思う	1,948	38.5%	671	29.5%	1,277	45.9%
3. どちらとも言えない	656	13.0%	305	13.4%	351	12.6%
4. あまりそう思わない	1,263	25.0%	631	27.7%	632	22.7%
5. そう思わない	1,087	21.5%	612	26.9%	475	17.1%
0. 無回答・不明	55	1.1%	40	1.8%	15	0.5%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表3 3-6. 子どもといることがいやになる

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. いつもそう思う	34	0.7%	18	0.8%	16	0.6%
2. 時々そう思う	641	12.7%	178	7.8%	463	16.6%
3. どちらとも言えない	459	9.1%	176	7.7%	283	10.2%
4. あまりそう思わない	1,178	23.3%	534	23.5%	644	23.1%
5. そう思わない	2,695	53.3%	1,334	58.6%	1,361	48.9%
0. 無回答・不明	52	1.0%	36	1.6%	16	0.6%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表3 4. 「仕事」と「育児」について伺います。

表3 4-1. 現在のあなたにとって、「仕事」と「育児」のバランスはどのようになっていますか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 仕事より、育児中心の生活	464	9.2%	77	3.4%	387	13.9%
2. どちらかと言うと、仕事より育児の比重が大きい	582	11.5%	120	5.3%	462	16.6%
3. 仕事と育児のバランスがとれている	1,034	20.4%	352	15.5%	682	24.5%
4. どちらかと言うと、育児より仕事の比重が大きい	1,836	36.3%	864	38.0%	972	34.9%
5. 育児より、仕事が中心の生活	971	19.2%	780	34.3%	191	6.9%
0. 無回答・不明	172	3.4%	83	3.6%	89	3.2%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表3 4-2. 希望としては、どのようにしたいですか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 仕事より、育児中心の生活	753	14.9%	226	9.9%	527	18.9%
2. どちらかと言うと、仕事より育児の比重が大きい	485	9.6%	141	6.2%	344	12.4%
3. 仕事と育児のバランスがとれている	2,980	58.9%	1,349	59.3%	1,631	58.6%
4. どちらかと言うと、育児より仕事の比重が大きい	343	6.8%	262	11.5%	81	2.9%
5. 育児より、仕事が中心の生活	144	2.8%	118	5.2%	26	0.9%
0. 無回答・不明	354	7.0%	180	7.9%	174	6.3%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表3 5. 「仕事のやりがい」と「収入」について伺います。

表3 5-1. 現在のあなたにとって、「仕事のやりがい」と「収入」のバランスはどのようになっていますか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 仕事はやりがいより、収入の多さが優先	448	8.9%	213	9.4%	235	8.4%
2. どちらかと言うと、仕事はやりがいより、収入の多さが優先	814	16.1%	348	15.3%	466	16.7%
3. 仕事のやりがいと収入のバランスがとれている	1,648	32.6%	702	30.8%	946	34.0%
4. どちらかと言うと、仕事は収入の多さより、やりがいが優先	1,234	24.4%	611	26.8%	623	22.4%
5. 仕事は収入の多さより、やりがいが優先	472	9.3%	236	10.4%	236	8.5%
0. 無回答・不明	443	8.8%	166	7.3%	277	10.0%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表3 5-2 希望としては、どのようにしたいですか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 仕事はやりがいより、収入の多さが優先	489	9.7%	243	10.7%	246	8.8%
2. どちらかと言うと、仕事はやりがいより、収入の多さが優先	400	7.9%	166	7.3%	234	8.4%
3. 仕事のやりがいと収入のバランスがとれている	3,103	61.3%	1,327	58.3%	1,776	63.8%
4. どちらかと言うと、仕事は収入の多さより、やりがいが優先	396	7.8%	198	8.7%	198	7.1%
5. 仕事は収入の多さより、やりがいが優先	293	5.8%	164	7.2%	129	4.6%
0. 無回答・不明	378	7.5%	178	7.8%	200	7.2%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表3 6. あなたには、現在の自分をどのように思っていますか。

表36-1. 自分が好き

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	948	18.7%	479	21.0%	469	16.9%
2. ややそう思う	1,659	32.8%	685	30.1%	974	35.0%
3. どちらとも言えない	1,591	31.4%	729	32.0%	862	31.0%
4. あまりそう思わない	603	11.9%	246	10.8%	357	12.8%
5. そう思わない	193	3.8%	91	4.0%	102	3.7%
6. 非該当	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
0. 無回答・不明	65	1.3%	46	2.0%	19	0.7%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表36-2. 自分には魅力がある

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	445	8.8%	268	11.8%	177	6.4%
2. ややそう思う	1,157	22.9%	512	22.5%	645	23.2%
3. どちらとも言えない	2,209	43.7%	999	43.9%	1,210	43.5%
4. あまりそう思わない	878	17.4%	318	14.0%	560	20.1%
5. そう思わない	299	5.9%	128	5.6%	171	6.1%
6. 非該当	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
0. 無回答・不明	71	1.4%	51	2.2%	20	0.7%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表36-3. 自分には能力がある

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	457	9.0%	293	12.9%	164	5.9%
2. ややそう思う	1,320	26.1%	677	29.7%	643	23.1%
3. どちらとも言えない	1,980	39.1%	865	38.0%	1,115	40.1%
4. あまりそう思わない	933	18.4%	285	12.5%	648	23.3%
5. そう思わない	303	6.0%	108	4.7%	195	7.0%
6. 非該当	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
0. 無回答・不明	66	1.3%	48	2.1%	18	0.6%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表36-4. 自分は平均的である

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	606	12.0%	256	11.2%	350	12.6%
2. ややそう思う	1,515	29.9%	610	26.8%	905	32.5%
3. どちらとも言えない	1,685	33.3%	777	34.1%	908	32.6%
4. あまりそう思わない	858	17.0%	403	17.7%	455	16.3%
5. そう思わない	316	6.2%	178	7.8%	138	5.0%
6. 非該当	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
0. 無回答・不明	79	1.6%	52	2.3%	27	1.0%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表36-5. 自分とはりえない人間だ

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	198	3.9%	85	3.7%	113	4.1%
2. ややそう思う	571	11.3%	207	9.1%	364	13.1%
3. どちらとも言えない	1,477	29.2%	662	29.1%	815	29.3%
4. あまりそう思わない	1,622	32.1%	689	30.3%	933	33.5%
5. そう思わない	1,114	22.0%	584	25.7%	530	19.0%
6. 非該当	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
0. 無回答・不明	77	1.5%	49	2.2%	28	1.0%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表36-6. 自分は運が悪い

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	280	5.5%	123	5.4%	157	5.6%
2. ややそう思う	559	11.0%	219	9.6%	340	12.2%
3. どちらとも言えない	1,450	28.7%	737	32.4%	713	25.6%
4. あまりそう思わない	1,350	26.7%	567	24.9%	783	28.1%
5. そう思わない	1,350	26.7%	581	25.5%	769	27.6%
6. 非該当	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
0. 無回答・不明	70	1.4%	49	2.2%	21	0.8%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表36-7. 自分は親としてよくやっている

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. そう思う	524	10.4%	279	12.3%	245	8.8%
2. ややそう思う	1,699	33.6%	773	34.0%	926	33.3%
3. どちらとも言えない	1,821	36.0%	768	33.7%	1,053	37.8%
4. あまりそう思わない	745	14.7%	307	13.5%	438	15.7%
5. そう思わない	200	4.0%	103	4.5%	97	3.5%
6. 非該当	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
0. 無回答・不明	70	1.4%	46	2.0%	24	0.9%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表37. あなたは、現在のあなたの家庭の経済状態をどのように感じていますか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. ゆとりがある	312	6.2%	127	5.6%	185	6.6%
2. ややゆとりがある	848	16.8%	383	16.8%	465	16.7%
3. 普通	1,899	37.5%	873	38.4%	1,026	36.9%
4. やや苦しい	1,283	25.4%	576	25.3%	707	25.4%
5. 苦しい	659	13.0%	274	12.0%	385	13.8%
0. 無回答・不明	58	1.1%	43	1.9%	15	0.5%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表38. あなたは、現在のあなたの心の状態について、どのように感じていますか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. ゆとりがある	281	5.6%	145	6.4%	136	4.9%
2. ややゆとりがある	788	15.6%	355	15.6%	433	15.6%
3. 普通	1,754	34.7%	892	39.2%	862	31.0%
4. ややゆとりがない	1,555	30.7%	604	26.5%	951	34.2%
5. ゆとりがない	630	12.5%	240	10.5%	390	14.0%
0. 無回答・不明	51	1.0%	40	1.8%	11	0.4%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表39. あなたは現在の生活について、どのように感じていますか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 満足している	858	17.0%	436	19.2%	422	15.2%
2. やや満足している	1,937	38.3%	892	39.2%	1,045	37.5%
3. どちらとも言えない	956	18.9%	409	18.0%	547	19.7%
4. やや不満である	884	17.5%	350	15.4%	534	19.2%
5. 不満である	374	7.4%	149	6.5%	225	8.1%
0. 無回答・不明	50	1.0%	40	1.8%	10	0.4%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表40. あなたは自分の性（男性は男であること、女性は女であること）をどのように思いますか。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 自分の性で、よかったと思う	2,836	56.1%	1,443	63.4%	1,393	50.1%
2. 自分の性で、どちらかというよかったと思う	972	19.2%	356	15.6%	616	22.1%
3. どちらとも言えない	985	19.5%	410	18.0%	575	20.7%
4. 自分の性で、どちらかというよかったと思わない	133	2.6%	13	0.6%	120	4.3%
5. 自分の性で、よかったと思わない	77	1.5%	12	0.5%	65	2.3%
0. 無回答・不明	56	1.1%	42	1.8%	14	0.5%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表41-1. 男である・女であることをくよかったと思う場合>

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 家庭の中で優遇される	582	11.5%	319	14.0%	263	9.5%
2. 教育の場で優遇される	155	3.1%	82	3.6%	73	2.6%
3. 社会（しきたりや慣習）で優遇される	482	9.5%	347	15.2%	135	4.9%
4. 雇用や職場において優遇される	601	11.9%	447	19.6%	154	5.5%
5. 能力が優れている	255	5.0%	176	7.7%	79	2.8%
6. 体力・パワーがある	1,200	23.7%	988	43.4%	212	7.6%
7. 行動力がある	840	16.6%	580	25.5%	260	9.3%
8. 養う力がある	513	10.1%	432	19.0%	81	2.9%
9. 差別される立場や弱者の視点で考えられる	638	12.6%	169	7.4%	469	16.9%
10. 家族から期待をかけられる	587	11.6%	399	17.5%	188	6.8%
11. <男らしさ>または<女らしさ>を備えている	488	9.6%	258	11.3%	230	8.3%
12. (女は)妊娠・出産できる	1,859	36.7%	20	0.9%	1,839	66.1%
13. (男は)妊娠・出産しない	327	6.5%	297	13.0%	30	1.1%
14. 理屈抜きによい	1,262	24.9%	643	28.3%	619	22.2%
15. その他	253	5.0%	91	4.0%	162	5.8%
MA回答数合計	10,042	198.5%	5,248	230.6%	4,794	172.3%
無回答・不明	492	9.7%	355	15.6%	137	4.9%
MA回答者数合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表41-2. 男である・女であることをくいやだと思う場合>

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 家庭の中で差別される	536	10.6%	64	2.8%	472	17.0%
2. 教育の場で差別される	202	4.0%	33	1.4%	169	6.1%
3. 社会（しきたりや慣習）で差別される	1,055	20.9%	126	5.5%	929	33.4%
4. 雇用や職場において差別される	1,003	19.8%	67	2.9%	936	33.6%
5. 能力がない	184	3.6%	47	2.1%	137	4.9%
6. 体力・パワーがない	625	12.4%	50	2.2%	575	20.7%
7. 行動力がない	238	4.7%	47	2.1%	191	6.9%
8. 養う力がない	580	11.5%	57	2.5%	523	18.8%
9. 同性の考え方や行動パターンがいやに思う	843	16.7%	168	7.4%	675	24.3%
10. 家族の期待に応えなくてはならない	592	11.7%	347	15.2%	245	8.8%
11. <男らしさ>または<女らしさ>を要求される	585	11.6%	166	7.3%	419	15.1%
12. (女は)妊娠・出産できるから	129	2.5%	19	0.8%	110	4.0%
13. (男は)妊娠・出産しない	163	3.2%	66	2.9%	97	3.5%
14. 理屈抜きにいやだ	133	2.6%	79	3.5%	54	1.9%
15. その他	212	4.2%	96	4.2%	116	4.2%
MA回答数合計	7,080	139.9%	1,432	62.9%	5,648	202.9%
無回答・不明	1,706	33.7%	1,377	60.5%	329	11.8%
MA回答者数合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表4 2. 子育てをしていて、あったらよいと思う支援、あるいは配慮して欲しかったことなどはどのようなことですか。

A. サービスについて

表4 2-1A. シッターの派遣（親の公的・私的な都合で子どもの世話ができない時）

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. すでに利用した	314	6.2%	129	5.7%	185	6.6%
2. 今後利用したい	2,640	52.2%	1,038	45.6%	1,602	57.6%
3. 必要ない	1,676	33.1%	873	38.4%	803	28.9%
0. 無回答・不明	429	8.5%	236	10.4%	193	6.9%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表4 2-2A. 育児のヘルパー派遣（一緒に世話をしたり、アドバイスしてくれる）

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. すでに利用した	65	1.3%	33	1.4%	32	1.1%
2. 今後利用したい	2,143	42.4%	865	38.0%	1,278	45.9%
3. 必要ない	2,334	46.1%	1,102	48.4%	1,232	44.3%
0. 無回答・不明	517	10.2%	276	12.1%	241	8.7%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表4 2-3A. 保育園への送り迎えサービス

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. すでに利用した	119	2.4%	52	2.3%	67	2.4%
2. 今後利用したい	2,619	51.8%	1,127	49.5%	1,492	53.6%
3. 必要ない	1,887	37.3%	853	37.5%	1,034	37.2%
0. 無回答・不明	434	8.6%	244	10.7%	190	6.8%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表4 2-4A. 家事をしてくれるヘルパーの派遣

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. すでに利用した	60	1.2%	25	1.1%	35	1.3%
2. 今後利用したい	1,693	33.5%	606	26.6%	1,087	39.1%
3. 必要ない	2,841	56.2%	1,392	61.2%	1,449	52.1%
0. 無回答・不明	465	9.2%	253	11.1%	212	7.6%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表4 2-5A. 子育てに関する相談などの事業

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. すでに利用した	206	4.1%	46	2.0%	160	5.7%
2. 今後利用したい	3,022	59.7%	1,296	56.9%	1,726	62.0%
3. 必要ない	1,345	26.6%	683	30.0%	662	23.8%
0. 無回答・不明	486	9.6%	251	11.0%	235	8.4%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表4 2-6A. 子育てに限らない、仕事や家族の相談など親個人への精神的サポート

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. すでに利用した	52	1.0%	10	0.4%	42	1.5%
2. 今後利用したい	2,607	51.5%	973	42.8%	1,634	58.7%
3. 必要ない	1,920	38.0%	1,045	45.9%	875	31.4%
0. 無回答・不明	480	9.5%	248	10.9%	232	8.3%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表4 2-7A. 土曜・日曜に利用できる行政窓口や各種サービス

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. すでに利用した	278	5.5%	135	5.9%	143	5.1%
2. 今後利用したい	3,908	77.2%	1,666	73.2%	2,242	80.6%
3. 必要ない	477	9.4%	246	10.8%	231	8.3%
0. 無回答・不明	396	7.8%	229	10.1%	167	6.0%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表4 2-8A. 家庭の事情に配慮した、地域組織の運営（役員や当番など）

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. すでに利用した	104	2.1%	53	2.3%	51	1.8%
2. 今後利用したい	2,868	56.7%	1,193	52.4%	1,675	60.2%
3. 必要ない	1,470	29.1%	722	31.7%	748	26.9%
0. 無回答・不明	617	12.2%	308	13.5%	309	11.1%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

B. 料金

表4 2-1 B. シッターの派遣（親の公的・私的な都合で子どもの世話ができない時）

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 無料がよい	1,004	19.8%	496	21.8%	508	18.3%
2. ある程度の負担はしてもよい	2,710	53.6%	1,061	46.6%	1,649	59.3%
0. 無回答・不明	1,345	26.6%	719	31.6%	626	22.5%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表4 2-2 B. 育児のヘルパー派遣（一緒に世話をしたり、アドバイスしてくれる）

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 無料がよい	1,488	29.4%	592	26.0%	896	32.2%
2. ある程度の負担はしてもよい	1,690	33.4%	749	32.9%	941	33.8%
0. 無回答・不明	1,881	37.2%	935	41.1%	946	34.0%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表4 2-3 B. 保育園への送り迎えサービス

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 無料がよい	1,757	34.7%	868	38.1%	889	31.9%
2. ある程度の負担はしてもよい	1,703	33.7%	645	28.3%	1,058	38.0%
0. 無回答・不明	1,599	31.6%	763	33.5%	836	30.0%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表4 2-4 B. 家事をしてくれるヘルパーの派遣

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 無料がよい	834	16.5%	408	17.9%	426	15.3%
2. ある程度の負担はしてもよい	2,059	40.7%	803	35.3%	1,256	45.1%
0. 無回答・不明	2,166	42.8%	1,065	46.8%	1,101	39.6%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表4 2-5 B. 子育てに関する相談などの事業

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 無料がよい	3,168	62.6%	1,285	56.5%	1,883	67.7%
2. ある程度の負担はしてもよい	442	8.7%	262	11.5%	180	6.5%
0. 無回答・不明	1,449	28.6%	729	32.0%	720	25.9%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表4 2-6 B. 子育てに限らない、仕事や家族の相談など親個人への精神的サポート

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 無料がよい	2,738	54.1%	1,036	45.5%	1,702	61.2%
2. ある程度の負担はしてもよい	568	11.2%	308	13.5%	260	9.3%
0. 無回答・不明	1,753	34.7%	932	40.9%	821	29.5%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表4 2-7 B. 土曜・日曜に利用できる行政窓口や各種サービス

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 無料がよい	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
2. ある程度の負担はしてもよい	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
0. 無回答・不明	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表4 2-8 B. 家庭の事情に配慮した、地域組織の運営（役員や当番など）

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 無料がよい	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
2. ある程度の負担はしてもよい	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
0. 無回答・不明	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

表4 3. 最後にこのアンケートの内容に関するご意見がありましたら、ご自由にご記入ください。

	合計	割合	男性	割合	女性	割合
1. 意見有り	895	17.5%	333	14.7%	562	19.8%
0. 無回答・不明	4,164	82.5%	1,943	85.3%	2,221	80.2%
合計	5,059	100.0%	2,276	100.0%	2,783	100.0%

C-4 結婚・出産・育児の感情浮沈図調査 -専業主婦の育児危機と対処法-

目的

本研究は、女性が結婚、出産してから現在に至るまでの様々な出来事を「感情浮沈図記録」を用いて明らかにし、そこから導き出された育児中の母親の満足感、困難感の要因を析出することによって、少子時代の子育て支援策のあり方を検討するために実施した。

本研究で「結婚・出産・育児の感情浮沈図記録」を用いることの意義は、次のとおりである。「いかなる人も、その中で生起する出来事は、彼女自身及び彼女の家族や、彼女の友人、親戚など当該集団構成員の記憶の中に意味づけされる。結婚、出産、育児の記憶をたどれば、その出来事をめぐって生じたさまざまな喜びや悩みが思い出される。そして、その喜びの共有や悩みを克服するために、なんらかの対処が彼女らによって展開されたはずである。さらにこのような一連の活動は、彼女らのその後の人生、生活になんらかの影響を及ぼしてきた」からである。

方法

I 県内の母親(長子が小学校以上で乳幼児の子育てを終了した者)6名を対象に、聞き取り調査を実施した。調査時間は、一人あたり約90分、調査員は2名で実施した。

使用した調査項目は、Reuben Hill¹⁾の研究からヒントを得て1983年に島内が開発したものをもとに、今回の母親用に改定したものである。調査の内容は、

- A. 社会的特性
 - B. 結婚・出産・育児の感情浮沈図記録
 - C. 結婚・出産・育児の感情浮沈の内容
- である。

インタビュー調査の主な内容は、不調な出来事と順調な出来事別に、1.時期と内容、2.困難性と良好性、3.原因の認知(当時と現在)、4.

対処の方法、5.影響などである。

調査は、結婚・出産・育児の感情浮沈図記録票(説明用)を用いて、調査員が浮沈図の説明をし、その後、対象者自身が感情浮沈図を記入した。記入された感情浮沈図に基づいて、その山(順調)と谷(不調)の内容について調査者が質問し、記録した。

なお、本調査を補完するためにS県の子育てネットワーク役員を対象にグループインタビューを実施した。

結果

〈ケース1〉

社会的特性:35歳、結婚9年目。核家族、自営業の夫と子どもは2人(小学校1年生の長女、年長の長男)。結婚前、非常勤で働いた経験がある。

結婚・出産・育児の感情浮沈図:図1

最も不調だった出来事:近隣の母親同士の人間関係

(1)時期と内容

長女を出産し、育児を始めた頃から、第2子の長男を出産する頃まで。同じ子育て中の母親が多い住宅地だったため、人間関係が難しかった。

(2)困難性

表面上は仲良くしているが、感情の行き違いがあると仲間はずれにされる。同一行動を要求されるように感じていた。

(3)原因の認知

自分が抜きたいという気持ちがあるが、ストレスとなっていた。グループ行動の頻度が高いと苦痛になる。

(4)対処の仕方

同じ町内なので、つかず離れずの関係になるよう距離を持てばいいと気づいた。自然と消極的に行動した。

夫に相談もしたが、夫の反応は鈍く、引越したいと考えたこともあった。友人に相談する

と子どもがたくさんいる地域は「うらやましい」といわれた。

(5) 影響

たくさんの母親がいるので、気の合う人もいることがわかった。子どもにとっては、同級生も多くいい環境だと思っている。同世代で、同じ母親なのでちょっと子どもをみてもらうこともできることがわかった。

気の合わない人とは、1対1にならないように気をつければいいことを学んだ。

最も順調だった出来事：第2子の出産による環境の変化と自分自身の変化

(1) 時期と内容

2番目の長男を出産し、産後すぐ実家に帰っていた1ヶ月間。環境が変わったことで、冷静に物事を見られるようになった。

(2) 特にうれしかった点（良好性）

下の子は1時間睡眠で、手がかり、身体的にはきつかった。しかし、見方の変化がゆとりを生み出した。

(3) 原因の認知

特別なことはないが、環境の変化が生み出したことだと考えている。

(4) 対処の仕方

下の子の授乳時間は上の子の絵本タイムとして関わった。2番目の出産は、積極的な育児仲間をつくることができた。

(5) 影響

積極的に行動すれば、気の合う仲間を作ることができる。子ども同士は遊ばなくても親同士は付き合いが続いている。精神的に強くなった。メリット・デメリットを区分して考えることを学んだ。

夫は相談しても「のれんに腕押し」という感じであったが、子どもがなつけばかわいくなくなるということが見えるようになった。

その他：専門家は義務的な返事しか返ってこない。

《ケース2》

社会的特性：32歳、結婚7年目。営業職の夫と2人の子ども（長女6歳、長男4歳）の核家族。保母として3年半の勤務経験あり。

結婚・出産・育児の感情浮沈図：図2

最も不調だった出来事：友人や知り合いがひとりもいなかった

(1) 時期と内容

結婚して1年目、第1子出産前後の数ヶ月間。九州で育ち近畿地方で勤務、結婚後現在地に転居したので、知り合いや友人が全くいなかった。育児ノイローゼに近い状況だった。

(2) 困難性

出産前は、子どももいないし、同世代の母親に声をかけることもできなかった。知り合いも友人もいなくて、話を聞いてくれる人がいない。夫は仕事で帰宅が遅い。

子どもはなかなか寝ず、泣くことも多く、「こんなはずではなかった」と途方に暮れた。「なんで泣くの」と子どもと泣いていた。

(3) 原因の認知（当時と現在）

朝、「行ってらっしゃい」と夫を送り出してから、「お帰りなさい」まで子どもと1対1で過ごしたことは、新しい土地にきたからである。また、家族からも遠く、夫の理解が不十分であった。

(4) 対処の仕方

夫に話し、相談するが理解してもらえなかった。毎日、実家へ電話していた。

「2時間おきに授乳、抱っこしてのあやすなどしていた。この生活がいつまで続くのか」と思っていたとき、新生児訪問の機会を得た。よその家庭も同様（泣く子どもが多い）であることがわかった。電話番号を教えてくれた。大変嬉しかったが、世代の違い（高齢の人）で電話はしなかった。

(5) 影響

保母は子育てが上手だと思われるが、「人の子と自分の子は違う」と思った。

子どもの成長と時間が支えてくれた。この時始めた育児日記を、今でも家族日記として続けている。

近所は、同居世帯が多く、「祖母が育児、嫁は仕事、嫁が育児をするのはおかしい」という考え方があつた。自分で子育てができることはすばらしい。核家族だからできた。同居のメリット、核家族のメリットがあつた。

最も順調だった出来事：育児を振り返るゆとりができたこと

(1) 時期と内容

第2子出産以降

(2) 特にうれしかった点（良好性）

目に見える子どもの成長。楽しみである。

(3) 原因の認知（当時と現在）

二人目のゆとりと育児日記をつけたこと。成長がよくわかる。

(4) 対処の仕方

子どもを通しての友人ができた。子どもの同級生の母親同士で話すメリットを生かした。

(5) 影響

子育ての理想と現実のギャップがわかつた。育児ノイローゼもこの辺が原因だと思つた。

夫とのコミュニケーションが一番だが、母親同士のつながりがあればグチれる人がいれば）かなり解消する。新生児訪問の時など、育児サークルを紹介してくれるといいと思う。

子どもをみるチャンスが少ない人が母親になっている。子どもへの対応（扱い）ができない人が増えている。県外から引っ越してきた人には、育児サークルはとて素晴らしい資源だということを学んだ。

《ケース3》

社会的特性：32歳、結婚して10年。勤め人の夫とその両親、長女（小2）長男（小1）次女（年中）の3世代同居。幼稚園教諭として4年間の勤務経験がある。

結婚・出産・育児の感情浮沈図：図3

最も不調だった出来事：育児疲れで暗い毎日

(1) 時期と内容

結婚して1年目、第1子出産から第2子出産後までの2年間程度。第1子は、夜泣きが多く、手がかかつた。体が大きく、座椅子で抱っこすることが多く、腰を痛めた。第2子のつわりもひどく、流早産しそうになつた。

(2) 困難性

夫の両親とは別居。自分の母親も、夫の母親も働いていて忙しく、この時は家族3人の生活で、「昼間は子どもと2人だけの生活で、暗い日々」をおくつていた。

(3) 原因の認知（当時と現在）

夫は仕事が忙しく、育児疲れに理解をしめしてくれるが、帰りが遅く、協力は少ない。夜泣きで手がかかり、援助者がいないので、疲れていたため。

(4) 対処の仕方

実家の母親に相談し、手伝いを頼んだ。高校や短大時代の友人に相談する事で、精神的に支えてもらった。職場の元上司で、親しい人がいたので相談にのってもらつた。似たような境遇だったので、よく理解してくれた。

「いつかは楽になる日がくると信じて」自分ひとりで育ててきた。

(5) 影響

近所の人はいいい人たちだったが、同年齢の子どもはいなかつたので、あまり相談できなかつた。近所の公園へ行くようになって、同年齢の母親同士で、お互いに助け合つていける友人ができた。誰も頼る人はいないので、熱が出て、つわりでも育児をしてきた。自分ひとりで育ててきたので、根性がついた。予測していないことが多かつたが、いい経験をしたと思つている。

行政サービスは知つていた。利用すればよかつたが、意地になつていた。

3年前、第3子出産を機会に、夫の両親と同居することになり、子どもの面倒をみる約束をした。

最も順調だった出来事：心にゆとりができ、

子育てサポーターになったこと

(1) 時期と内容

第2子が入園したところから、精神的な面や育児面でゆとりがでてきた。第3子の成長で、時間にもゆとりができた。空いている時間は子どもに接していたいと思っているので、子育てサポーターをするようになってから現在まで。

(2) 特にうれしかった点（良好性）

第3子の友人の母親がサポーターをしているので、活動内容は知っていた。

幼稚園教諭の再就職の話もあったが、サポーターは午前中だけでなので、時間的にも丁度良い。いろいろな子どもたちに出会い、接することができ、学びも多く楽しい。

(3) 原因の認知（当時と現在）

精神的なゆとり、育児面での実質的なゆとりと子どもが好きであること。

(4) 対処の仕方

夫の両親と同居することにした。母親は協力的で、子育てだけでなくサポーターの活動にも理解を示してくれた。サポーターになってから家族全体が協力的で、夫もよく手伝ってくれるようになった。「新しい発見」だと感じている。

(5) 影響

いろいろな子どもたちに出会える。子どもをみていると、その家の様子がよくわかる。

自分の子どもと照らし合わせて、子どもをみると学ぶことがたくさんあることがわかった。虐待や毎日のイライラなどの育児ノイローゼから脱するには、話をできる人の存在が重要であることがわかった。

また、保健婦と一緒にになってサポーターができたら良いと考えている。

《ケース4》

社会的特性：37歳、結婚13年目、長女・次女
結婚・出産・育児の感情浮沈図：図4

最も不調だった出来事：体調不良（つわり）

と姑の干渉

(1) 時期と内容

第1子が2歳の時。つわりがひどく家に閉じこもりがち。第2子出産後、家事と育児で多忙。第2子が喘息、姑に干渉された3年間。結婚してから3年目の時。

(2) 困難性

つらくとも第1子の面倒を見なければならぬ。身体的苦痛（第2子の夜泣きが続く睡眠不足）。ストレス（周囲から取り残されているというあせり、夫は出張や帰宅が遅く、子どもの世話が大変で話し相手がいない）

(3) 原因の認知（当時と現在）

当時は、男女平等なのに女性のみが犠牲になっている。核家族だから仕方がない。毎日子どもと過ごすことは大変だ、と思っていた。

現在は、今にして思えば大したことではない。子どもに当たったことを反省している。

(4) 対処の仕方

同じマンションの子育て中の友人と子どものことや夫のことを話し合った。実家に1ヶ月半くらい子どもを連れて里帰りした。夫は理解してくれているが仕事が忙しい（土、日も接待など）

(5) 影響

自分自身は、（育児が）大変ということは一時で、過ぎてしまえば子どもにとって大切な時期である。幼稚園に入れば子どもは離れていくということを学んだ。

夫が休日に在宅するようになった。

最も順調だった出来事：妊娠した時

(1) 時期と内容

結婚して2年目の妊娠。

(2) 特にうれしかった点（良好性）

周囲の人々から祝福された。

(3) 原因の認知（当時と現在）

早く子どもが欲しいとは思っていなかったが、両方の両親が喜んでくれたこと。

(4) 対処の仕方

初めての妊娠時は気がつかないうちに切迫流産したので、絶対安静にした。夫が病院を紹介

してくれた。

(5) 影響

子どもを産むことは大変なことである。夫は家事を手伝わないと回らないということを認識し、家事（洗濯、アイロンかけ）を手伝ってくれた。

その他：長子が幼稚園に入園する頃になって時間的余裕が出来るようになった。保護者会の役員を引き受け、友人も出来、役員の仕事もやりがいがあった。

夫の給料が高いので、保育料も高い。

最近の母親は、サービスやボランティアを受けても当たり前という意識だ。自分の時間を大切するのはよいが、自己中心的で子どもをアクセサリーのように考えている。紙おむつを平気でごみ箱に捨てる。自分なら自宅に持って帰る。

《ケース5》

社会的特性：38歳、結婚11年目、長男・長女。

結婚・出産・育児の感情浮沈図：図5

最も不調だった出来事：幼稚園の母親間の人間関係

(1) 時期と内容

結婚して5年目、幼稚園の親との子どもがらみの人間関係。

(2) 困難性

子どもが集団に入れるかどうか不安。親の人間関係を、子どもへどう説明したらよいか悩んだ。

幼稚園は帰宅が早いので、友人宅へ遊びに行く。その時、おやつを持参させるとか、行儀とか、お誕生会で誰を招待するか、と悩んだ。

その親は、気に入った友達だけ、幼稚園から直接車に乗せて連れて行った。自分の子どもを含めて、連れて行かれない子どもはかわいそう。どうして周りのことを考えないのか、自分の子どもは嫌われているのかと悩んだ。

(3) 原因の認知（当時と現在）

当時は、なんであのようなになるのか不思議だった。学生のまま、親になったようだと思った。

現在は、母親の両親も若くなっているのに、やさしさや思いやりの少ない親が多くなっているのかもしれない。結婚してしばらくしてからの子どもだったので、自分の子どもがかわいかったのだろう。その親から、「体が大きいのにやさしいのね」と子どものことを言われたことがあったので、外見で判断したのだろう。

(4) 対処の仕方

子育て仲間との情報交換・おしゃべりをしてストレスを解消した。

夫に助言を求めたら、話しをよく聴いてくれて「俺が言ってやる」と言われたが断った。長老の意見を聞くために、両親にも話したら、「長い人生では、大したことではない」といわれた。

幼稚園の先生に相談したらクラスを別にしてくれた。

(5) 影響

その母親は、自分の子どもをよく見ているのだと思う。ルーズや意地悪な母親ではなく、自分の子どもがかわいくて仕方がなかったのだろう。子どもの喧嘩に親が出るべきではない。

最も順調だった出来事：妊娠、子育て

(1) 時期と内容

結婚して4年目、第1子から2子までの妊娠、子育て。

(2) 特にうれしかった点（良好性）

公園仲間に注目されたり、初対面の人から話しかけられた。女の幸せを実感した。

(3) 原因の認知（当時と現在）

結婚したら子どもを生みたかったので、充実感があった。兄弟がいなかったので、いつも大人に囲まれていた。なんでも買ってもらえるので、一人は楽しいと思っていた。しかし、一方で兄弟のいる人は相談ができるのでうらやましく思っていた。

(4) 対処の仕方

母親は、子どもをたくさん作りなさい、3人生んでも経済的に援助すると言ってくれた。（母親は兄弟が多いので親に頼れなかった）

(5)影響

夫も子どもが好きであたたかい人。2人目からおむつを替えてくれるようになった。子どもだけを育てる権利があれば、育てたい。

女同士の間関係の難しさを学んだ。

両親から得た人間、自然に対するやさしさや思いやりを子どもに伝えたい。夫も他の子どもを誉めたり叱ったり、公平な人。

その他：かかりつけの小児科医、保健婦によくしてもらった。

健診の手伝いをしていると、きちんとした母親と、まめでない母親やだらしのない母親など、親からの躰の差がみえる。

娘には仕事を続けなさいと言うだろう。1年間休めたら仕事を続けたかもしれないが、2歳位までは自分で見たい。

自分の考え、趣味を持っていれば夫と対等になれる。

《ケース6》

社会的特性：38歳、結婚15年目、長女・長男・次男

結婚・出産・育児の感情浮沈図：図6

最も不調だった出来事：子どもの病気

(1)時期と内容

結婚7、8年目、第3子が学校健診で心疾患と診断された時の1ヶ月位。

結婚して3年目、第2子が先天性眼瞼下垂と診断されたとき。2、3年。

(2)困難性

男の子で喜んでいただけに心配だった。

子どもの自画像を描かせると瞼が垂れているように書くので気にかけた。夫は妹の夫に「信じたくない」と言ったらしい。夫の帰宅が遅いので一人で考え込んでしまった。自分の辛い気持ちをわかってほしかった。

(3)原因の認知（当時と現在）

重い病気と思った。

先天性なので治らないのかと考え込んだ。

(4)対処の仕方

医師に胆道閉塞と比べればまだよいと言われ、気持ちを切り替えた。再検査結果で異常なしと言われた。

保健所の1歳半健診を受診した時、大学病院への紹介状を書いてくれた。妹の夫が眼科医をしているので相談し、形成外科で手術すれば治ると言われた。よく母に相談した。

(5)影響

第1子は3子へ心を遣ってくれる。

最も順調だった出来事：第3子出産と心のゆとり

(1)時期と内容

結婚して7年目、第3子が産まれた時は、心にゆとりができ、育児が楽しく、家庭内が明るくなった。

(2)特にうれしかった点（良好性）

この子がいるだけで家が明るくなった。

(3)原因の認知（当時と現在）

気持ちのゆとりがあったから。第1子の時は、一生懸命になり過ぎて大変だった。買い物にも行けなかった。第2子の時は、こんなものかなと思っていた。第3子は親の顔を見ている。

(4)対処の仕方

第2子が、間に挟まって甘えさせていないので、時々抱いてあげる。

(5)影響

一時、第1子に辛く当たった時もあったが、初潮が始まって手伝いや話しをするようになった。感謝、感動など表現力の豊かな母親の生き方を子どもにも伝えたい。

その他：保健婦さんは、マニュアルどおりで決め付ける。医師はやさしい。

最近の母親は、ケジメがない。よいことと悪いことをきちんと躰られていない。

母がボランティアをすでにしていたので、自分も参加した。

仕事は続けたかったが、両親とも働いていたので退職した。

《全体のまとめ》

1.不調な出来事とその対応について

不調な出来事としては「出産・育児の相談相手の不在」、「育児仲間や他の母親間の人間関係」、「育児疲れと体調不良」、「子どもの病気」であった。これらへの対処の仕方は、そのほとんどが実家の母親や友人(近隣または学生時代)に相談し、気持ちを切り替えることでその不調な出来事を克服していた。また、育児による自分の成長を意識し、子育て中の身近な友人等のサポートの必要性と重要性を学んでいた。

2.順調な出来事とその対応について

順調な出来事は、出産、子育てによる充実感と育児にゆとりができた時で、その対処としては、家族の一体感(育児への理解と協力)、子育てを通じた友人の獲得が多く、子育ての感動、夫などの家族や身近な人々のサポートの重要性を学んでいた。

3.その他

身近な人々(素人)のサポートとあわせて、公的サービスや専門家によるサポートのあり方も指摘された。新生児訪問時の母親への情報提供のあり方、マニュアル的な指導や世代差などが提起されていた。

考 察

「結婚・出産・育児の浮沈図記録」を用いて、女性が結婚、出産してから現在に至るまでの様々な出来事から導き出された育児中の母親の満足感、困難感の要因を析出することによって、今後の子育て支援策の理想的なあり方を検討した。

結婚から育児期までのライフイベントの内容とその対処法、影響について、家族、地域、そして行政の3つの分析視角から検討してみよう。

1.家族対処をめぐる課題

家族危機は周期によって訪れることは、よく知られている¹⁾。今回の調査では、結婚から育児期までの周期を調査したものである。不調の出来事は、「出産・育児の相談相手の不在」、「育

児仲間や他の母親間の人間関係」、「育児疲れと体調不良」、「子どもの病気」などであった。その対処法は、実家の母親や友人へ相談することによって乗り切っていたが、重要な相談相手として夫をあげた者は少なく、むしろ「犠牲感」や「孤立感」を抱きながら、かろうじて対処している姿が浮かんでくる。こうした不調への対処経験は、子どもの成長に伴い、やがて子育ての自信、身近な友人によるサポートの必要性、人間関係の学び等、危機対処の自信が自己成長へとつながっていく。即ち、母親にとって出産・育児に関する出来事は、時間の経過とともに順調への要因であったり、不調への要因になるといった二面性を持っている。

一方、子育て中の夫は、家庭をサブシステムとしてとらえ、残業、接待、休日出勤といった従来の職場中心の姿が浮かんでくる。彼らは、家事・育児の大変さを、妻からの訴えで事の重大さに気づき、何らかの役割行動をとるか、さもなくば仕事と家庭の間で葛藤するしかないともいえる。夫の家事・育児参加の度合いによって、妻の不調が軽減されることが、本調査でも明らかになった。そのためには、少なくとも夫の育児休暇を含め、残業の軽減等、職場への啓発活動をより細かに推進する必要がある。

夫の役割を代替・補完しているのが実母である。里帰りや電話による相談など、情緒的安定に果たす実母の存在が大きい。海外赴任者並に里帰り、呼び寄せ手当ての支給などの検討は不可能であろうか。

2.地域

1)育児グループの意義と課題

自分の母親だけでなく、身近な育児経験者の支援の有効性が認められた。平成9年度の本研究班の研究でも、二人に一人は育児の情報源として友人、家族をあげ²⁾、別の報告でも、一番信頼する育児・教育情報源として約7割が「近所の友人・知人」をあげている³⁾。出産・育児における当事者集団である、いわゆる育児グル

ープとの関わりが重要である。育児という共通の条件は、体験を分かち合い、相互に学び合えるという利点がある。

一方、育児グループは利点だけではない。当事者同士の関係は、わが子を優先する余り人間関係の葛藤を生んだり、頻回なグループ行事は、逆に負担感を与える。これは、育児グループの運営上の問題である。グループの目的のほか、具体的な活動と役割、決め方のルールなど、支援者側も相談窓口を設けるなどの活動支援体制を用意する必要がある。

2) 育児グループのネットワーク化

育児グループの規模は、数人規模から100人以上の規模まで大小さまざまであり、育児期が終われば自然消滅したり、逆にS県K市のように、子育てを支援する側に変化・発展するという特色がみられる⁴⁾。

表1 ネットワークの意義

子育てグループの情報の限界：マスメディアは遠すぎる(情報交換のノウハウの獲得)
母親同士の、子育ての出会いの場をつくる
身近な情報と広域の情報の両方が必要
市町村の子育て環境の違いがよくわかる
子育て中の母親がメンバーにいるサークル運営がよい。
みんなの子育て、共感する心が大切
市町村では、一般の母親の担当セクションはない。

育児グループの次の課題は、グループ内情報の客観性や活性化のためのネットワーク化の必要性である。表1は、S県の育児グループのネットワークを組織した動機などについて役員から聴取したものである。このネットワークのリーダーシップを発揮している役員は、育児から手が離れつつある母親が多く、自分の経験を生かしたボランティア活動へと発展している。従来の専門家(保健婦)による組織化から、素人による組織化に変化している点が興味深い。育

児中の母親にとってもっとも身近な資源であると同時に、今後の子育て支援のあり方を示唆している。

3. 行政の課題

1) 育児サポーターの養成・支援

従来の子育て支援策に加えて、今回聞き取り調査を行ったI県やS県K市で実施している育児サポーターの普及が考えられる。I県では、登録した育児経験者による活動で、育児教室や育児グループの支援活動を行っている。ただし、登録者は保育士などが多い⁵⁾。S県K市では、育児経験者によるボランティアグループで、相談や育児グループ支援、広報活動を行っている。

ちなみに英国では、NCT(National Child Trust)という妊娠、出産、早期親子関係に関する情報とサポートのための全国組織があり、両親の交流事業、母乳育児の奨励や禁煙運動などのキャンペーン事業、母親教室の開催、研修、情報提供、調査研究などを400の支部単位で実施している⁶⁾。

行政は、母親たちの参加を得ながらサポーター養成プログラムや育児グループ運営マニュアルなどを開発し、研修や情報を提供していくことは容易であろう。

2) 情報提供方法の見直し

「行政サービスは意地になって利用しなかった」というケースがあったが、理由は不明である。先に述べたS県の育児ネットワークが実施した会員対象に実施したアンケートによると、厚生省のポスター「育児をしない男を父とは呼ばない」を知っているものは93.5%で、「厚生省に拍手」としつつ、一方で「国や世の中が子育てを応援していると実感できない」が77.8%という結果が出ている⁷⁾。この数字が示すものは、サービス不足ではなく、むしろアカウンタビリティの方法論の問題と思われる⁸⁾。従来的一方交通的な情報提供のあり方が問われているいえよう。むしろ、子育てグループあての情報提供など、対面関係を重視した方法を検討す

べきであろう。

3)初期対応システムの確立

新生児訪問事業は、孤独な母親への情報提供者として有効である。しかし、世代ギャップを感じた母親は、自らの判断によって、その後の援助を止めている。より有効な子育て支援事業を目指すならば、訪問者の研修や訪問指針などについての再検討が必要であろう。行政サービスの初期接触者とのギャップは、そのまま行政評価につながり、後のサービスに影響を与える。

地域の中での初期対応の重要性は、新生児訪問事業だけではない。母子保健推進員、児童委員など制度化された事業もあるし、愛育班などの住民組織活動もある。子育て環境や社会環境が大きく変化している現在、これらの住民組織が、果たしてどの程度機能しているかの再検討も必要である。

まとめ

1. 夫の育児参加の促進（特に、職場環境・職場体質改善のための雇用者への啓発）
2. 子育てグループの支援（作り方、運営の仕方、紹介など）
3. 子育てグループのネットワーク化（市町村単位、県単位など）
4. 子育て経験者による育児サポーターの養成・支援（サポーターの年齢は、育児中の母親と、年齢のひらきが少ないこと）
5. 公的サービスの情報提供方法の見直し（子育て

てグループや住民組織の利点である、対面関係を活用する）

6. 産院を含め、新生児訪問や住民組織などの初期対応システムの再検討。

（小山 修・斉藤 進・加藤忠明）

参考文献

- 1) 島内憲夫・家族ストレスに対する保健的介入. 石原邦雄編. 家族生活とストレス. p276-301, 垣内出版. 1985
- 2) 平成9年度厚生省心身障害研究「少子化についての専門的研究」報告書(主任研究者平山宗弘). 1998
- 3) 山岡テイ監修. 子育て生活基本調査報告書. ベネッセ. 1998
- 4) 平山宗宏・小山修. 地域活動事業. 厚生省児童家庭局母子保健課監修・母子保健マニュアル作成委員会編. 母子保健マニュアル. p240-249, 1996
- 5) いしかわ子育て財団. 子育て便利帳. 1999
- 6) 小山修. イギリスにおける地域母子保健と住民参加 妊娠・出産・育児に関わる住民組織の役割 . 平成7年度家庭・出生問題総合調査研究推進事業報告書. p39-64, 日本総合愛育研究所. 1995
- 7) 埼玉県子育てネットワーク. 3801人の子育て「実感」アンケート報告. 埼玉県子育てネットワークフェスタ資料. 2000
- 8) 山上信一. 「行政評価」の時代. NTT出版. 1998

※-2 感情・意識・身体反応記録表 (記入用)

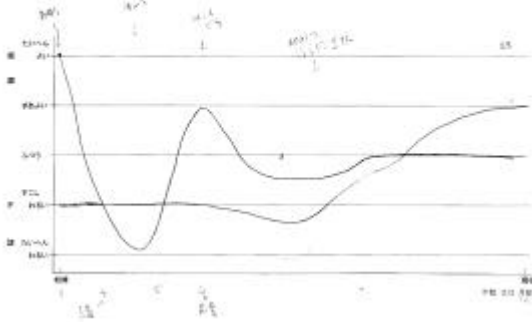


図 1 ケース 1 の感情浮沈図

※-2 感情・意識・身体反応記録表 (記入用)

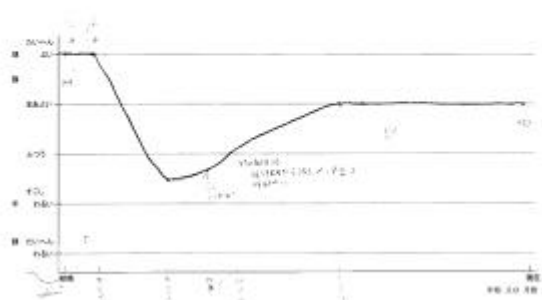


図 4 ケース 4 の感情浮沈図

※-2 感情・意識・身体反応記録表 (記入用)

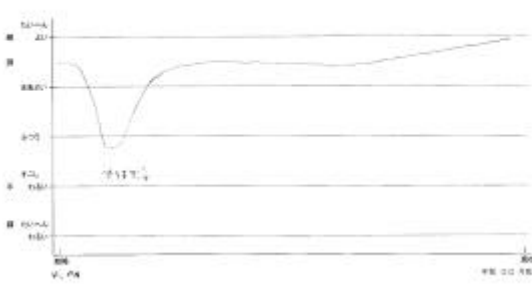


図 2 ケース 2 の感情浮沈図

※-2 感情・意識・身体反応記録表 (記入用)

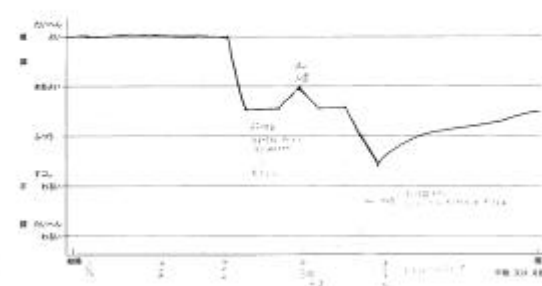


図 5 ケース 5 の感情浮沈図

※-2 感情・意識・身体反応記録表 (記入用)

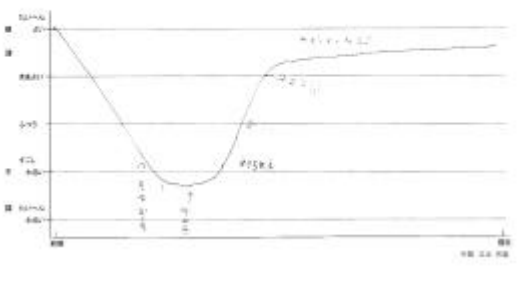


図 3 ケース 3 の感情浮沈図

※-2 感情・意識・身体反応記録表 (記入用)

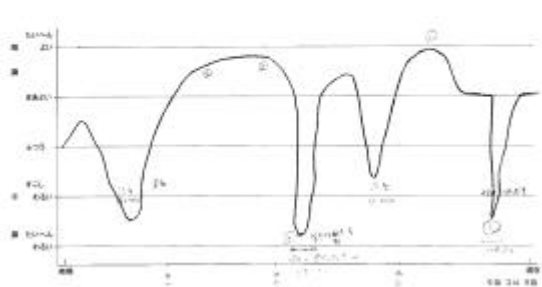


図 6 ケース 6 の感情浮沈図

C-5 システム・ダイナミクスによる、社会環境が結婚・出産・育児に及ぼす影響予測モデルの検討

研究目的

従来の研究方法の限界性の確認

少子化に関する政策科学的研究の手法には、保育園などの施設やそこへ通う子どもや、親へのアンケートや面接などの調査データの分析や、官公庁が定期的に発表する社会経済指標の2次資料の分析が適用されてきた。しかし、少子化問題を政策的に検討するには「人口の予測」を分析の基軸とする必要があり、その上で、関連する社会経済および心理的要因を探るの でなければ、政策に適用するのが困難である。

シミュレーションソフトの適用可能性

そこで、中長期の人口予測と、人口の増減に関連し、政策的に介入できる変数の発見、およびその介入程度を定量的に把握する方法として、システム・ダイナミクス(以下、SD)による数理的シミュレーションに着目した。それを既存の統計学的な分析方法の特性と比較し、SDによる予測が、実態調査に根拠を置くために必要な活用方法を検討する。

自治体が独自に政策立案を図る方向付け

SDが、地方自治体の政策立案に有効かどうかを検討する。

研究方法

本テーマを主題とする研究会を組織し、政策科学研究における解析方法の比較を行った。特に、今後の少子化研究に活用可能なSD用モデル開発及び妥当性、並びに課題について検討した。

1) 政策科学の研究に用いられる研究手法の比較

政策科学の研究に用いられてきた研究手法を、解析方法の面から比較し、それぞれの特徴と限界を明らかにする。解析方法は、相関分析、因子分析、重回帰分析、時系列分析、共分散構造分析および数理的シミュレーションとしてシステム・ダ

イナミクスの6手法を取りあげた。

2) SDモデルの開発と運用上の課題

少子化の問題にとって、子どもを産む可能性あるある世代の人口の地域間移動は、人口動態を大きく左右する。そこで、1例として、地域間の移動(都市部から地方へ)を想定し生産年齢人口のUターンのモデルを作成した。また、社会経済環境、特にエンゼルプランなど、出産と育児に關係する環境も、同様に、人口動態を大きく左右する。そこで、出産や育児の環境が、実際の出産率にどのように影響するかを検討するモデルを作成した。

なお、実際のシミュレーションでは、モデルを作成後、ある年次のデータを初期値として入力し、変数間の関係方程式、係数の値を決定して、はじめて予測が可能となる。また、介入可能な政策変数の操作で、他の変数がどう変化するかなどの感度分析も可能である。今回の報告では、従来の研究手法との比較を目的とするため、シミュレーションに関しては、別に報告する。

SDの運用上の課題は、モデルの妥当性、データの妥当性、カオス的特性、確率論モデル的性格の導入などの予測研究にかかわる諸課題を検討した。

結果および考察

1 政策科学研究に用いられる研究手法の比較

表1にデータ解析方法についての比較を示す。相関係数の分析では、2変数のどちらの変数が要因かわからないこと。重回帰分析は、線形性を前提とする仮定が常に妥当かどうかかわからないこと。因子分析は、因子が発見されても、従属変数(目的変数)が無いため政策に利用しにくく、あくまで一連の分析のための中間生成物であること。

共分散構造分析は、重回帰分析と因子分析を内包しており、さらにモデル化を自由にできることから、近年注目されている。しかし、この分析で明らかにされるパスの係数は、ケースレベルの横

断的なデータが持つ変数間のばらつきを偏回帰係数であって、「ある政策変数が1単位増加すれば、他の変数がどれだけ変化するか」といった感度分析的な値ではないことに注意を要する。ただし、観測や測定ができない構成概念を変数として扱える点で、社会経済指標にはなかった政策変数を定立するのには有益であろう。

時系列解析は、交差相関分析や多変量時系列解析、時系列の重回帰分析では、ある変数を別の変数の要因とみなしたモデルを検定することはできる。横断的なデータのように、集団内の変数のばらつきではなく、変化量と変化量の関連を分析している点で、横断的なデータに対して適用してきた従来の解析手法とは大きくことなる。このことが、経済政策などで時系列分析が多用されている要因であろう。しかし、時系列分析は、過去の変化の分析には優れていても、将来の予測に関しては、将来になればなるほど、信頼区間が非常に広がり、予測値も過去のデータの平均値に近づく。そのため、現実的には、数年先の予測値までしか使えない。

SDは、ローマクラブの『成長の限界』のレポートで用いられたことが有名で、わが国でも、1970年代から、オペレーションズ・リサーチの分野における都市政策の研究で用いられてきた¹⁾。今回、われわれが使用したソフトウェア²⁾も、人口予測を含むいくつかの研究で活用されてきた実績がある³⁻⁴⁾。この考え方の基礎には、経済学において用いられてきた「ストック」と「フロー」の概念で物事の動態を把握する理論がある。ストックとは、 t 時から $(t+)$ 時の間に、出入りがあった結果、ある時点にその状態で残っている量の総和であり、フローとは、 t の間に、ストックに入った、あるいはストックから出た量を意味する。SDは、ストックに初期値を与え、関連するストックやフローの間の関係を、時間 t を含む方程式で結ぶことで、任意の t の時点でのストックやフローの値を予測する数学的な解析方法（連立定差方程式）である。

人口問題は、現在は子どもでも、将来は成長して結婚し、出産によって新たな人口を再生産する要因でもある。それゆえ、静態的な人口を時系列でつないだ曲線を外挿する予測ではなく、子どもを産む親世代になることを想定した動態的モデルによる予測の方が精度が高い。SDは、時間軸での動態を、定量的に予測できるため、人口予測にとってはこの点においても有望な手法と考えられる。これまでは、自治体にとって将来の命運を握る少子化対策であっても、統計情報と政策研究が国家レベルに集約され、各自治体においては、漠然とした不安に基づき、数字的な見とおしが立てられないまま対策を打つばかりであった。しかし、政策科学にSDを用いることで、自治体レベルのデータを持って、独自に予測および対策のための政策が立案可能になる。

ただし、SDは、決定論的に値を決めるので、集団内のばらつきについては従来の解析手法のように、信頼区間もなければ、統計学的検定も行えない。そのため、予測の誤差についての評価が困難である。予測の精度を上げるには、モデルに使用する諸変数間をつなぐ関係式の係数を求める際に、従来の統計学的手法による結果を用いるなどが必要である。

2 SD用のモデルの構築

図1に、地域間の移動（都市部から地方へ）を想定したモデルを示す。子どもを産み育てる世代は産業での生産年齢人口であり、そのためには、労働需要を創出する必要がある。このモデルに感度分析を施すことで、例えば、ある地域での「企業の労働需要」を何%増加することで、「生産年齢人口」や「出生数」が何%増加するか、といった定量的な感度分析が可能である。図2に、社会経済環境、特にエンゼルプランなど、出産と育児に関係する構成概念が、実際の出産率にどのように影響するかを検討するモデルを示す。

出産や育児の環境といった変数は、保育所の数など、より政策的に操作できやすい変数ではないが、国民にとっては数そのものよりも、それらの

過不足の結果を実感する。その意味でこれらは構成概念にあたる。SDにとっては、このような変数も、数値でさえ与えれば、モデル化も計算も可能である。また、たとえ、計算によるシミュレーションは行わなくても、モデルを構築するだけでも、既存の報告や当事者へのヒアリングで得た情報を総合的に織り込むことが出来る。さらに、それを政策立案のかかわる関係者と討議することで、得られた知見を整理しやすいというメリットがある。

3 SDの運用上の課題

1)モデルの妥当性の検討

SDで使うモデルがたとえ理論的には整合性があり、関係者の知見を網羅していたとしても、現実の実態と乖離しては、そのモデルが予測する値には意味がない。それどころか、誤った方向性を導くこととなり、危険である。そのため、どの変数をモデルに入れるかの検討には、単に定性的な知見だけでは不十分である。そこで、例えば、出生率と関連づける変数を社会経済指標から複数の時系列データを選び、その中から、時系列分析のひとつである「交差相関」を行って有意な関連があったものを投入する、といった方法が堅実であろう。また、そのようにして構築されたモデルの妥当性を検証する方法として、例えば、そのモデルに従って、過去のある時点から現在までを「予測」した値が、その間の実際の値とのズレが、どの程度に収まっているかを、統計学的に検定をすることなどが必要であろう。

2) 入力（使用）データの妥当性

モデルの妥当性を検討するためには、過去の現実のデータとのすりあわせが必要である。社会経済指標の場合、市町村データの整備状況は、まちまちである。その場合は、既存の中でもっとも近い変数を使用するか、あるいは行政が、研究者の要望や社会経済の動向を鑑みて、新たな指標データを集めることを検討すべきであろう。

3) カオス的特性

モデルに必要なデータが得られたとしても、S

Dのモデルに投入するデータは、ある年次のデータをストックの初期値として与え、それに関連する他の変数との方程式の係数は、時間に依存しないで一定値であるという、決定論的な与える予測である。そのため、その予測曲線向は、初期値の値の少し違いだけでも、長期的にみれば、予測する曲線が大きく変動するという「バタフライ効果」が見られることがある⁵⁾。そのような決定論の制約を予め理解した上で、結果を解釈する必要があるろう。

4) 確率論モデル的性格の導入

現在の経済学的な政策分析では、決定論とはパラダイムが異なる確率論的モデルに立脚するものが主流である。そこで、SDを確率論的に用いるためには、方程式の係数もいくつかの範囲で操作したシミュレーションを百回程度行った時の予測曲線の分布を観察するなどして、推測統計学でいうところの信頼区間的な範囲を示すことが必要であろう。

5) 予測値は公開すれば変化する

予測した結果が、将来を危惧するような結果であった場合、それを関係者や国民に公開すると、そのような将来が到来することを回避しようとする対策や行動がとられる。予測とは、ある仮定が続くとして、という条件付きのものであるため、対策行動のよって条件が変わることで、現実の方は、当然、当初の予測値とは違ったものとなる。これは、予測の宿命であり、本務でもある。そのため、予測は、何度も改訂し、当初からの変化も含めて公開する必要があるろう。

4 今後の展望 - 自治体職員や市民との共同 -

この様に、予測数値は、現状のままと仮定したときの未来の推測であるため、絶対的なものではない。しかし、これは裏を返せば、現状の変数を変えていけば「未来」は変わる、ということである。この場合の変数は、SDの操作によって結果的に「発見」されることもあるが、むしろ、どの変数の値を変えるかを、当該の自治体で「決定」してゆくことが可能であり、また必要であろう。

それにより、「子どもを産み育てやすい環境づくり」とか、「子どもが夢をもてる社会づくり」といった場合、住民参加、職員参加を得て、積極的にある変数を操作し、どの程度の効果が見られそうかの見当をつけてから、政策に活かすことで、根拠ある行政施策やまちづくりが可能となろう。

地方分権の潮流の中で自治体、特に市町村へは、母子保健や介護保険のサービスなどが移管され、市町村単位で政策立案する必要がある。われわれが使用したSDのソフトウェアは、GUI (Graphical User Interface) が発達しているため、数学的な難解さを抜きに操作が可能である。そのため、現場のスタッフや当事者である市民も、研究者の支援が多少あれば、ある程度の訓練で使いこなすことが可能である。実際、三重県の津市では、大学の研究室と共同で、SDのモデルを開発し、政策立案に利用した実績がある。今後、SDを活用することで、従来、研究者の主導による結果を啓示的に示されてきた将来予測が、今後

は、自治体独自のシミュレーションにより、政策立案と決定に根拠を与えてゆける可能性が高まったと言えよう。

(大賀英史、斉藤進、小山修)

文献

- 1) 今村和男 編 システム分析. 日科技連, p211-222, 1991.
- 2) High Performance Systems Inc. Stella Research II, 1996.
- 3) 津都市総合モデル開発研究委員会 津都市総合モデル開発研究報告書. 1995.
- 4) 藤正 巖 日本の将来の社会構造(政策研究院人口構造推計エンジン (GRIPS-SSProj) の利用法 Part) Art and Science, 1999.
- 5) Rao C.R. Statistics and Truth: Putting Chance to Work, 2nd Edition (邦訳) 統計学とは何か-偶然を生かす-. 藤越康祝, 柳井晴夫, 田栗正章. 丸善株式会社, p20-21, 1993 .

表1 政策分析に用いるデータの解析方法

	相関分析	因子分析	重回帰分析	共分散構造分析	時系列分析	SD 1)
因果関係の示唆	弱い	-	ややあり	かなりあり	強い	強い
データ	横断・縦断	横断	横断	横断が主2)	縦断調査	初期値は横断3)
予測性	なし	なし	なし	なし	短期予測	中長期予測
検定	変数間の関連	-	目的変数との関連	モデル	自己相関/モデル	不能

1) システムダイナミクス

2) 縦断的データに適用は可能

3) 変数間の関係式の係数は時間に依存しないため、定数である縦断データとも見なせる。

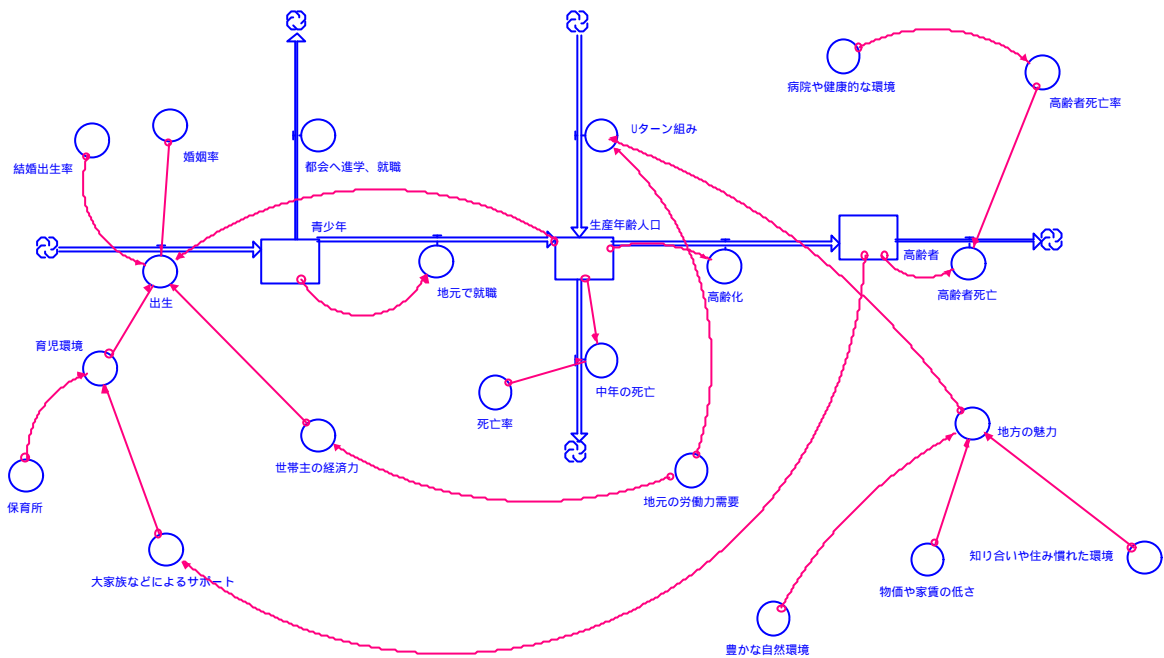


図1 地域間移動モデル

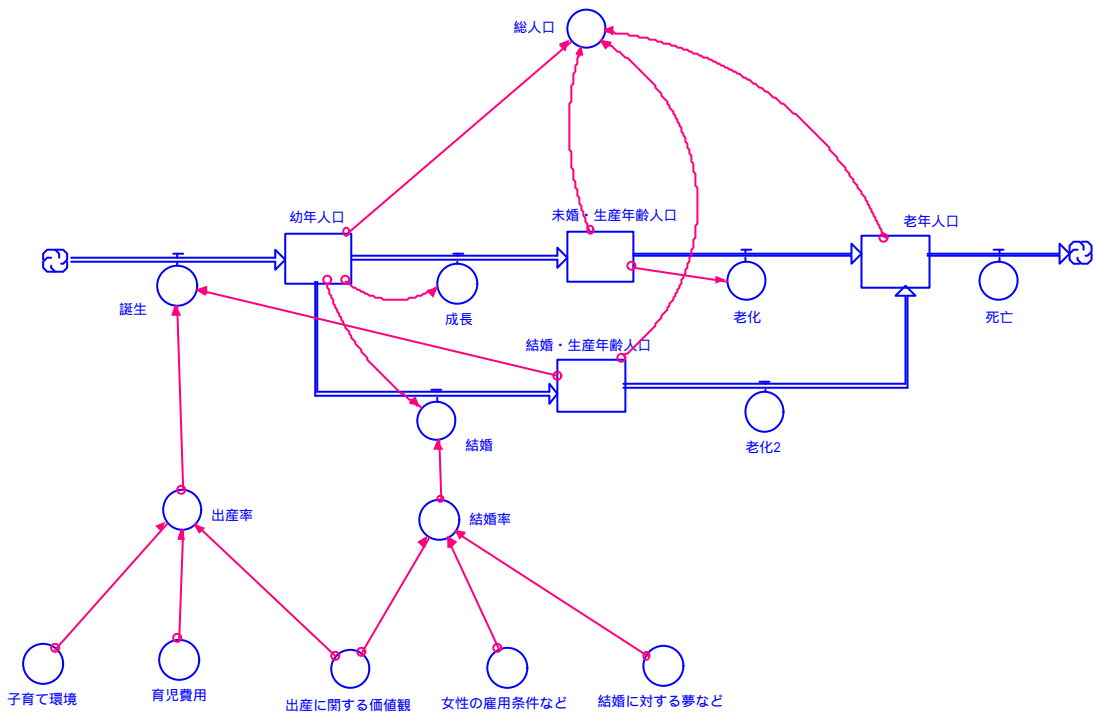


図2 社会経済環境モデル

C-6 「社会環境が結婚・出産・育児に及ぼす影響」に関する意見

C-6-1 「少子化社会における保健福祉行動の政策科学研究」

小野寺伸夫(聖徳大学教授)

まえがき

わが国の少子化社会の出現については、人口学的視点として 1970 年代前半の第二次ベビーブームの出生数 209 万人、合計特殊出生率 2.14 を頂点に次第に減少傾向を深めたことから十分予測されてきた。しかし、少子化社会の出現が社会的にも政策的にも重要な問題と意識されたのは合計特殊出生率が 2.0 を割り、さらに 1.5 台に落ち込んだ頃からでもあった。政策科学研究としては公衆衛生の重要な要素の一つである人口学的アプローチのみならず、公衆衛生発展基盤としての重要な行動科学および社会経済学についてのさらなる考究が求められた。

研究方法

少子化社会の現実を主眼に 人口学 行動科学 社会経済学について関係資料の分析を行なった。同時に、子育てグループ・ネットワークの意見内容及び子育てに関するアンケート調査レポートを考察した。

これらの考察を基本に政策科学の戦略的研究として考慮すべき、規範=人間、比較=能率、条件適合=組織の諸要因分析を行った。

研究結果

1. 人口学的要因

わが国の人口問題の推移は自然的条件のみならず社会的条件によって大きく変貌してきた。第二次世界大戦後における 1947-1949 年代に第一次ベビーブームが訪れた。【1949 年の出生数 2,696,638 人、出生率人口千対 33.0、合計特殊出生率 4.3、老齢人口(65 歳以上構成割合)4.9%】第二次ベビーブームは 1971-1974 年代に到来した。【1973 年の出生数 2,091,983 人、出生率人口千対 19.4、合計特殊出生率 2.14、老齢人口(65 歳以上構成割合)8%弱】第一次ベビーブームと第二次ベビーブームは構造的にかなりの違いがある。第二次ベビーブーム以降、少子化社会が現実の問題となってきた。とりわけ、1973

年に福祉元年の高福祉政策を掲げても、合計特殊出生率が 1975 年に 2 を割り、1.91 となった時点においても今日的话题とならなかった。1989 年に合計特殊出生率が 1.57 と 1.5 台に入った時点から次第に大きな問題となってきたことは否定できない。この時点で老年人口構成割合は 10%を越え、少子化と高齢化が複合し、新たな問題を提起した。

2. 行動科学的要因

少子化時代において、国家的政策や財政支援のみで少子化の解消となるかは甚だ疑問である。第二次ベビーブーム後、高度経済成長、さらに世界的なオイルショックの経験を通じ、国民生活は多様にして複雑な価値の選択が必要とされた。子育てについても、核家族化の進行、地域社会連帯力の減退、女性の進出、高学歴化社会、情報の先行・氾濫などめまぐるしい社会環境の変化の中で翻弄している。子育てに関するアンケート調査(平成 10 年度分担研究者高野陽)によると 子育てに伴う犠牲感について【男性に比べて、女性の方が、「仕事」や「自由」を犠牲にしている】 子育てをしてからの自分自身の変化について【女性は、男性に比べて、自分自身の変化をいろいろな面で感じている】 育ってきた環境: 中学卒業後の一人暮らし経験のある人は、経済的にも心理的にも自立している」 育ってきた家庭に対する満足感【多くの人は育ってきた家庭に満足、不満のある人は男性 19%、女性 24%】 将来、自分の育ってきた家庭のような家庭を築きたいと思うかについて【約 40%の人は、育ってきた家庭をモデルにしたくない】とある。

一見、常識的な回答と見るが、次の世代を育む行動科学として次の視点からの分析が織り込まれて良いであろう。

犠牲感と人生への感謝、
自己意識の変容内容と変容の端緒、
自立心と依存心、
満足の置き場所と満足感
生活モデルの場とあり方。

本来、子育ては、より自然で、より素直な感性で、より調和して、より家庭的で、より身近なモデルにて考え、教わり、行動し、未来への歩みを持つ。それらの意識内容からはかなりの隔たりがある。この点、家庭・隣組の枠組みをこだわらない組織機能と

して「子育てネットワーク」が誕生した必然性がある。これは、家父長制度、家制度、行政主体指導等の縦割り構造から、共通する世代、一人一人の出会い、行政や情報への選択的アプローチ等を可能にする横断的な構造への変容でもある。これらのネットワークは参加を通じ、具体的で実際的な子育てを可能にする安心感、信頼すべき情報、経験の生かし方、参加の促進等を次の世代へ継承する内容を有している。

この際、考慮すべき行動要件として参加の動機、各自の子育ての経験度、問題意識の差、家族の理解度、行動範囲と時間等について新たな行動科学的アプローチとして誰が、どの様な方法で、どのタイミングで行なうかが問われる。

本来、子育ては問題が深刻なほど個別的な条件に帰着することの多い傾向からも問われる点でもある。

子育てはエリートのみ行動要件ではなく、母子保健・家庭保健・地域保健の原点に立脚した行動とは、ごく常識的で、一般化した内容で、しかも、各自の家庭モデルに適合した方向をどの様に実現するかが問われるであろう。

3. 社会経済的要因

次の世代を担う人材の育成として、何時の時代であっても、どの地域であっても子育ての重要性は変わることはない。しかしながら、社会経済要因が子育て環境に極めて多様にして複雑な影響をもたらすことも現実である。

良好な社会経済環境においても問題は少なくないが、劣悪な社会経済環境にあればあるほど直接に深刻な影響を受けるのが子供たちであり、母親であることは否定できない。

さらに、社会経済要因は家庭生活の調和や心理的な問題にさまざまな影響を与えるとともに、結婚・出産・育児はもとより健康管理・保育・教育・労働など制度的な運営の諸条件からも影響する。

この際、社会経済要因で考慮すべき点として、少なくとも次の諸点をあげて良いであろう。

仮に景気回復がなされても、子育て環境への社会経済活動効果の還元が遅れると言う特徴があること。

子育てについてのインフラストラクチャーおよびサービス内容についてのミニマム・リクワイヤメントが明瞭でないこと。

子育てに関する経済的負担がどの家庭においても高い優先度を持っていると考えられていること。

子育てに必要な社会資本整備、税控除と児童手当支給等の政策判断に関する理念・目標・計画、管理方式、評価および研究投資が明確でないこと。

考察

少子化社会から脱して多子化社会に向かうことが、わが国の望ましい未来像を描くかどうかについては疑問である。

これらの疑問を解明することなく、少子化社会のもつ未来像の空しさを主張する傾向は本質にもとるものがある。

子育て環境を充実し、次代を担う人材としての価値を高めるサービスを確実にしても、少子化社会からの離脱が可能とは限らない。

子育ての基本概念は少子化社会であろうとなかろうと本来変わるものでないとするのが人間研究科学の本質である。

従って、少子化社会離脱の手段として、母子保健や子育ての社会政策が存在するものでないとする国民的合意形式が規範に位置づけられねばならないであろう。さらに、規範研究として、子育てに必要なとされる法制度の整備や母子保健計画の円滑な運営について一層の価値を高めて行くことは当然である。

健康政策として子育てが重要な位置を確保し、安定した期待すべき方向を持つ必要がある。そのためには生涯を貫く健康管理の原点として政策推進を図る計画路線、自由度の高い選択、費用便益等の能率研究が求められる。子育ては一部のエリートのためだけではなく、より庶民に根ざした方向に本質がある。

このことは、子育ての世界観としての判断、リスク群への積極的対応、社会経済に関する基盤形成等の比較研究を通じた共通項を持つ対応が求められる。

子育てをめぐる多様にして複雑な環境条件を的確に把握し、弾力的な対応が必要となる。今日、女性の進出が活発化する中で保育環境を充実するためには保育にかける子を預かる施設としての保育所ではなく、日常生活の継続維持をより可能とする栄養指導・教育活動・こころの健康づくり等を包括的に捉える視点が求められる。さらに、条件適合の観点からベビーセッターの資格要件、外国人子弟の保育等

新しい社会的要請に応える検討が必要とされる。

このため、子育てについて縦社会構造から、横社会構造への変革、さらに縦横が複雑に織り成す社会構造を考慮した組織科学としての研究が求められるであろう。

その際、大規模な組織のみならず、相互支援を可能とする子育てネットワークなど弾力的でソフトな組織の呼びかけに素直に反応する方向に期待すべき内容が見いだされるであろう。

少子化社会は高齢社会の現実において、相乗的な問題を提起している。子育てについてのもろもろの条件整備や機能の充実が少子化社会の脱却でないと指摘した。

しかし、政策科学の路線として基本となる要因についての解明を図る積極姿勢が期待すべき健康未来社会の創造につながることは確かであろう。

子育てについての政策科学研究は今後一層重要性を帯びる中で、少子化問題の対応は公衆衛生学の基本路線を踏まえながら、ソフトな発想を弾力的に取り入れ社会経済関係、人材確保育成等を包括する研究の進展が期待されて良いであろう。

参考文献

1. 小野寺伸夫;健康づくりへの政策一健政策発展の理論と発展、メヂカルフレンド社、1987
2. 高野陽;子育てに関するアンケート調査レポート、子ども家庭総合研究所、1998
3. 上尾市コミュニティーセンター;子育てシンポジウム報告書、1999
4. 育児ネットワーク;子育て応援新聞、育児ネットBOX、1999
5. 彩の国さいたま子育てネットワーク、創刊準備号、1999

C-6-2 認可外保育施設における保育の質の充実について

千葉 良(仙台赤十字病院小児科部長)

要約

行政の指導を受けない組織たる認可外保育施設に、国の施策をどのようにして周知徹底させるか、またこれらの施設の小児保健的問題をどのようにして解決するか検討した。検討事項は、1. すすく子育て研究会について、2. 認可外保育施設職員に対する聴取について、である。

研究目的

平成10年度報告(未既婚者別自由記載の内容から得られた少子化社会のあり方 - 小児保健学の立場から-)は、施策の実施について、1) 施策の周知徹底、2) 施策の多様な方式、3) 国の立場、4) 親の立場および5) 子どもの立場から検討した。

少子化対策推進基本方針について(平成11年12月17日、少子化対策推進関係閣僚会議)や新エンゼルプランについて(平成11年12月19日)が決定したが、行政(県、市、町村)の管轄外の組織、指導を受けない組織たる認可外保育施設には周知徹底されないと思われる。

認可外保育施設に、国の施策をどのようにして周知徹底するか、またこれらの施設の小児保健的問題をどのようにして解決するかを、会を組織して実践してみたので、それを踏まえて検討した。

研究方法

宮城県内の認可外保育施設、育児サークルおよび子どもの病気を守る会に呼びかけて、すすく子育て研究会を結成した。

目的は、各施設・グループに対して主に国の施策を伝える研修会を行なう、また各施設・グループの問題(困りごとなど)に対する支援方法の確立である。

結成する方法、運営方法、研修会のあり方と各施設・グループからの問題(困りごとなど)に対応するネット形成に関して検討した。

結果

1. すすく子育て研究会について

- 1) すすく子育て研究会の結成について
(1) 準備委員会の開催

平成 11 年春、小児保健を実践してきたグループに呼びかけて、小児科医、歯科医、福祉関係者、デパートなどの育児相談担当者および電話相談担当者の参加を得て、専門委員グループを作った。

同時に、認可外保育施設責任者や育児サークルの代表者に呼びかけて、保育関係者グループを作った。

専門委員グループと保育関係者グループで、準備会を、平成 11 年 7 月 10 日(土)に開催した。

a)会を発足させる趣意、b)会の名称について、c)対象とする会員について・d)会の活動について、e)事務局など、を協議した。

a)会を発足させる趣意について

今日の子育てのキーワードは、核家族化、孤立化、少子化、子育てに不慣れな親達および就労婦人の増加である。

育児不安まで行かなくとも、どうしたらいいのか、これでいいのかと戸惑う親達も多く見られる。

ア)核家族化に対して、昔の祖父母の役割を果たすような支援

イ)孤立化に対して、昔の井戸端会議的役割を果たすような支援

ウ)少子化や育児に不慣れな親に対する支援

エ)就労婦人に対する支援

これらの支援が親と子に必要である。また、障害や慢性の病気を持つ子や親もいろいろな悩みを抱えており、それらに対する支援も必要である。

一方、保育施設(保育所・保育ママ)や育児サークルに、相談する専門家(小児科医、歯科医、栄養士や育児相談員など)がないところがあるのも現状である。

このような親子、施設やグループと専門家が連携して、子育てをお手伝いし、より良い子育てを目指すのがこの会の目的である。

この会は政治的活動はしません。独特の哲学や宗教的考えなどは取り入れませんし、経済的支援もできません。

ただ、現在も行なわれている子育てをより良くするため、各人が出来る範囲でという限界があるにしても、母(親)と子に手を差しのべたいという主旨で活動していく会である。

b)会の名称について

子育てはつらいことや苦しいこともあるけれど、

それを乗り越えて、ニコニコして育児をする、楽しい育児をするのをお手伝いするという意味を込めて、すすく子育て研究会 - ニコニコ育児、楽しい育児をお手伝いする会 - とした。

c)対象とする会員について

主に対象とするのは、認可外保育施設の園長および幹部職員、育児サークルや病気の子どもを守る会の代表者や責任者とするが、誰でも希望する方は入会できる。

d)会の活動について

いろんなアンケート調査や子育てに関する会でよく言われることは、国はさっぱりやってくれない。ところが、厚生省の方は施策としてやっていると言う。これは国の施策・事業が末端(親と子)まで届かないことを示している。

国も施策や事業を行っていることを、本年度から小冊子「それでいいよ、だいじょうぶ」(厚生省)などで、周知徹底させようと試みている。

この会の活動として、国(県、市、町村も含めて)の施策・事業を周知徹底させることを一つの柱にしたい。もう一つは、施設やグループから相談ごとを受けて子育てをお手伝いすることを大きな柱としたい。

ア)研修会の実施

a. 国の施策・事業を周知徹底する研修会

例えば、母子健康手帳の改正や感染症新法などに関する研修会

b. 保育施設、育児サークルや病気の子どもを守る会で、子育てに必要なことの研修会

イ)相談ごとに対する支援

a. 親の相談ごとに対して

電話相談や親に対する講演会など、いろいろなところで行われているので、それらを利用していただく。

当会の専門委員の担当する相談は、

(ア)電話相談は、赤ちゃんほっとダイヤル(母子愛育会宮城県支部)、

TEL.022-275-6672、

受付時間;火曜日と木曜日の午前10時から午後4時まで、

(イ)育児相談室(母子衛生研究会)は、場所;藤崎デパート内、ベビールーム、

曜日と時間;金曜日午前 11 時から午後 4 時まで、
日曜日午後 12 時 30 分から午後 4 時まで、
(ウ)インターネットの子育て支援のムページは、「初
めての赤ちゃん、子育てはこれでいいのかな」であ
る。

<http://www02.so-net.ne.jp/~childcar/index.html>、

b. 保育施設、育児サークルや病気の子どもを守る会
からの相談ごとに対して

この分野に主力を注ぎたい。園医、栄養士などが
いないことが多いので、専門家(小児科医、歯科医、
栄養士、育児相談員、福祉の専門家など)に相談する。

保育施設、育児サークルや病気の子どもを守る会
から、FAX、や郵便で事務局に連絡する。事務局から
各専門家に依頼し、回答などを事務局を経由して返
事する。

なお、専門機関(医療機関、市町村母子保健担当
課、保健所や児童相談所など)にも紹介する。

e) 会の事務局

事務局は、仙台赤十字病院小児科内におき、代表
者は千葉良にする。

〒982-8501

仙台市太白区八木山本町 2 丁目 43-3

仙台赤十字病院小児科内

すくすく子育て研究会 - ニコニコ育児、楽しい育児
をお手伝いする会 - 千葉良

TEL.022-243-1111(代表)

FAX.022_243-1102

(2) 認可外保育施設と育児サークルへの案内につ いて

宮城県小児保健協会と共に活動してきた宮城県
と仙台市関係の方々に、情報を公開できる範囲で、
認可外保育施設と育児サークルの名称と住所などを
教えていただいた。

それに基づき案内状を発送した。経費節約のため、
返信用の葉書は使用せず参加希望者は FAX、で返事
をいただくことにした。

2) 研修会について

第 1 回研修会は、平成 11 年 9 月 18 日(土)に開催
し、演題は「母子健康手帳の改正をめぐって」で、
日光浴と日焼け、子育て支援小冊子「それでいいよ
だいじょうぶ」(厚生省)と「家庭教育手帳」(文部省)
の解説に力を入れた。

第 2 回研修会は、平成 12 年 1 月 8 日(土)に開催
し、演題は「保育所・育児サークルにおける感染症
対策」である。乳幼児では児童生徒と違い、手洗い
やうがい十分に励行できない、また感染症回復直
後の乳児では、哺乳、抱っこ、おむつ交換や下着を
取り替える前後の保育士自身の十分な手洗いとガウ
ン(エプロンなど)の取り替えを励行することの重要
性を強調した。

会員は、認可外保育所 34 施設、認可保育所(個人
参加)6 施設、育児サークル 6 グループ、その他 3 グ
ループで、計 49 施設・グループである。

3) 問題点と反省

本会の結成は、宮城県小児保健協会の熱意あるグ
ループが、母子保健マニュアル(厚生省)の「福祉・
教育等との連携」の実践として、保健の側から取り
組んだ例である。

保健側に熱意あるグループが全ての県に存在す
るとは限らないので、福祉の側から取り組む場合も
あるであろう。また、行政(県、市、町村)が主導し
てこのような組織を作ってもよい。

この組織の形態として、経済的・資金的なことを
考えるならば、行政から委託された団体または NPO
(民間非営利組織)が経営的にも安定してよいと考
えられる。

われわれのすくすく子育て研究会は、NPO へと発
展させることが経営的にも安定してよいと考えてい
る。

認可外保育施設や育児グループの名称・住所は情
報を持っている行政としても、情報を開示しにくい
という難点がある。この点、行政が参加できる方式、
行政主導方式または NPO 方式がよいかもしれないが、
予算などから行政主導方式は困難ではなからうか。

自然発生的なわれわれのような方式は、熱意ある
グループがいれば、手軽に組織を作れるが経済的
には大変である。

認可外保育施設の責任者や育児サークルの代表
者は現状維持で満足している場合も多く、保育の質
の向上を目指すのに消極的な場合が多い。このよ
うな責任者や代表者の意識を変えるにはどうすれば
よいのかも悩みの種である。

行政やマスコミが、このようなよい組織(会)があ
ると紹介することも、責任者や代表者の意識を高め

るのによいかもかもしれない。

2. 認可外保育施設職員からの聴取について

入所待機児童対策は現在の問題であり、すみやかに入所待機児童は解消されなければならない。

新エンゼルプランで、認可保育所のみを対象として、保育サービス等子育て支援サービスの充実を行っても、入所待機児童問題は改善はされるが解消されないであろう。

応急策としてあげている家庭的保育は、認可外保育施設、特に市町村により指定された認可外保育施設に頼らざるを得ない。

これらの保育施設は、長年、地域に根付いた保育活動、家庭的保育を実践しているので、助成して、保育の質を向上させて、待機児童問題を解消するののも一つの方法と思われる。

今回は、すすく子育て研究会の研修会で、認可外保育施設職員に対して、実情や要望などを聴取したが、それらをまとめて検討した。

まず経営が苦しく、保育士などの勤務条件もよくないので、経済的助成を求める声が圧倒的に多かったことは言うまでもない。

それでは、無条件にどの認可外保育施設にも平等に助成して、果たして質の良い保育が行なわれるであろうか。

認可外保育施設によって、現状維持で満足している施設もあるし、すすく研究会会員の施設のように質の向上を目指す施設もある。質の向上を目指すにしても、努力目標では十分に質の向上は望めない。やはり、各保育施設における保育の質の評価が必要になる。

1) 保育の質の評価について

(1) 設備・環境について

例えば、乳児保育の場合は、園庭の条件が十分でなくとも、室内のベッドやはいはいなどの場所が基準に達していれば可とする。一方、幼児の場合は、自前の園庭の条件が十分でなくとも、近所の公園や児童館を活用すれば十分と評価できる場合もある。

(2) 保育内容について

設備・環境といったハードな面の評価より、保育内容というソフトな面の評価は難しい。例えば、数名の乳児を一人の熟練した経験のある保育士で保育するならば、かなり満足する保育が行われるだろう。

このように、個々の保育状態に合わせて、適切か否かを評価していけば、保育の質の充実が期待できる。

2) 職員の勤務状態について

例えば、保育士が拙劣な勤務状態であれば、質の充実した保育は望めないのは当然である。認可外保育施設職員にも、仕事と育児の両立できる環境が必要であることを訴えたい。

最後に、地域に根付いて、長年、積極的に保育活動を実践してきた、また保育の質の向上を目指している認可外保育施設を適切に評価して、助成していく施策を、認可外保育施設職員は待ち望んでいることをつけ加えたい。

C-6-3 子育て支援のあり方について

大日向雅美(恵泉女学園大学教授)

(1) 子育てに悩む母親の急増

近年は少子化に加えて、子育てに困難を訴える親が急増している。養育放棄や虐待など母親による深刻な犯罪や事件の報道も後を絶たない。こうした現象は、従来の性別役割分業体制と、それを理論的に支えてきた「育児は母親に生来的な適性がある」とする母性観の歪みからもたらされたものである。換言すれば、子育てに悩み、困難を覚える母親の存在はいつの世も認められるのであり、育児の適性は必ずしも女性であれば誰にも備わった生来的な特性ではないことを示している。こうした視点に立つと、それぞれの時代の要請に即した形で人々の生活実態に合致した子育てのあり方を見いだしていく必要があるといえよう。

(2) 子育て困難の背景と子育て支援のあり方

母親が子育てをつらく思う理由は、母親が置かれている生活状況等によって多様であり、子育て支援はその実態を正確に把握することが大切である。

1) 専業主婦が直面している子育て困難

子育ての困難は、母親が専業主婦か就労女性かによって状況が異なるが、概して専業主婦に困難の程度が強いといえよう。

乳幼児の育児にあたっている専業主婦の悩みは、

第1に育児負担が大きいことである。一日中乳幼児の世話を追われて、一人の時間もままならない状況のつらさは、専業主婦の母親が共通に訴えるものである。第2は、こうした母親のつらさが周囲からなかなか理解されにくいことである。人々は依然として「母親は育児が楽しいはず」「母親が育児をするのは当然」とする母性観を信奉していて、最も身近な夫も妻のつらさを理解しようとはしない。第3は、社会からの閉塞感である。「育児に携わっている間に、世の中から置き去りにされるようでさみしい」「育児が一段落した後の生活のビジョンが立たない」「仕事をしたくても、復帰が難しそうで、仕事をやめたことを後悔している」等々の声が多い。第4は、近隣や幼稚園での母親同士の間関係の悩みである。夫や社会からの疎外感に悩む専業主婦の母親たちは、ストレスの発散や理解者を母親仲間に見つけようとする。しかし、社会との接点をもたず、育児にだけ専念する母親たちの集団は、同質性の高い閉鎖的な集団と化し、子どものけんかやささいな成長発達の差異にとらわれて、息苦しい人間関係に陥る危険性が高い。昨年末の文京区幼児殺害事件は母親どうしの人間関係の悩みを端的にあらわした事件として注目されている。

2) 働く母親が直面している子育て困難

一方、働く母親には、上記のような社会からの閉塞感はないが、「仕事と育児の両立」の難しさに直面している実態は従来から変わっていない。具体的には産休明け、育児休業明けの保育所入所の難しさ、保育時間と就労時間との不一致、子どもの病気時の保育などに大半の母親が悩んでいる。また、働く母親は地域から孤立しがちであり、近隣の支援が得にくいのが実状である。日中は職場で過ごし、地域の活動に参加できないという生活時間上の問題に加えて、乳幼児をもつ母親が働くことに対する周囲の理解が得にくい。「小さいとき、特に三歳までは家庭で母親が育てるべきだ」「子どもがかわいそう」という周囲の声や、何か子どもに問題が起きたときに、その原因が母親の就労にあるかのようにみなす風潮が依然として社会に根強く、これも働く母親を悩ませている。

3) これからの子育て支援に必要な視点

上記の状況から考えて、子育て支援には2段階の

対策が必要と考える。第1は、一時的でも母親を育児負担から解放することが必要であり、子育ての苦楽を共有できる仲間作りへの支援が欠かせない。その一例として、すでに各方面で実施され始めている「一時保育」付の各種行事がある。これは育児負担や孤立感の大きい専業主婦に対して、気分転換をはかる一人の時間を提供し、同時に講座や行事を通して、社会との接点をもつ機会を提供することができる。また、専業主婦の孤立感、閉塞感を解消する目的で活動がなされている「子育てグループ、子育てネットワーク」の育成支援の充実も、いっそう求められている。

しかし、そうした子育て支援は、やがて母親たちの社会参加を支援する第2段階に結びつけていく必要があることを指摘したい。現状の母親たちが示す子育て困難は、「子どもを産むと同時に母親役割に専従しなければならない状況」に真の原因が求められると考える。子どものしつけや、母親どうしの人間関係に翻弄されている母親の状況は、一見するといかにも未成熟とも思われる。しかし、自己が直面している問題を冷静に見つめるには、広い人間関係に支えられた経験の積み重ねが不可欠であろう。一時保育付講座の内容がつねに子育て関係の話題に限られ、子育てグループもまた子連れの母親だけの集団である以上、母親たちに大人としての社会性を育む機会は乏しいといわざるを得ない。

子育て中の母親も仕事や地域活動など広く社会に関われるような支援が今後の課題である。そのため保育制度の整備はいうまでもないが、子育て中も求職活動や社会復帰の準備の時間をもてるよう、「ファミリー・サポートシステム」等、一時保育体制の充実も緊要課題である。また行政が一時保育者養成講座修了生たちの組織化を支援し、子育てグループが地域の一時保育提供者という形で社会活動に貢献している好例もある(例:松戸市「ぼとさの会」詳細は大日向雅美『子育てと出会うとき』NHK ブックス 1999年参照)。子育てグループや子育てネットワークの活動も、つねに子連れで行動することを余儀なくされることのないよう、相互に保育を提供し、社会参加を支援しあう活動拠点に育っていく必要があると考える。そのためにも、子育てグループに子育て終了世代や子育てサポーターが適宜参加し、ア

ドヴァイザー的機能を発揮するのの一つの方法であろう。

一方、働く母親に対する支援としては、多様な就労形態に応じた保育体制の整備が求められており、長時間保育や夜間保育、休日保育等が進められている。確かに深夜や休日勤務で働く親のニーズも看過できないものがあり、現状に対する対症療法的な支援としては一定の評価ができよう。しかし、育児期にあっては育児や家庭生活にもゆとりのある環境が必要である。こうした観点から考えると、育児期の親の就労のあり方に関しては子どもの成長発達や親子関係の育成を十分に考慮したビジョンも忘れてはならない。

なお、母親のストレスの背景をなしている母性愛神話の解明も急務である。特に「三歳児神話」による束縛など、母親の就労を問題視する世論に対しては、その真偽を実証的に検討する調査研究も急ぐ必要がある。親にとっての「仕事と育児」の両立が子どもの成長発達にとっても望ましい結果をもたらすような条件を明らかにする実証的な研究が蓄積されはじめ、「三歳児神話」などの従来の母性観に翻弄されることのない子育てが可能となると考える。

C-6-4 個別対応を必要とされる育児支援のあり方 山岡テイ(情報教育研究所代表)

現代の情報化社会で育児生活を送る母親達は、さまざまな育児情報源からの影響を受けている。同居家族を核にして、母親が準拠する職場やサークル、近所や子育て仲間などのコミュニティ集団があり、それらをマスメディアや個別の専門家達が、社会的な情報源として、幾重にも取り囲んでいる。

母親達が信頼する育児情報源は、求める育児情報の内容によっても異なるが、基本的には、「夫、近所の友人、実家の母、園の先生」などが上位を占めており、個々の母親達がそれぞれの判断理由や置かれた状況の中で独自の情報支援ネットワークを形成している。

近所の友人を最も信頼すると判断する理由(とても重要である)としては、「同じ年ごろの子どもがいてわかりあえる」や「身近かで相談しやすいこと」が上位にあげられていた(山岡ら,1998、1999、山岡

2000)。

また、乳幼児をもつ母親達自身が子育てサークルを通して行ったアンケート調査の結果では、同じ年ごろの子どもがいる子育て仲間達とのグループ(サークル)活動を行っている母親が62.0%で、さらに、「グループ活動が、子育ての役に立っている」と回答した母親達は96.9%と高い支持率を得ていた。それら子育て仲間と出会った場所としては、「近所」61.3%が最も多く、ついで、「公園」47.4%と、いずれも地域での友人コミュニティを積極的に活用している母親達のハイライト部分をこの調査では映し出していた(彩の国さいたま子育てネットワーク、「3801人の子育て「実感」アンケート」1999)。

このように、育児期の母親達は、近所の子育て仲間やコミュニティなど準拠集団への帰属意識が高い一方では、それら近所の友人達が育児不安を増幅させる悩みの原因にもなっている側面があることも否めないのが現状である。

母親達が活用している育児情報源の中で、最も信頼性の高い情報源を単一選択した結果の第2位にあげられていた「近所の友人」が、同じく、最も不安になった情報源の第1位にあげられていたことから、その二面性が表れていた(山岡2000)。

母親達が「近所の友人」や「子育て仲間」を定義するときに、複数の友人を想定していることを考慮しても、地域の友人から不安を得ていると感じる母親が最も多いという結果には変わりがない。さらに、近所の友人高不安群は、その他の群に比べると、育児を助け合える子育て仲間がいるとは意識してはいないものの、その反面、母親の特性としては、社交外向性が低く、夫のサポートを必要としている傾向があることが明らかになった。

また、実家の母から高不安感を得ている母親は、最新育児情報で理論構築するためか、育児書や教育書などに最も高い信頼性を置いていることが有意に多いという結果であった。

一人ひとりの母親達の個人特性や社会的状況などによっても、その必要とする人的サポートや信頼する情報源が異なっているという実情を踏まえて、今後はさらに個別対応をきめ細やかに考慮した支援のあり方が問われていると思われる。

そこで、今後の母親達に必要なと思われる育児支援

ニーズを具体的に提示した。

(1) 先生や母親が実践的カウセリングを生かした子育てを

園の先生は、働く母親達や、また、母子や父子だけのひとり親家庭にとっても、実家の母について重要な育児情報源であることが調査結果は示していた(山岡 2000)。保健所や児童相談所での専門的な支援だけではなくて、日常的に親に接する機会が多い園の先生が、カウンセリングの理論や具体的な技法を学べる研修会の機会を増やし、さらに、母親を対象にしたより実践的な出張講習会を身近かな施設で定期的に行うことが必要である。

(2) 育児情報の質や内容の具体的な検討を学際的に行う

利便性を追求した育児用品の普及、育児文化の伝承の希薄化と母親達の高学歴化に伴い、育児における「専門家志向」は今後も高まることが予測される。

そのような状況を反映してか、高不安育児情報の上位には、マスメディアと並び、保健医療に携わる保健所の保健婦や栄養士があげられていた。また、育児書や育児雑誌を実家の母と対比して育児の価値基準にしている母親が多いことも明らかになった(山岡 2000)。

育児情報の送り手としての、育児情報の質に関する研究報告は過去にもいくつか行われているが、さらに、具体的な事例において解釈が異なる医学知識や育児知識を学際的に検討して、混乱を招きやすい育児知識に関する統一見解や専門家が用いる指針を作成することが望まれる。

(3) 育児に関する地域情報や子育て支援サービスが住民に届く工夫を

新しく転居してきた地域での育児情報をどのように収集するかは、親の関心事である。そのために、児童館、子どもの習い事や教室、生協など地域ネットワークの要になる集団や組織が活用されている一面もある。

また、行政の支援サービスの詳細や印刷物などの情報がほんとうに必要な親子には届いていない現状も多く見受けられる。行政の窓口を一本化することは、組織上の問題から難しいことと思われるが、親子が活動するさまざまな場を想定した上で、地域での公的・私的な両方の育児情報が母親達の手元に行

き渡るシステム上での試みが必要と思われる。

(4) 妊娠・出産・育児の情報教育で親準備性を高める

現在、学校教育の中で、情報教育が盛んであるが、それは、主として情報機器をいかに使うかに力点が置かれており、生活者としての科学的な情報教育や実践的な生命教育や妊娠・出産・育児に関する教育は、極めて限られた一部の学校でしか行われていない。

母親の育児不安と妊娠以前の育児に関する知識や体験の有無との相関性は多くの調査結果からも検証されている。晩婚・晩産化傾向にある昨今では、中学や高校の場から、つきは妊娠後の母親教室までの空白の時期が長くなる。しかしながら、育児や母子保健に関する教育や啓蒙の機会を設けて、親準備性を高めることと同時に、育児情報の収集や情報行動に関する科学的な目を養う生活者としての情報教育が今求められている。

参考文献

- 1)山岡テイ他「子育て生活基本調査報告書」ベネッセ教育研究所 1998.
- 2)山岡テイ他「子育て生活基本調査報告書」ベネッセ教育研究所 1999.
- 3)彩の国さいたま子育てネットワーク「3801人の子育て「実感」アンケート」1999.
- 4)山岡テイ「育児不安と育児情報に関する子育て調査」情報教育研究所 2000.

C-6-5 少子化をもたらしている心理的原因を明らかにする調査研究の必要性

神宮英夫(明星大学人文学部教授)

1 調査の問題点

理想の子ども数と現実の子ども数との間に、平均で1名弱のギャップがあり、このことから、子どもを持ちたいのに持てない原因があると考えて、さまざまな調査・研究が行なわれてきた。

これらの調査では、例えば、子育てに対するコストなどの経済的問題が指摘され、手当での増額が議論されてきた。また、労働環境の問題では育児休業制度が議論され、学校教育への不安ではゆとりの教育が議論されてきた。このように、物理的・社会的原因を考えて、これらを調査項目として、被調査者に調査を行い、その選択結果から、原因を特定して、それに応じた対策が論じられてきた。つまり、物理的・社会的原因を明らかにして、これらに対する対策が対処療法的にとられてきたのが現状である。

このような政策の有り様では、総花的となりコストがかかりすぎることになる。少子化対策として、システム的な政策にはなりえていない。少子化を食い止めるための国としての断固とした決意や意図が反映されない政策となってしまう。

また、従前のやり方では、果たして本当の原因を明らかにできるのだろうか。例えば、子どもを持ちたいのに持てない原因として列挙された調査項目の中で、ある被調査者が子育てに対するコストを選んだとする。この場合、実はさまざまなことを考えてみなければならない。本当にコストがかかり、経済的に苦しいので子どもが持てないということは、当然考えられる。一方、他にもっと深刻な原因があったり、あるいは被調査者自身も気がついていない原因のある可能性がある。にもかかわらず結果として、答えやすいあるいは選択しやすい項目として例えばコストを選んだと考えることができる。

調査から得られた結果が、真に少子化の原因となっているとは必ずしもいえない。選ばれた項目は、選択したという被調査者の意識的行動の結果ではあっても、その調査項目に直接即しているものだと即断することは危険である。市場調査や視聴率調査の

ように、具体的行動に見合った選択項目であれば、目的に即した結果であるといえる。しかし、個人的なところの問題にかかわる場合には、直接的な議論は難しい。

2 自己決定権について

子どもを持つか持たないかは、個人的な問題であり、各々の自己決定権にかかわっている。子どもを持たないという決定をした人には、さまざまな理由がある。その一側面として、物理的・社会的原因を通常は考えてきた。しかし、これらの原因よりも、より大きな側面としてところの問題、つまり心理的原因が存在していることは否定できない。しかし、現状では、どのような心理的原因が、少子化の問題で考えられるのか、あるいは考えるべきなのかについては、まだまだ研究が不足しており、明確にはなっていない。

ところの問題に基づいた少子化をもたらしている自己決定のプロセスを、今後明らかにして行く必要がある。このためには、いくつかの視点を心理学としては考えることができる。例えば、親になるという人が、自分の親との間で、その関係をどのように構築して行くことになるのかを、このことは決めており、子どもを持つか持たないかをも決める要因となっている。また、自分のこれからの人生をどのように歩んで行きたいのかというライフ・プランを、どれだけ明確に意識できているかということも問題となる。コライフ・プランのイベントの一つとして、子どもを持つか持たないかということが存在している。

これら以外にもさまざまな視点を考えることができ、その視点に見合った心理学的研究を行なう必要がある。この研究成果から、手当を増額するよりも、予算のかからない別の施策の方が、より効果的であるということがありうるであろう。例えば、具体的には、「家庭科」の教育内容に「家族」があるが、このような研究成果を反映した内容で、十分な時間数をとって実践的な教育を行なうということなどが考えられるであろう。

この種の研究成果から考えられる施策は、必ずしも予算の裏付けを必要とはしない可能性がある。そして、対処療法的ではなく、根本的な施策になりう

る可能性がある。しかし、見た目上は、遠回りで即効性がないように考えられるが、対処療法的な施策よりも効果的な場合があるのではないだろうか。

C-6-6 少子化と児童の福祉

大嶋恭二(東洋英和女学院大学助教授)

自分の住んでいる国とは異なる国の人々の生活、社会福祉、児童福祉の実態に接することにより、児童を含む人間が、一人の人間として豊かに生きるといこととはなにか?それぞれの社会が一人の人間が育ち、生活することをどう捉えているかを考えるきっかけとなる。例えば、スウェーデンは胎内から墓場まで安心して生きれる社会を構築しようと常にその目標に向かって努力している。児童を育てる場合でも日本は家族中心、スウェーデンは家族とともに社会も同等あるいはそれ以上の責任を負っている。私が1994年以降訪れたスウェーデン、カナダ、英国は、日本と比べて、豊かさゆとりをより実感できる国々であったように思われる。我が国の戦後の高度経済成長は、親の世代よりも子どもの世代の方がより豊かになれるという将来の希望が、活力ある社会を生み出す原動力であった。そこでは、「もっと働き、もっと勉強をし、もっと貯金をし...」さもないと落ちこぼれる、年をとってから困る、あるいはそうすればいずれは豊かになる、楽になる等などであった。しかしそのことは一方では、当のイ画人の人生にとって、その時々豊かさを、あるいはゆとりを実感できたかという首を傾げざるを得ないというのが実態で、年をとり、さあこれからと思ったときにはすでに遅く、買えない、使えない、いわゆる豊かさを、あるいはゆとりを実感できないというのが我が国の戦後半世紀であったように思われる。

現代の子どもにとって優しい社会とはどのような社会なのか?逆に子どもにとって厳しい、つらい社会とは?北欧のある街(ストックホルム)では、市内のすべての駅にエレベーターあるいはエスカレーターがついていて、老人、障害者、赤ん坊連れの母親等誰でも利用でき、目的地に行くことができる。北欧に関する研究者が車椅子でどこまで行けるか、参加できるかが福祉の水準の一つの目安となると指摘しているが、まさに社会の構成員すべての者が普

通の生活ができるよう配慮されている。建物、道路、駅等すべてのものが、障害者、老人、子どもにとって優しい街となっている

1989年の国連総会で採択され、1994年我が国の国会でも批准された「児童の権利に関する条約」の第2条は、いかなる差別もあってはならないことをうたっている。親の地位、立場、収入によって子どもの受ける教育に差があることは不公平、不平等ではないのか。ひとり親家庭の子ともや、子どもの多い家庭が経済的に苦しくなり、教育を受けさせることに制限を余儀なくされる時、そのことが当の子どもにとって仕方がないといってすまされることなのか。社会の構成員、特に成長発達の途上にある子どもたちにとって、教育を受けたいものがその子の能力、興味、関心にそって教育を受けることができるような環境を整備しなければならない。我が国の根強い学歴偏重の風潮は、受験のために過度の競争を生み、子どもにも親にもゆとりを失わせるとともに、親の経済的負担を増加させ、結果的に少産良育、すなわち少なく生んで、大事に育て高学歴を身につけさせようとすることに帰結している。100%に近い義務教育の就学率のなかで、学校で教育を受けることを拒否する児童の生まれてくる実態などをみると、現在の日本が児童の成長にとって望ましい環境を整えているのか、今一度問い直す時期に来ていると思われる。

ところで、少子化の要因は若い世帯の未婚率の上昇にあるといわれている。結婚しない人が増えるのは、現在の日本には、若い男女が親から自立して働きながら新たな家庭を築き、子どもを育てていくという責任ある喜びや楽しさを経験することを困難にするような社会経済的・心理的要因があるといわれている。このことは、平成9年度~平成11年度厚生科学研究『少子化に関する専門研究』(日本子ども家庭総合研究所)の分担研究「社会環境が結婚・出産・育児に及ぼす影響に関する研究」(分担研究者高野陽)による非婚・晩婚や少子化の傾向に対する調査の自由記述でもみることができる。そこでは、現在の我が国の状況が、経済優先、学歴・競争社会と過熱化した受験競争及びそのことの必然としての落ちこぼれや非行等の問題、かつてと比べて良くなりつつあるとはいえ、女性の社会進出に対する従来からの

消極的な考え方、すなわち日本における固定的な雇用慣行は、男女の固定的な性別役割分業を前提としており、職場優先の企業風土の中では、女性にとって就労の継続と出産育児の両立を困難なものとしていること、またいったん仕事を辞めた後の再就職の困難さと労働条件の劣悪化は、退職することが生活の上で大きなリスクを伴うものとなってくることなど、それらのことが将来への不安を招来するとともに、更に、経済的な支援の面でも、住宅の面でも、保育サービスの面でも子どもを産みたい人が安心して産み、かつ育てられるような環境が整備されていないところに今日の少子化の原因があることを指摘している。

子どもを産みたい人が安心して産み、かつ育てられる社会の構築と、すべての子どもが平等に、普通の生活をするのが当然のこととする国民の意識の醸成が今後の最大の課題である。前者に関しては、平成10年7月の「少子化への対応を考える有識者会議」の「夢ある家庭づくりや子育てができる社会を築くために」の提言等がある。後者についていえば、すべての子どもが平等に、普通の生活をするのが当然のこととする意識の変革をもたらす重要な要素は教育、特に次世代への教育の中にあると思われる。如何にしてこの児童観、人間観、育てるか。保育所、幼稚園における障害児との統合保育は、それぞれが様々な個性をもった存在として互いに他者を認め合う機会となっている。大事なことは幼い時期のそのような感覚、意識が小中高校、さらにはその上の段階までも続いていくことである。社会福祉の原点はお互いの存在を認め合い、尊重しあい、助け合うところにある。そしてこのような自己と他者との関係の捉えかたは、社会の構成員一人一人がその幼児期からの自然な関係をとおして学習し、体得していくものであり、そのことが長じてからの人間観、児童観といったものになってくる。

競争社会、学歴偏重社会という環境のなかにおかれている現在の我が国の児童の状況を見るとき、自然を愛し、他人を思いやり、自信をもって主体的に生きるというような気持ちを如何にして育てていくかは重い、しかし、克服しなければならない最大の課題である。

C-6-6 ヘルスプロモーションの視点からの提案

島内憲夫(順天堂大学スポーツ健康科学部助教授)

1. ヘルスプロモーションの視点

少子高齢化社会の中で、次世代を担う若者が幸せな結婚・出産・育児を迎えることができるような社会システムを構築するために必要なアイデアをヘルスプロモーションの視点から提案したい。

ヘルスプロモーションとは、人々が自らの健康をコントロールし、改善することができるようにするプロセスである。身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態に到達するためには、個人や集団が望みを確認し、実現し、ニーズを満たし、環境を改善し、環境に対処する(cope)ことができなければならない。それゆえ、健康は、生きる目的ではなく、毎日の生活の資源である。(WHO:ヘルスプロモーションに関するオタワ憲章、1986)

また、ヘルスプロモーションの主眼は、病気のリスクファクターを探すのではなく、健康を創るハッピーファクターを探すことにある。

本研究では、このハッピーファクターを探す視点から、結婚・出産・育児を支える要因を探ってみたい。

例えば、つきのようなことが考えられる。

- *結婚・出産・育児を若者が期待し楽しめるような支援型の社会(家庭・職場・学校・地域)づくり
- *祖父母と同居していない核家族の母親が近所のおばさんの所で楽しく語らっている
- *子育て真っ最中の共働きの夫婦が、コンサートや映画やレストランに行くことができる
- *障害児をもつ母親が安心して子育てに専念できている
- *子どもとお年寄りが地域の公園や路地で楽しく交流しているなど。

2.3 つのアプローチ

結婚・出産・育児に影響を及ぼすハッピーファクターを(1)生涯健康(lifelong for health)の視点と(2)生活場所(settings for health)の視点そして、(3)制度・政策(institution・policy for health)の視点から、探ってみよう。

(1)生涯健康の視点から

結婚・出産・育児に対する人々の意識の高揚:結婚・出産・育児は、ライフステージの初期の課題ではなく、すべてのライフステージの課題であると認識を新たにすることが大切である。換言すれば、親の問題でもあり、祖父母の問題でもあり、子供の問題でもあるということである。さらに言えば、一生涯の問題であると認識することが大切である。

(2)生活場所の視点から

結婚した若者、子どもをもった若い父親・母親があらゆる場所で子育てを楽しみながら生き生きと生活できるような仕組みづくり・環境づくりを試みる事が大切である。そこで、家庭、職場、学校、地域でどのようなことに取り組みばいいのかについて、一つの提案をしてみよう。

1)家庭

家庭での目標は、結婚・出産・育児を家庭生活の重要な課題として位置付けること。

*母親の意識変革:育児ストレスで悩んでいる母親を支えるためのマニュアルづくり

*父親の意識変革:母親の育児ストレスに気付き支えることができるようなマニュアルづくり

*祖父母の意識変革:子育て(孫)支援が自らの健康支援でもあることに気付くようなマニュアルづくり

2)職場

職場での目標は、企業の経営者が従業員の結婚・出産・育児を支援することが生産性の向上につながるのだという認識をもつこと。

*企業の経営者の意識変革:育児休暇やボランティア休暇を社員が快くとれるような仕組みをつくること。それは、生産性を向上させるための基礎的なプログラムであると自覚すること。

3)学校

学校でのことは、直接的ではないが、子どもたちが将来経験する結婚・出産・育児の意義を人生の初期のころから学んでおくことは有意義なことと思われるので、ここであえて記述しておく。

学校での目標は、子どものうちから結婚・出産・育児の楽しさを体験すること。

*結婚の感動と楽しさを学ぶ

*出産の神秘さと楽しさを学ぶ

*育児の楽しさを学ぶ

4)地域

地域での目標は、若い母親・父親が地域の人との豊かなふれあいができるような地域社会づくりである。

*子育て支援のための自主グループの育成とそのネットワークづくり

*一声運動

*井戸端会議

*親子が自由に歩ける安全なまちづくり

*親子娯楽センターの整備

(3)制度・政策の視点から

エンゼルプラン、児童育成計画、母子保健計画など各種施策を整備すると共に住民参加による母と子を支援するプランを策定すること。

*結婚・出産・育児支援は、まちづくりの基礎的な柱に位置づけること

*結婚・出産・育児に関する総合相談窓口の設置

*市民参加型(経験者の協力を得て)の結婚・出産・育児教室の開催

参考文献

1)島内憲夫・助友裕子:ヘルスプロモーションのすすめ - 地球サイズの愛は、自分らしく生きるために -、垣内出版、2000.

D. 結論

今年度は、子どもの発育発達を保障し、親自身の生活の充実を視野に入れた子育て支援のあり方を検討した。

保育サービスや経済的支援などの直接的な育児負担の軽減を図る対策は不可欠なことであるが、これと同等に生活全般の利便性の向上、育児のみならず親自身の精神的サポートに対する要求も強い。さらに、保育現場や小児科医をはじめとする専門家からの育児や子どもの健康に関する知識を継続して得ることができるような情報提供サービスの充実、親個人に対する家族関係、精神面の相談体制などが地域や職場において設備されることが期待されている。

さらに、不公平感を排し、男女差別のない家庭、地域、雇用関係などの変革とともに、個別性を重んずる対応ができるようになることも必要であり、公的サービスにおいてもそのような意識がもりこまれることが必要である。